お局さまは１５歳？

藤沢みや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お局さまは１５歳?

【Ｎコード】
Ｎ７７７４Ｈ

【作者名】
藤沢みや

【あらすじ】
高校を卒業して吉野が就職した会社には弱冠１５歳の「お局さま」がいた。社長秘書として働く吉野だが、日々社長とのおいかけっこが日常業務。俺の存在意義って??? ドタバタホームコメディっぽいビジネス小説もどきです。（完結）

第一話（前書き）

この小説はある会社やさる会社やこんな会社がモデルになっているように見えるかもしれませんが、特定の会社とは一切関係ありません。予めご了承下さいませ。

第一話

◇

これは『エイプリル・フール』じゃないのか？
いや、エイプリル・フールであって欲しい。そうであってくれ、ぜひとも。頼む。お願いだから。
この願いは、株式会社匠（たくみ）工業に四月一日入社したすべての新入社員の願いであっただろう。
まさか、就業規則を説明する『この会社で、社長の次に一番長く勤めている社員』が……たったの十五歳の少女だとは……。

株式会社　匠工業
　従業員数　二六〇名
　資本金　　三千万円
　事業内容　金型・専用機・搬送装置・工作機等の機械設計、電気制御設計、試作・金型の製作
　決算　　　毎年三月
　所在　　　Ａ＊＊県北苑（きたえ）市猫ケ洞通町（ねこがほらどおりまち）三の一
　社訓　　　あかるく　なかよく　力いっぱい

◇

『こちら、総務、郁海（いくみ）です。吉野さん、現在位置の報告をお願いします』
耳元でガガガとの雑音が響いた後、機械を通した少女の声が聞こえてくる。本来なら彼女の声は、もっと澄んでいて聞き心地のいい高くやわらかい音をしている。だが、今はレシーバーを通しているせいで冷たい機械音声のようだ。
「こちら、吉野。現在七階の食堂入口付近にいます。どうぞ」
『先程、五階のマーケティング部給湯室で目撃証言がありました。ただいまから私と伊東さんで二階から回りこみます。移動手段を東階段からのルートにして下さい』
「了解」
ガガガという雑音を放って耳元のトランシーバーの音が切れた。
俺は小さく溜め息を吐く。
社会人になったというのに、俺の仕事はおいかけっこ。初仕事もおいかけっこ。入社一ケ月半が経っても変わることのない、仕事は鬼ごっこの鬼。
ふるっと頭を振る。
考え方を変えれば、走り回っているだけで給料がもらえるのだ。こんな有り難いことはないはずだ。うん。きっと。たぶん。とりあえずは。
一応、吉野は階段に向かう前に七階にある社員食堂とその奥の図書室を覗くことにした。
「おおう〜。吉野くん！　ご苦労様！！」
覗いた途端、呑気（のんき）な声がかけられた。
ピクリ。
顔が引き攣（つ）る。
主に口元付近がビキビキいっているのが自分でもわかる。
社員食堂の入口付近。いつもスープバーのスープウォーマーのあ

る日当たりのいい席で、紙コップの珈琲を飲んでいる吉野のおいかけっこの対象がいた。

匠（たくみ）　恭三郎（きょうざぶろう）　四十二歳
役職　代表取締役社長

　見た目だけ、黙っていれば、口を開かなければ、表情を浮かべなければ、本当にそのいつも適当なことを言う口をぎゅーーーーっと結んでいてくれれば、一応紳士にも見えないこともない男。
「ご苦労様じゃありません、社長！！」
　吉野は雄叫びを上げた。
　食堂で昼食の準備に明け暮れている社員食堂勤務の人達がぎょっとして吉野達を見ているが、一緒にいるのが社長だとわかるといつものことだと仕事に戻る。
　ガガガ。
『こちら、郁海です』
　ちょうどいいタイミングでトランシーバーが自己主張する。
　吉野は、ぎくりと体を強張らせて、椅子から立ち上がろうとする社長の首根っこを逃がすものかとひっ捕まえて、トランシーバーのボタンを押す。
「こちら、吉野。郁海さん、七階食堂、スープバーの傍で社長を確保。これから社長室まで連行します」
　声が冷たくなっても仕方がないと思う。
『吉野さん、一応、曲がりなりにも上司に対して連行という言葉は不適切です。心の中で思っていても、お連れしますと言うのが正しいのではないでしょうか』
　返ってきた声も冷淡だった。
　トランシーバーの声が洩れ聞こえたのだろう。
　恭三郎は唇を尖らせる。
　四十歳を越えたおっさんがやったところで、ちっとも可愛くなん

かない。
「行きますよ、社長」
ゼッタイに逃げられないように腕を組んで大の男を引き摺るようにしてエレベーターホールを目指す。
ぶーぶーと（本当に口で「ぶーぶー」と言っていた。いくつですか、アンタ）文句を言いつつも社長はおとなしく連行される。時間的にもおいかけっこが終わりということは、理解もしているのだろう。ちっ、質が悪い。
「なあ。郁海、怒ってた？」
その言葉に絶句する。
吉野がずっとトランシーバーで連絡を取っていた相手は我が社で一番仕事ができ、一番勤続年数が長く、一番社長が弱い相手……社長、匠恭三郎の愛娘。弱冠十五歳の『お局さま』である匠郁海である。
あの、トランシーバーを通した声音が聞こえていたのなら、娘が怒っているのなんか吉野に聞かなくたってわかるはずだ。
怒っている。
ゼッタイ。
しばらく、あの……マンガだったらおどろおどろ線が舞い『ゴゴゴゴゴ』という効果音が描かれ、顔は青黒くくすみ、口調だけは冷静で仕事を容赦なく増やすお局さまが召還される。
正直、あれは社長も怖いだろうが俺達同僚も怖い。
「自重された方が、御身のためですよ。社長」
社長は俺の返答に溜め息を吐くとリーンと鳴り響くエレベータの到着音に顔を上げた。
「……どうせだったら、秘書はパッツンパッツンのプリップリッのバーン・キュッ・ドーンがよかったなぁ」
そうしたら、美人秘書とあはははっうふふな花畑おいかけっこなのに～。とブツブツ呟く声が聞こえてきたが無視を決めこむ。
ああ、そう思うなら来年は部下を増やして下さい。

プリプリでもパツパツでも好きにして下さい。
匠工業、唯一の秘書室室員及び秘書室室長の吉野英利（よしのひでとし）はわざと聞こえるように盛大に溜め息を吐（は）き出して、毎日毎日懲りずに脱走を試みる、姿は大人、心はまるっきりガキんちょな社長の腕を抱き込んでエレベーターに乗り込んだ。

「お疲れ様です。吉野さん、社長」

社長室の扉を開けるとそこには郁海が穏やかな表情で立っていた。

怒ってる。めさめさ怒ってる。

オーラなんて言葉、信じたことなんてこれっぽっちもなかったけれど、今ならわかる。

今だって見えやしないけど、顔は穏やかで微笑んでいても郁海のオーラは怒りでドス黒いはずだ、たぶん。

身長は一五〇センチもないだろうと思われる、ちんまりとした匠郁海は黙っていれば少年か少女かわからない。

耳元は隠れているが、短くさらさらの黒髪が天使の輪を作っていた。きっと吉野のように寝癖で悲鳴を上げることなんかないかのような、ツヤツヤの絹の糸のような髪の毛。

顔立ちははっきり言って幼い。

ふっくらとした頬っぺに、眼鏡の奥のくりくりっとした黒目がちな瞳。

最初の新人教育の時、挨拶をする彼女を見て新入社員十五名は正体不明のお局に絶句していた。淡々とした表情で淡々と就業規則などを説明していく彼女は、学生から抜け出したばかりの吉野達からしたら大人びていて、でも若いと思う。実際の年齢は何歳なんだ！？と混乱に陥れる対象だった。

『この会社で、社長の次に一番長く勤めている社員』
そう言われれば、誰だってどう見ても十代にしか見えない童顔の人物が、本当に十代だとは思わないだろう。
昼休憩の時に真実を知った新入社員一同はみな、絶句したものだ。三十代の割りには童顔だよな……なんて、呑気に思っていた吉野は相当ぶったまげた。（なんで三十代かって思ったのはこの会社の創業が今から八年前。大学を卒業して入社して八年経ったら三十代だろ？）
そして、そのぶったまげたのは今も続いている。
「なんで吉野くんが先なの～」
「それはご自分の胸に手を当てて、よくよく考えて下さい。では、本来のお仕事に戻って頂きます。社長のお仕事は脱走ではございません。本日、午後三時の株式会社タカムラとの会議までには、ここまでの決裁を終えて下さい」
郁海は、机の上の書類の山から一番左の山を手のひらで指し示す。決して指差すことはしない。
社長が「へーへー」とやる気のない声を上げて自分の机に座る。匠工業の新社屋（しんしゃおく）は『新』と付く通り新しい。だが、この社長室に並んでいる調度品はどれも比較的古いものが多い。
その古いものはだいたいが年代物の逸品だ。
社長が座った本皮の椅子。マホガニーという高級木材でできた赤味がかった光沢のつるつるの机、本棚、サイドテーブル。来客用の牛革のソファセット。豪奢な文様の浮かぶ硝子テーブル。社長机の上にあるお飾りのランプなどなど。
機能性を重視した他の部署と比べても差は歴然としている。
特別な社長室。
社長は特別だから、社長の使う物は高級なのか。
貧乏が根底にある俺からしたら、この部屋はいるだけで息が詰まりそうになる。
その、高級なマホガニーの机の上には山のような書類が並んでい

た。広い机を埋め尽くす書類の山。
　郁海は特に急ぎの上の束を社長に説明していた。細く小さな体に白いシャツ、ベージュ色のベスト、ダークグリーンのネクタイ、こげ茶のスラックス。
　ぶっとい黒縁の眼鏡。
　そして、腕には燦然（さんぜん）と煌めく黒のアームカバー。二時間ドラマで見る昔ながらの事務員さんしか身につけない、あのアームカバー。
（売っているんだな、あんなの）
　初めて見た時に、素直に感じたのはそこ。
　本来なら、郁海が今説明しているようなことは秘書である吉野がすることなのだろう。社長の仕事が滞らないように整える。それが本来の秘書の仕事のはずなのに……
　吉野は未だ着慣れない背広を見下ろした。
　履き慣れない革靴っぽいビジネスシューズ。たった一ケ月半でかなり靴は痛んでいる。
　つい、二ケ月前までは学ランを着てのんびり高校に通って、授業中に居眠りをしていても放っておかれたのに、そんな生活が嘘のようだ。
「吉野さん。申し訳ありませんが、社長のお茶を煎れてきて頂けませんか？」
　扉の近くで立ち尽くしていた吉野は郁海の声に顔を上げた。
「あ、はい。社長は先程、珈琲を飲まれていたので紅茶か緑茶のがよろしいですか？」
　その言葉に匠親子はぱちくりと瞳を瞬かせた。
　こういう一瞬の反応が似ている時がある。やっぱり親子だ。
　しかし俺はそんなに変なこと言ったか？
「やっぱり吉野くんは目端（めはし）が利くね〜。緑茶がいいな。紅葉園（もみじえん）の北（き）苑（たえ）茶！　郁海の分もお願いね」
「わかりました」
　一礼をして、総務部に続く扉から退室をする。

俺は零れそうになる溜め息を飲み込んで、給湯室を目指す。
ドラマとかだとお茶を煎れるのは女性の仕事だった。お茶汲みって言葉は差別用語だって風潮もあるらしいと、この会社に入ってから郁海に教えてもらったのだ。
社会人になって一ケ月半しか経っていない吉野からしたら、どう違うのか、現実はどうなのかなんてまったくもってさっぱりわからないが、他の人が忙しそうに仕事をしているのに「お茶を煎れてきて」と言われるのは暗に「お前は仕事ができない」と言われているようで落ち込むんじゃないだろうか。
実際問題、俺は現在ばっちり落ち込んでいる。
俺が、秘書としてこの会社になんとか就職できたのはひとえに体力のおかげなのだ。
孤児院で育った俺はせめてものお礼にと小さな頃から新聞配達を走ってしていた。中学に入ってからは柔道にのめり込み、高校進学はスポーツ特待生として学費免除の上、奨学金まで出してもらった。学校の成績は、春夏冬の休みにバイトをみっちり入れるために、赤点で補習は受けたくなかったからギリギリ及第点というところだから決してよかったわけじゃない。
百八十二センチもある上背。
ちょっとやそっとの運動では疲れない持久力と逃げ出した社長を離さない腕力。
今まで社長と追いかけっこをしていた伊東さんが、腰痛で走れなくなったため代打が必要だったという。
歳は三つも下なのに、郁海は本当になんでもできるし、知っている。『お局』という言葉は伊達じゃない。
彼女がいれば、俺なんて不必要じゃないかと思う。この一ケ月半でしみじみと実感していた。
なんで彼女が秘書をしないのか。その方が娘を溺愛している社長はもっと仕事をきちんとやるのではないかと思う。
（だって、あの脱走は絶対に娘の気を引くためだもんな）

心の中で呟きながら扉のない給湯室に入る。
給湯室は各部署ごとに戸棚が別れていて、吉野は一番右端の戸棚から社長親子用のお茶セットを取り出した。
一度、急須と湯のみに湯を注いでから和紙が張られたお茶缶を取り出す。
湯のみの湯を捨てて、今度は飲む量程度のお湯を入れた。蛇口から熱湯が出るというのはやっぱり便利だ。そして適当に温（ぬる）くなったところで急須の湯を捨てて茶葉を投入。それから湯のみの湯を急須に流しこんだ。そして蓋をしてしばし我慢。
本当ならもっと丁寧に煎れたいところだが、会社でやれるのはこの程度だ。生ゴミを出すのは不可だが（カップラーメンの容器もゴミとして出すことはできない）茶葉に関しては捨てるのが許されている。だから、ペットボトルや機械が煎れたお茶を飲まなくていいのはありがたい。
地元のお茶（抹茶は北苑市の名産品だ）の北苑茶は、通常の緑茶よりも苦みが少ないが、でも、もっとお茶本来の甘みを楽しむ煎れ方をすればさらに美味しくなる。
吉野が高校の時までいた孤児院『ほがらか園』の園長はお茶に煩かった。一杯のお茶はその日のやる気を左右するが口癖で、小さい頃からお茶の煎れ方は仕込まれてきた。
緑の靄（もや）がかかったような濁ったお茶を湯のみに注ぐ。
お盆に乗せて社長室を目指す。
扉の前で二回ノック。
「吉野です。お茶をお持ちしました」
静かに扉を開けて中に入る。本来なら社長の了承を待つべきだが郁海と俺に関しては「いちいち返答するのが面倒だから、そのまま入ってこい！」という社長の鶴の一声でこういうことになった。
書類の決裁に忙しい二人に声をかけてサイドテーブルにお茶を置く。顔を上げて礼を言う二人に「いいえ」と答えて部屋を出る。
そして、もう一度給湯室に行って、今度は自分の分のお茶を煎れ

る。面倒なので蛇口から出てくる熱湯を先程の急須に注ぎ、サーモカップの中にぞんざいに流し込んだ。

サーモカップなのは、ずっと温かいままがいいとかそういうことではない。匠工業では社長室以外の職場ではペットボトルか蓋付きコップでなければならないのだ。紙コップでジュースや珈琲を飲む時はドリンクホルダーを使うか、キャビネットか引き出しか三段ワゴンを引き出して置くことになっている。

零れても絶対にパソコンにかからないように。

最初、その話に絶句をしたのだが設計部署で使用しているパソコンは四百万円以上するものもあり、会社がピリピリするのは仕方ない気もする。

四百万円もあったら車が買える。一台どころではなく、軽自動車だったら四台は買えるだろう。でもさ、一人で四台所持したら税金や駐車場代やガソリン代が大変なことになるよな……俺だったら車を買うより食料品が欲しい。心底欲しい。ご飯をお腹いっぱい食べれるなんて夢のよう。

いかんいかん、つい願望が垂れ流しだ。

全社サーバを使用している我が社では事務系の机の上にはモニタとキーボード、マウス、静脈(じょうみゃく)認証の小さな機械があるだけ。本体はない。こういうタイプのパソコンでも一台二十万円くらいはするのだという。

設計部署のパソコンは用量の関係もあり本体がある。事務と設計と両方をこなす人の机の上には両方のモニタ、キーボード、マウス、静脈認証キーがあり机の上はぎっちぎち。机の下も本体と三段ワゴンでぎっちぎちだ。

基本的にパソコンのあるデスクでの食事は禁止。お菓子や飲み物程度は今のところ黙認。

だから一階の会議室は昼間に女性社員に占領されることが多い。弁当持参の男性社員はなぜか職場ごとにある打ち合わせブースで食べることが多かった。しかも弁当を隠すようにして。

これは社長とのおいかけっこで知ったこと。

有り難いのか有り難くないのか判断に悩むところだが、社長を追い駆けているせいか、会社のいろんな人と知り合いになった。目撃情報を得るために話しかけ、必死に名前を覚え、部署名を覚えていく。

吉野はノートを自分のデスクの引き出しから取り出して、今日の出来事を書き写していくことにした。

背広のポケットに入れていたメモ帳を取り出して開くと、目の前に総務の畠山法子（はたけやまのりこ）さんが立っている。

「吉野さん、お疲れ様」

にっこりと笑って個別包装されたチョコレートをくれる。

「あ、ありがとうございます」

会社に入って思ったこと。

なんで女の人ってみんな、お菓子をいつでも机の引き出しに入れているんだろう。

「吉野さんのデスクトップが届いたから、一緒に取りに行きましょう」

その言葉に顔を上げる。

「うちはね、パソコンはレンタルなのよ。本当なら吉野さんが来たのと同時に届くはずだったんだけど、だいぶ遅れちゃって。届いたものはパソコンがないと困る部署の新人に優先して渡したものだから、遅くなってしまってごめんね」

手のひらを合わせて畠山さんが言う。

台車置き場にある用紙に貸し出し時間を書き込んでから台車を借りて、エレベーターで降りる。一階にある宅配発着場にある大量の箱の中から伝票を見て荷物を探す。

あった。という畠山の声のする方に行くと女性が運ぶには大きい段ボール箱があった。吉野は無言で段ボールを台車に乗せて彼女の先導に従って総務のある三階に戻る。

デスクトップ、キーボード、マウス、静脈認証キーだけとはいえ、

初めてパソコンを接続する吉野はいちいち畠山に指示を仰いでいた。マークとマーク、色と色。ＬＡＮケーブル。作業を止めてはメモ帳にちょこちょこと書き込んでおく。

「お。関心。関心。郁海さん流ね」

吉野が机の下に潜り込んだ状態でメモ帳を手にしていると畠山が頭上で笑う。

郁海流。

確かにそんな言葉がこの会社にある。

畠山はたぶん二十代後半。女性に年齢を聞くのは『セクハラ』だというので聞いたことはないが、まあ、そんな感じだろう。その畠山は吉野のことを一切「くん」付けでは呼ばない。

郁海のことも「郁海さん」と呼ぶ。

吉野も最初に総務部秘書室に配属が決まった時にそう習った。

曰（いわ）く。

「君（くん）という言葉は、現在では上の立場の者が下の者に対して使う言葉になっています。ですので、会社内では敬称として一切使わないように。本来ならお市の方の娘で、豊臣秀吉の側室お茶々は淀君（よどぎみ）ではなく淀殿（よどどの）と呼ぶべきなんです」

――例がわかりません。

そう言ったら郁海はあからさまに信じられない！　という顔をして吉野を見たものだ。

いつもいつも思うんだが、匠郁海は本当に十五歳なんだろうか……
……高校も行かずに会社で働く十五歳だなんて……

話を戻して。

その「くん」に関連して、匠工業では職付きの人間も職名では呼ばないことが徹底されている。総務部部長を「部長」と呼んではいけないのだ。社内の人みんながみんな「さん」付けで呼び合う。仲がいい場合はニックネームもありだが。

吉野のことを「くん」と呼ぶのは社長だけ。どの部署に行っても下っ端で社長を追い駆けて走り回る吉野にみんなが、ちゃんと「吉

野さん」と呼んでくれる。

だから、吉野もそれぞれの部署のお偉いさんを「部長・課長・係長・班長」などと呼べないので必死で名前を覚えるしかない。

部長・課長・係長って呼べるのって、楽だったんだな。はあ。

あと、もう一つの郁海流。

このメモ帳。

最初、配属された時にメモも取らずに覚えようとしていたら、郁海に注意されたのだ。

「メモも取らずに覚えられるとしても、メモは取るようにして下さい。教えた、教えていないという時の証拠にもなりますし、まず第一に教える側の心証が変わります。この人は真剣に覚える気があるのだと思えば真摯に教えます。聞く気、やる気のない態度は、自分のレベルアップを止める一因です。社会人になるということはその仕事のプロを目指すということ。些細なことでもプロ意識を保つためにメモは大事なのです」

……回想してまたまた心底思った。本当に本当に本当に（以下略）十五歳なのか、匠郁海……。

吉野は頭をふるっと振って作業に戻る。盗難防止のチェーンと鍵を付けて番号をメモする。鍵をかけたら次は鍵の方にパソコンのＩＤ番号を書いた付箋を貼る。

渡されていた用紙に鍵番号を書き込み、畠山に返す。

「あ、吉野さんのパソコンがようやく届いたんですね」

社長室から出てきた郁海が嬉しそうに手のひらを合わせる。

うわ。この笑顔は危険だ。

この一ケ月で三歳も年下の少女にこき使われることにすっかり慣れてしまった吉野だった。だから、この笑顔が『仕事を与えられる喜び』で浮かんでいることが察せられるようになった。

その時、総務部の電話が鳴る。

プププップププッププッ

この短い呼び出し音は内線だ。一ケ月半経って、ようやく内線か

外線かの区別がつくようになるなんて、遅過ぎだろう、俺。
「はい。総務部、郁海です」
前に電話で「もしもし。総務部です」と出たら注意されたな〜と思い出す。
曰く「電話はかける相手が『もしもし』つまり『申し、申し』というのだから受け取る相手が『もしもし』というのはおかしい」とのことだ。これを言っていたのはマーケティング部の自称『華麗なるヒットマン（俺の名誉のために言っておくが本人がこう名乗ったのだ、間違いなく）』曽我さんだ。しかし、社会人になるとみんなうんちくを語りたいのだろうか。
謎だ。
「吉野さん」
不意に呼ばれて振り返ると、郁海が両手に空の牛乳瓶を手にして仁王（におう）立ちをしていた。
「緊急事態です。四階の設計開発部・開発室に応援に行きます」
「は？」
牛乳瓶を持って？
ひとつを吉野に渡してから、早足で進み出す郁海の後を吉野は追う。
階段を上って、奥の部屋を目指す。
（この奥って開発室）
階段のところでＩＤカードをかざす。そして入口で、さらに中に入って開発室の入口でもＩＤカードを読み取り専用機にかざす。そして、部屋の入口にはテンキーがあった。郁海は手早く四桁の数字を叩き込んだ。
（うわーー、会社っぽい）
社長との鬼ごっこで走り回ってきたが、開発室の一組二組に関してはカードリーダーの傍にある内線で確認するだけで中に入ったことはなかった。
「厳重ですね」

思わず呟く。

こんなに厳重にガードをしているなんて、なんか重要な物を開発しているのだろう。スゲエ。

「ええ。無駄に厳重です。父が、開発室は四回ＩＤカードかざして、最後は扉がブシューーッと左右に開くのがいいとか言っていたのですが、三回で我慢してもらいました。はっきり言って社員には不評です」

郁海が苦笑してテンキーの上を手のひらで差した。

『暗証番号…０７９４』

そして、隣には鶯（うぐいす）のイラストが描かれていた。

セキュリティ……意味なし。

扉を開いて中に入ると、開発室一組の清水姫乃（しみずひめの）が顔を上げた。

「郁海さん、お願いします」

目の前にあるのは青く斑（まだら）な用紙の山。

いや、斑に見えるがよく見るとこれは図面だ。

「わかりました。清水さん、お手数ですが吉野さんにＡ３用紙の折り方だけ教えて下さい。Ａ１とＡ２は私が折ります。折った物はそのまま積んで行きますので、清水さんが分類して下さい。折る順番はありますか？」

「じゃあ、こちらの右端からお願いします」

「わかりました」

郁海は大きなテーブルの右端にふんわりとふたつ折りにされた大きな紙の束を持って移動する。そしてコピー機の引き出しから一枚Ａ４の用紙を取り出して、立ったまま、ものすごいスピードで畳くらい大きく見える紙を折り出した。

牛乳瓶でガッガッと折り目を作っていく。

牛乳瓶、そんな用途で使うのか。

「吉野さん、ごめんなさいね。宅配便で送った図面が、送付中に昆布醤油（こんぶしょうゆ）の瓶が割れてすべてダメになってしまったの」

昆布醤油……

だから図面を出し直して、すべて折って送り直すのだという。
「ところで、その宅配便業者との交渉はどうなりましたか？」
「ええ、もちろん全額負担して頂いて、青焼き(あおや)き用紙代も頂くことになりましたよ」
ふふっと清水さんが笑う。
「そうですか。それはよかった。もしそれ相応の対応をして頂けないようでしたら総務部にご相談下さい」
「ありがとうございます、郁海さん」
怖い。
清水は郁海と同じくらいの身長で、着ている服装も上にジャケットのように羽織っている作業服以外はレースやフリルがあしらわれている可愛い雰囲気の物だ。ピンク系の化粧が似合う、本当に一言で表すなら「可愛い」人なのに、なんか怖い。
怖いっつーか、これは怒ってる時のオーラだよな。
なんだか、この一ケ月半で、表面上は笑っているのに内面は怒り狂っている女性を察することが得意になったようだ。あんまり嬉しくない。
こういう時は口を開かずに作業に没頭するのみ。
A３の紙を図面側を内側にして半分に折り、そして図面右端の番号がわかるように片方だけ折り返す……。
吉野が一枚折る間に郁海はゴッゴッと豪快な音をさせて大判の図面を、図面折りという特殊な降り方で折り込んでいく。まるで職人のようだ。
しかし、なんで総務部から応援に来なくちゃいけないんだ？　開発室で起こった事故で、開発室にだって他に人がいる。全員でイッキに折ってしまえば早いんじゃないだろうか。
「清水さん、ありがとうね」
吉野達が図面を折っている傍を女性社員が三人程通り過ぎる。清水は顔を上げて微笑する。
「大丈夫よ。郁海さんと吉野さんも手伝ってくれているから」

清水さんと同じように私服の上に作業着を着た彼女たちは、小さなカバンを手にして部屋から出ていった。去り際の会話で「今日は火曜日だからアイスクリームが八十円均一なんだよね」「でも、太る〜」というのが聞こえてきた。

アイス？

ってことは一階のコンビニに行くのか？

だったら手伝えばいいじゃないか、と思う。

「吉野さん」

突然の呼びかけに顔を上げる。

そこには郁海が立っていた。

「吉野さんはわかりやす過ぎます。彼女たちがなんで手伝わないのかって思っているのでしょう？」

質問にこくりと頷く。お前はエスパーか？

「彼女たちは技術職です」

「技術職？」

「エンジニアなどを差していいます。彼女たちに庶務業務をやってもらう時間があるなら、技術がない者が庶務を行うべきなんです。わかりますか？」

「……いえ」

「端的に言えば、庶務や総務などは技術職や営業職などの専門職の方々が滞（とどこお）りなく仕事ができるようにするのが仕事です。よく、社員は会社の歯車といいますが、それで例えるならば私達は潤滑油です。ですが、卑下して言うわけではありませんよ。潤滑油がなければ、機械は壊れます」

「補助のエキスパートということですか？」

郁海の言葉に吉野は首を傾げて、言葉を続けた。

「メダルを獲れるような優秀な体操選手も優秀な補助のエキスパートがいなければ持てる力全てを発揮できない……高校の時、仲の良かった体操部員が言っていたんです」

武道場で柔道の練習をしていると、時折体操部員が場所を借りに

来ることがあった。インターハイを目指している選手とその補助をする体操部員。その二人の練習風景は対等で、会場で視線を集めるのは選手の方だが、披露される技は二人の共同のものなのだと俺と同じクラスの補欠の体操部員が言っていたことを、ふと思い出したのだ。

息を飲み瞳を見開く郁海を、学生時代を思い出していた吉野は捕らえることはなかった。

「その例えは素敵ですね」

郁海はにっこりと笑うと折り終った図面を置いて、次の紙の束を手にした。

郁海が紙を折る豪快な音が響く。

「吉野さんは、凄いわね」

「へ？」

一瞬、褒められた理由がわからなくて顔を上げる。

図面を分類していた清水が微苦笑を浮かべる。

「庶務や総務を軽く見る人達は多いの。私たちがいなければ仕事が回らないってことがわかっていない技術者さんは多くってね……。特に男の人はそういう人ばっかり。総務や経理に配属された人でそれが原因で転職する人って多いのよ。手に職を付けるって。庶務や総務の仕事だって立派に『手に職』なんだけど」

彼女は、手にしていた一覧にものすごいスピードで印を打っていく。確かに職人技だ。

「そのスピードは俺からしたら充分に職人の領域ですけど」

呟くと、目の前の彼女が吹き出した。

「だったら、郁海さんは神の領域よ。彼女の元で学べるのは本当に幸運だわ」

ふわりと笑って清水は「補助のエキスパートって素敵ね」と小さな声で自分に言い聞かせるように言った。

俺はそれに瞳を瞬かせることしかできなかった。

第二話（前書き）

この小説はある会社やさる会社やこんな会社がモデルになっているように見えるかもしれませんが、特定の会社とは一切関係ありません。予めご了承下さいませ。

第二話

インクの匂い。
紙の束の山が作る、少し乾燥した空気。
それが、小さな俺には宝物だった。

◇

例えば、子供だからわかることがある。
他人が本当に大変な時にこそ現れる、親切を装った、吸血鬼のように不当に他人の命と同等のものを奪うことができる人。
人間らしい感情を凍りつかせたかのような非道な人。
他人が深刻な事情の時に現れる、心配りをしているつもりで辛辣（しんらつ）で無神経なことを言ってくる人。
同情を醜い表皮に塗り込んで近付いてくる、閉店間際のスーパーで半額になって売っている魚よりも、もっともっと濁った瞳の『大人達』。

「会社が大変な時だからこそ、自分達の生活を考えて保険を選ばなくてはいけないわ」
――――会社が立ち行かなくなり、一万でも、五千円でも、三百円

でも、大事で大切なお金なのに……今までかけてきた保険を解約して割高な、自分が勤めている保険会社の保険商品を売り込もうとする販売員。

「そうは仰っても……当方にも事情がありまして」

表面上だけ人工甘味料のような甘ったるい色を浮かべているのに、本当に困っている時には融資を断る銀行員。

「俺達が、あの時どれだけ苦労したと思っているんだ!?」

泣く泣くリストラするしかなかったのに、自分の都合だけで嘆き叫び、玄関にペンキスプレーで落書きをしていく、昔、父が見込んで入社させた腕のいい印刷技術者。

小さな町工場は、不況に上手に立ち向かうことが出来ず……信頼していた保険勧誘員と銀行員に騙されて、結局は倒産を余儀なくされた。

父と母が、最後のツテを頼って、母の実家に出かけたその夜。

訃報が届く。

居眠り運転のトラックに追突され、会社の軽トラックに乗っていた二人は即死。

新しく入った保険のせいで大半の保険金は払われず、俺と妹、弟は親戚の勧めで施設に入った。

孤児院『ほがらか園』に入る時、三人一緒に入れたのは奇跡だと涙を零す叔母に言われた。

意外と、奇跡は身近に落ちているらしい。

思い出すのは、大切な人が灰と骨と水蒸気と煙になった日。

金のない俺達兄弟は、本当に身内だけで父母を見送った。せめて棺桶は少しでも綺麗なものがいいわ……と叔母が言ってくれて白木の装飾がされたものになった。通夜も葬儀もない、斎場で見送るだけの慎しさ。

その日は、天だけが本当の意味で俺達兄弟のために泣いてくれていた気がする。

第三話（前書き）

この小説はある会社やさる会社やこんな会社がモデルになっているように見えるかもしれませんが、特定の会社とは一切関係ありません。予めご了承下さいませ。

第三話

◇

朝、出社すると社長室のソファセットのテーブルの上には豪勢な重箱が並べられていた。

　ごま塩と青菜、シャケのふりかけの俵型のおにぎりには、丁寧にのりが巻かれている。（米だ米！）卵焼きもだし巻きと蟹と浅葱（あさつき）が入った和風の二種類、唐揚げ、ウィンナ、ほうれん草のおひたし、切り干し大根の煮付け、アスパラガスを牛肉で巻いて焼いてあるもの、ブロッコリーのたらこあえ、エリンギやしめじなどのキノコのソテー、さつまいものレモン煮、きゅうりの浅漬け、一口サイズのにんじんの掻き揚げ……

　ま、眩し過ぎる。

（たんぱく質なんて最近、食べてないなあ）

　朝ご飯を抜いた体は正直にぐう、と鳴る。

「これ、社長と吉野さん、伊東さんのお昼ご飯です」

　お昼と言っているのに、社長はタコさんウィンナをつまみ食いしていた。ちなみにカニさんウィンナもある。

　自分の腹の音に気付いたのだろう、郁海が微苦笑を浮かべて「吉野さん、朝ご飯食べ忘れたんですか？」と小首を傾げて聞いてくる。

「ね、寝坊して……」

　これは嘘。

　就職してから朝ご飯は抜いてばかりいる。

　もちろん、起きれないわけじゃない。会社には内緒だが、まだ朝の新聞配達のバイトはしているのだ。

　朝ご飯が食べれないのははっきり言って貧乏だから。

　貧乏というか、貯められるだけのお金を貯めているのだ。最低でも二十歳になる二年後まではある程度のお金は貯めておきたい。

「じゃあ、どうぞ」
郁海が小さな手で差し出したのは、重箱とは別のサランラップにまかれたおにぎり。
そのおにぎりはゆかりがまぶしてあり、紫蘇（しそ）の葉の浅漬けがのりのように巻かれていた。
「一応、今日は遠方の取引先に行って頂きますので、多めにおにぎりを作ってきたんです。夕方、お腹がすいたらその時は適当にコンビニとかで買って食べて下さいね。あ、領収書はもらっておいて下さい。必ず社名は株式会社匠工業でお願いします。前株はダメですよ」
郁海の言葉は続いていてが、いても立ってもいられず、思わずおにぎりに齧（かじ）り付いた。米だ。米。
——ああ、白いまんまは美味しいなあ。
園長がよく言っていた台詞（せりふ）を思い出す。
嗚呼、本当にうまい。
ちょっと泣きたくなる。
その様子を見て、匠親子は目くばせをしていた。

さて、なんでまだ十八歳の俺が金の亡者（もうじゃ）になっているかというと
……俺には妹と弟がいる。名前は桜良（さくら）と祥真（しょうま）。
三人して運よく同じ孤児院に入ることが出来た。でも、やっぱり三人一緒に暮らしたい。成人したら二人を引き取るのだ。
三人一緒に暮らせるようなアパートで、家電製品とか揃えたり、引っ越し代金や敷金・礼金などを計算をすると、そうとう気合いを入れて貯金をしないと追いつけないことがわかった。
だから、会社に内緒で朝も新聞配達をしてたりする。これって就

業規則違反だからバレるとまずいんだが。
でも、先月の給料明細を見るとそんなことにかまっていられない。吹けば飛んでいってしまいそうな少なさなのだから。（まあ、今は銀行振り込みなんで飛んでいくことはないけれど）
働いても働いても我が暮らし、楽にならざり。だっけ？
――昔の人はうまいことを言ったもんだ。
で、とりあえず一番生活費を浮かせられるのは食費。
ついでに電源入れっぱなしの冷蔵庫がなければ、電気代はかなり安くなると俺は考えたわけ。
だから俺の部屋にある、小さなもらい物の冷蔵庫は戸棚代わり。入っているのは百円ショップで売っている二缶百円の野菜ジュースくらい。ドラッグショップで安売りしている、カップラーメンは段ボールで箱買いして夕食にしている。一食百円未満なのは魅力的。
たとえ、飽きようと、まあ我慢をするしかない。
ちなみに俺の食生活と言えば。
朝　なし
昼　社員食堂のサラダバー二百十円
夜　カップラーメン
（醤油・塩・とんこつの三つをローテーション）
こんな感じだ。
憧れの白い米。ほかほかご飯に生卵、くる～りと醤油ってなんて贅沢品（ぜいたく）だったんだろう（涙、涙）。
はっきり言ってこの一か月半でたんぱく質と炭水化物のありがたさをひしひしと感じている。
麺類、飽きた。
マヨネーズ、見たくない。
体と心はそう訴えているし、実際に最近は食欲が湧かないけれど、懐が他のものを食べることを許さないのだ。
だけど、今日はお弁当だ。先程見た、豪勢な食事が待っているなんて、遠出万歳！！

「やだな〜〜〜。Gなんてしたくなーい」
車中、接待ゴルフに文句を言う脱走癖のある社長さえ可愛く見える。Gはゴルフの略。ゴキブリではなくてゴルフ。トイレのことを、スーパーでは二番と言ったりするようなものだろうか。
「なにを仰っているんですか、その服は郁海さんが選んでくれたんでしょう？」
運転手の伊東さんが穏やかな微笑で答える。
助手席にいる吉野は風呂敷に包まれた重箱を抱えていた。
今、事故に遭ったとしても、このお弁当は離さない。
「郁海が選んでくれたけど、これはあの子の意趣（いしゅ）返しだもん」
社長は「だもん」と言って口を尖らせるのがマイブームらしい。半年くらいで治まるので気持ち悪いでしょうが見過ごして下さいとは彼の愛娘の談。
「意趣返しですか？」
社長がこの「だもん」を発する時はたいていが話を聞いて欲しい時。だから、素直に聞き返す。
「郁海ってばいつもズボンだし黒縁伊達眼鏡だしアームカバーだろう？　他の社員だってもっとオシャレしているのに……十五歳の女の子の格好じゃないじゃん？　だからさ、ローズガーデンファクトリーに連れていって、服を買おうとしたんだ」
ローズガーデンファクトリー。
名前だけは妹の桜良（さくら）から聞いたことがある。名前の通り、薔薇や薔薇や薔薇だらけ（つまり薔薇しかない）の暖色系が多いひらひらぴらぴらのブランド。
いつもの服装からしたら、かっ飛び過ぎではないでしょうか？
と、聞き返したい気持ちを飲み込んだ。
社長はごろりと後部座席に寝転んだ。膝を抱えて丸くなる。急ブレーキを踏んだら、間違いなく転げ落ちる体勢だ。
「まあ、確かに郁海さんはいつも落ち着いた色合いの服ばかりお召しになっていますからね」

伊東さんはうまく社長が続きを話したくなるように会話を繋ぐ。心のメモ帳にメモメモ。

　社長の話を引き出したい時は否定をせずに、小さな同意部分を肯定するべし。

「だろう！？　あんなのおかしいよ。本当なら高校に行って、同学年の友達と笑って怒って泣いて、恋とかして……いやいや、恋なんてまだ早い。許さん。郁海はまだ俺のお姫さまなんだ！！」

　話が暴走してます。社長。

「郁海さんが大事なんですねぇ」

　ふふっと伊東さんが笑顔で呟く。

「お気持ちはわかりますよ。郁海さんは可愛らしいですからね。ですから余計に彼女には可愛い服を着てもらいたいという、社長の願いも理解ができます」

「だろだろ！？」

　上手い！

　園長さんなら絶対言う。座布団三枚！　って。

　伊東さん、逸れそうになったレールを上手に戻した。

　俺だけが社長の話し相手だったら、絶対に突っ込んでた。

（お姫さまって、あんた娘に夢を見過ぎ！　って）

　そんなことを言ってしまっていたら、確実にへそを曲げて拗（す）ねてしまっただろう。

　社長には郁海を貶（けな）すようなことは言ってはダメ。再び心のメモ帳にメモメモ。

「それで、ローズガーデンファクトリーに連れて行ったら……こんな実用性が皆無で薄くてぺらぺらしているのに何万もする服は仕事着ではいらない。どうせだったら青林（あおばやし）とか紳士服店に連れて行けだって～」

「郁海さんが青林に？」

　青林とは全国チェーン展開している紳士服メーカーだ。ライバル店に青波（あおなみ）という紳士服店がある。

「青林だったら女性物のスーツが揃っているから、仕事着ならそこで買うって」
「……ああ、郁海さんなら仰りそうですね」
「で、青林で買ったのがこれ」
自分の服を摘んで社長が苦笑いを浮かべる。
「そんなにピンクが着たかったらご自分でどうぞ。だってさ」
めそめそと鬱陶しく言う。
この人は本当に中身は子供だ。
「でも……郁海さんって黒は着ませんよね」
ぽつりと呟くと社長が起き上がった。
「そうなんだよ。瑞花さんが、郁海に『黒は誰かを弔う色だからあまり郁海に着て欲しくないわ』って言ってくれてね~。それがなかったら郁海は黒と紺とグレーのスーツばっかり着ていたはずだ」
黒は誰かを弔う色。
その気持ちは、なんとなくわかる。全身を黒に包まれると思い出してしまう、天が泣いた日を。
「それを防止するために、社長はスーツ着用を基本的に禁止にされたんですからね」
伊東さんがくすくす笑う声で、俺は泣く空の幻影から戻ってこれた。そういえば、自分がスーツ着用が多いからあまり気にしたことがなかったけれど、確かに他部署の人達はスーツを着ている人は少ない。
三種類の作業服の中から好きなのを選んで私服の上に着る。上下作業服でもいいし、上着だけでもいい。夏場は三種類のポロシャツから好きなのを選ぶのでも可。対人関係の部署以外は服装は基本的には自由。ただし、これは基本的にはであって細かい例外もある。
下駄禁止。
五センチ以上のハイヒール禁止。
対人関係の部署・仕事がある者のジーンズ不可。
サンダルなどは必ずバックストラップのあるもの。

マニキュアはナチュラルな色であること。業務に支障をきたす長さや派手なものは不可。
新人研修で聞いた時、正直に言って吃驚したのだ。下駄。これはきっと誰かが履いてきて禁止になったのだろう……
「七センチのミュールを履いていて階段から転んだ人がいたんです。しかもど派手な飾りのついたマニキュアをしていて手をついた時に爪まで割れました。それで、指先のケガと突き指、捻挫（ねんざ）で全治一週間。それが労災扱いですよ。仕事をする場に七センチものヒールのある履物を身につけてくる神経もわかりませんし、彼女は長いマニキュアでパソコンの電源を入れることもできず、箸で入れたり他人に入れてもらっていたそうです。それなのに労災……　職場をなんだと思っているんでしょうね、まったく」
とは『お局』郁海嬢の言葉。
社長、あなたの愛娘はお姫さまじゃなくて立派なお局さまです。
しかし社長は吉野のそんな心の声など知らずに「まあ、それも焼け石に水だったけど～。俺はいつになったら可愛い格好した郁海が見れるのかな～」などとぶつぶつ言っている。

車が着いたのはA＊＊県に程近いG＊県の山の中腹。
緑。緑。緑。
俺はゴルフセットを担いで車のトランクから降ろす。
「吉野さん」
伊東がちょいちょいと手招きをしながら吉野を呼ぶ。
「吉野さんはここにいて下さい。社長のゴルフセットは私が運びます……吉野さんは目はいい方？」
質問に吉野は拳を握り締めた。

「はい！　たぶん測れば三・五はあるだろうと医者に言われたくらい目はいいです！」
「じゃあ、社長のことをよく見ていてごらん」
「……はい」
　伊東さん、腰痛は大丈夫だろうか？
　そう思いながら、車の中からロビーで今日一緒にホールを回る取引先の人と談笑をする社長を眺める。
　社長は普段とはまったく違う神妙な顔で、集合した男達の間を回遊魚のように動き回り、全ての人と挨拶を交わしている。
　なんだか、取引先の人に機械人形のように頭を深々と下げていた父母のことが思い出される。
　やれやれ。今日はなんだか感傷的だ。
　溜め息を吐いていると、車の扉が開けられる。
　伊東さんがやれやれと零しながら車の後部座席に乗り込んで寝転んだ。
「すまんね。腰痛が酷くて」
「いいえ。整体とか行ってますか？」
「いいや。だって怖いじゃないか。整体ってボキボキやるんだろう？」
「俺がいた孤児院の園長さんが行っているところはボキボキやらないそうですよ。今度、場所を聞いておきましょうか？」
「効くの？」
「合うか合わないかはあるそうですが、腰痛でもどこが原因で起きているかわかるそうです。姿勢が悪いのか、骨格が悪いのか、体がどこか悪くて庇うためにそうなってしまうとか……そこは保険がきかないんでちょっと高いですが、一度行ってみる価値はあるって、園長さんが言ってました」
「……じゃあ、怖いけど、頼もうかな。悪いけど、場所を聞いておいてもらえるかい？」
「はい。わかりました」

生真面目に頷いて、メモ帳を取り出して書き込む吉野を見て伊東は微笑んだ。
「男はダメだね」
「はい？」
伊東の言葉に吉野は瞳を瞬かせた。
「病院嫌いが多いってこと」
「そうなんですか？」
「そうだよ……体調が悪いってわかっているのに、学生時代や二十代、三十代の元気な自分から脱却できないから、ぐずぐずと病院に行かないんだ」
「早く病院に行って元気だってわかった方が安心しませんか？」
「どうだろうね……平日の内科で受診したことある？」
「いいえ」
首を左右に振ると伊東は「ああ、まだ有給が発生してないからね」と微笑んで続きを話し出す。
「面白いよ。女性はどんな年代でもだいたいひとりで受診しに来ているのに、五十代とかの所謂団塊世代は奥さんと一緒なんだ」
「へ？」
いい年したおっさんが、奥さんの付添がないと病院に来ないのか？　うんざりとした。
「逃げ出すんじゃないかと見張られているんだろうね……社長も昔ね、虫歯ができて大騒ぎしてたんだけど、いっこうに歯医者に行こうとしないから、業を煮やした奥さんの瑞花さんが無理矢理連れていったよ」
先程も名前が出てきた奥さん、瑞花さん……そういえば、一度も会ったことがない。でも、社長の奥さんってそうそう会わないよな。
「まだ、そのころは会社も小さくて……吉野さんは本社に入ったことある？」
「いいえ」

「本社は新社屋の隣にある小さな工場と事務所が一緒になっている建物でね、中で十五名くらいがわいわいやっていたんだ」

　隣にある小さな工場だったら知っている。確か、今はそこでは事務業務は行わずにフライス加工や旋盤など一部の技工職が働いている。

「奥さんが経理と総務を担当していて、幼稚園くらいから郁海さんは会社にも顔を出していたよ……母親の真似で仕事を始めて……小学校に入ると同時に知識を増やしていってね。小学校五年生で秘書検定三級合格。六年生で秘書検定二級合格。パソコン検定にマイクロソフトオフィススペシャリスト、情報処理、トレース技能検定……たぶん、もっと持っているはずだけど、取れる資格はどんどん取っていたよ」

　資格か……いろいろあるんだな。俺も資格取得を考えてみた方がいいかもしれない。っつーか、でもそんな小学生はちょっと近寄り難い。

「彼女が、そんなふうに必死に資格を取るようになったのは母親と兄が小学四年生の時に亡くなったからなんだ……亡くなる直前に、お父さんのことをよろしく頼むね。って言われてから、郁海さんは懸命に母親の瑞花さんを追い駆けている」

　伊東さんは一旦黙って、顔を両手で覆った。

「瑞花さんは結婚前は大手のコンベヤ会社で第一社長秘書をこなしていたような才媛でね、実母の綾子さんに丁寧に育てられたせいか、仕事も家事もなんでも完璧な人だった。気立てもよくて、いつも自分を律しているような頑なな部分もあったが、でも心根はやさしい人だったよ。だが、子供が追い駆けるには母親の後ろ姿は大き過ぎた」

　伊東さんは重い溜め息を吐いた。手のひらで隠れているから表情はわからない。

「小学校四年生の女の子が、学校が終わると同時に会社に顔を出して経理や総務の仕事をこなして……まだ土曜出勤のあった頃だか

ら土曜日は潰れて、日曜日はお祖母さんの相手をして、家事をして……それが中学卒業まで続いた」

うーーん。どうして社長親子の軌跡を俺は聞いているんだろう。こういうのって所謂『プライベート』というやつで、俺の業務外な気がする。と、いいますか社内で他人のプライベートに口を出すというのは暗黙の了解でやっちゃいけないことだって郁海は言っていたのだが、その郁海の生い立ちを聞くのは、なんだかとっても悪い気がしてならない。

「これはね、社長からの君への仕事なんだ」

「は？」

「どうして、一番社長の近くにいることになる秘書に、秘書検定も持っていなくて、他社で働いたことのない吉野さんを選んだのか、不思議に思ったことはないかい？」

ぐっと詰まる。

それはある。

でも、単純に体力を買われたと思っていたのだ。

「年が近く、社会人経験もあまりない……そんな君になら、郁海さんの本心を聞き出してもらえるんじゃないかと考えているんだよ、社長は」

「本心？」

瞳が大きく瞬くのを感じる。

ゆっくりと伊東が起き上がった。

「本当は……高校に行きたかったんじゃないか……社長はそのことをとても気にしていてね」

窓硝子越しにまだ話を続けている社長を見やる。

「新社屋……本社と比べたら飛躍的に大きいだろう？」

「はい」

「奥さんが亡くなって、社長はがむしゃらに働いたんだ。まあ、団体行動ができなくて会社を興したような人だから、そのがむしゃらのせいでどうしても総務や経理の女性社員は長く続かなかった」

　それは、思っちゃ悪いかもしれないけどなんとなくわかる。俺は園長さんの自由っぷりを知っているので、なんというか耐性が少しばかりあったけれど……上司や社長に夢を見ている人には、その現実はだいぶ辛いだろう。

「郁海さんを幸せにしたくて働いているのに、結局は彼女を会社に縛りつけてしまった。彼の苦悩を私は間近に見ているから、余計に心配でね」

「でも、郁海さんはいきいきと働いているように見えますが」

　どう見たってイヤイヤ働いているようには見えない。

「……そうかい？　そうだったらいいがね」

　伊東はまた寝転がるとごろりと上を向いて目を閉じた。

「子供が自分の仕事を手伝ってくれる……跡を継いでくれる、助けてくれる……これは、男親にとっては僥倖なんだよ」

「僥倖……」

「思いもよらない、偶然の幸せ。現代は親の後を継ぐ子供は減っているからね」

　なんとなく、社長の気持ちが想像できる。

　子供が跡を継いでくれるのは嬉しい。嬉しいから彼女が働くことを否定できない。したくない。だが、本当なら彼女は高校生活を満喫しているはずなのだ、年齢的に。

　心の奥底では学校に行きたかったのでは？

　聞きたいけど聞けない本心を……俺に聞いて欲しいということなのか……

　お、重い。重過ぎる。

　プライベートな話をまったく遮断する郁海に無理です。無理。

「えーーと、人選間違いです」

「ボーナス上乗せするよ？」

　伊東さんは顔だけ横に向けてにっこりと微笑む。

「社長がね、ちゃんと聞けたら六月のボーナス上乗せしてもいいって」

うわ。さすが社長。俺の弱いところをよくご存知で。
だが、無理です。
「自分で聞けばいいじゃないですか！」
伊東はゴルフ場に向かって顎（あご）をしゃくる。
「ああいうふうに社会ではそつなく嫌な取引先の相手ができる社長にも、欠点はあるんだ」
「社長は欠点だらけだと思いますが」
ヤベ！　思わず本音が零れた。
だが、伊東は声を上げて楽しげに笑うだけで否定はしなかった。
助かった。
「娘が大事で手放したくない。嫌われたくない。臆病なんだよ……とても自分からは聞けない。だって、傍に郁海さんがいてくれる今が幸せなんだからね」
聞けば、壊れるかもしれない。
離れていってしまうかもしれない。
そんな、恐怖。
「子供は別人格。頭ではわかっていても……現実を直視したくない時だってあるだろう？」
「わかりますが……」
「さっきの失言。強請（ゆす）りのネタにしてもいいかい？」
「げ」
喉が詰まる。
やっぱり、社会は厳しい。
俺は、楽しみにしていた重箱が包まれている風呂敷を眺めて「最善を尽くします」と小さく答えた。

◇

さて、いきなり郁海に「お前、高校に行きたいのか？」なんて聞いても鼻で笑われるか無視されるに決まっている。
サラダバーのポテトサラダを突いて、吉野は苦悩する。
この会社の社員食堂は……正直言って微妙だ。
入社した時、昨年入社した先輩が何人か来て、それぞれの部署での仕事やアドバイスなどを話してくれた。その時の質問で「社員食堂はどうですか？」というのがあったのだが、その先輩はしばらくの間固まって「微妙？（語尾上げ）」と答えたのだ。
微妙？（語尾上げ）
今ならこの意味がよくわかる。
美味くはない。
これは確実。
まず。第一にうどんやそばのダシが魚系（いりこかいわし？）でしょうゆもなんだか辛いだけで、色は黒く、汁を飲み干すことが出来ない。これで三百五十円もするのだから問題だ。インスタントのうどんのがよっぽど美味い。
カレーとかは……まあ、普通？（これも語尾上げ）
まずくはない。だが、美味くもない。
中学校の給食のが断然美味かった。これだったらレトルトカレーのがゼッタイ美味い。
おかずは「青パパイヤとシークワーサーの酢の物」とか「切り干し大根とひじきの梅風味サラダ」とかなんとか、ふつうに「わかめの酢の物」「大根のサラダ」でいいのに変な一工夫をしてまずくして下さるのだ、この社員食堂は。
そして同じようなメニューが同じ曜日に出る。
極めつけに、高い。
正社員は給料に『食事手当』というものがあり、正社員、派遣関係なく同じ値段で食事をするのだが（実質手当てがつく分、正社員

は優遇されてはいる）だが、だが、だが、これだったらまだ一階のコンビニ弁当のがマシだ！　という味つけをしている。
本当に、微妙。としか言いようがない。
だが、吉野が食べているのは普通のメニューではなくサラダバー。生野菜やミニトマト、フルーツ、海草類がケースの中に入っていて、専用の皿に乗せ放題。厳しく見られていないので、実質はお代わりもし放題という、貧乏人の救世主、サラダバー。
ドレッシングも青じそ、中華、イタリアン、フレンチと四種類もあり、マヨネーズや味ぽんまで置いてある。
（だけどさ、毎日生野菜って辛い！！）
ポテトサラダやマカロニサラダ、かぼちゃサラダ、ごぼうサラダと日替わりでマヨネーズで和えてあるサラダも変わるが、味は画一的。
――昨日のお弁当美味かったな。
溜め息が零れる。
「吉野さん、ひとりなの？」
見上げると清水さんと、彼女と同じ部署の人達がいた。あの時、アイスクリームを買いに行った三人組。
「ここ、いい？」
はいと答える前に彼女たちは椅子に座る。
まあ、社員食堂はみんなのものだし、どこに座ろうと自由だ。だが、けっこう緊張する。年上で、綺麗なお姉さん達に近くに座られるというのは……。
「吉野さん、いつもサラダバーだよね？」
清水が自分のお弁当を広げながら聞いてくる。彼女のトレーの上にはお弁当と社員食堂の味噌汁。
「あ……はい」
「まさか、ダイエット？」
「そんなことないわよね～？」
「ははっ。毎日社長を追い駆けて走り回っているんだもの。食事制

限なんてしなくても大丈夫よ」
「サラダバーが……一番お金がかからなくて満腹になるんです」
サラダを突きながら溜め息を零す。
俺の言葉に開発部女性陣は瞳を瞬かせた。
そして、なんと言ったらいいのかわからないが……納得したという顔をしている。
「吉野さん、もしかして一人暮らし？」
「……はい」
エスパーか？　この会社はエスパーがいっぱいいる。
「一人暮らしって、最初はきついもんね……よし、お姉さんがお裾分けしてあげる」
清水は弁当箱の蓋をひっくり返して、主菜のハンバーグとにんじんのグラッセを乗せてくれた。すると他の三人も少しずつわけてくれる。
「え？　いいんですかっ？」
「いいの、いいの。一人暮らしって意外と物入りなんだよね〜」
「そうそう、就職したばっかりの給料で一人暮らしって本当にキツイ」
「うちなんて、旦那と共働きでもキツイよ〜」
吉野はふにゃっと笑みを崩してハンバーグに箸をのばした。
昨日、今日とついている。
いいや、変な調査依頼を入れるとついているとは言い難いが。
ぱくぱくともらったおかずを幸せそうに食べる吉野を見て、開発部女性陣は眉をひそめた。

（今日はラッキーだった！）

ほくほくと浮かれながら総務部に戻ると、仁王がいた。
仁王ってわかるだろうか？　お寺の山門とかに立っている怖い顔をした仏法の守護神。
ぐうううと、なにか郁海の唸り声のようなものが総務部の室内に溢れ返っている。
恐る恐る扉を閉めた。
見なかった振りが一番の平和的解決方法な気がする。
そんな吉野を見つけて畠山が室内から出てきた。そして、吉野の袖を引っ張って廊下を進む。
「どうしたんですか？」
「これ」
コンコン！とポスターのなどが掲示されている壁を叩いた。

辞令
総務部　匠　郁海を　六月一日付けで　副社長に任命する

「ヴワアァア！！」
吃驚した！ビックリした！！
「えええええぇ！？」
畠山を見ると、彼女は頬を押さえて「はあ」と溜め息を吐いた。
「私達もびっくりよぉ」
「いやいやいや。びっくりもびっくりですが、社長は郁海さんに嫌われたいんですか！？」
なんて無謀な！
そんなことしたら嫌われるに決まってるじゃないか。
「……どうしてそう思うの？」
畠山は、つ、と吉野の顔を見上げて首を傾げた。
「郁海さんは社長令嬢よ」
なんか頭の中に違和感が芽生える。郁海は会社の中で自分が社長の娘だということを、極力出さないようにしているように見えるの

だが。

「子供が親の仕事を継ぐのはよくあることじゃない？……でも、ちょっと、というかだいぶ早過ぎるけど」

　ちょっとどころかだいぶも合っていない気がするんですが……郁海は十五歳だぞ。十五歳。

「君達、なにをしているんだい？」

　気取った口調とイントネーション。自称『マーケティング部の華麗なるヒットマン』曽我龍樹（りゅうじゅ）、二十六歳独身。

　自称なので、自分で言っているのだ、このこっ恥ずかしいリングネームを。（いや、プロレスラーじゃないけど）

　いつもダークグリーンやこげ茶などのあまり一般的とは言い辛（づら）い、変わった色のスーツにその色に合わせたヘアバンドをしている人。

　色素の薄い髪の毛は郁海よりも長い。肩にかかるかかからないかの髪を左手でふわっと払う。瞳も色素が薄く、青灰色をしている。が、純粋な日本人だ。

「曽我さん……今は総務部に入らない方がいいですよ」

「なになに？　郁海ちゃんが怒ってる？」

　ワクワクという言いながら両の拳を上下に振っている。

「怒ってますよ。今近付くと、黒こげになりますよ～」

　畠山さんが「ちちち」と呟きながら人差し指を左右に振る。

「でもさ、簡単に考えればこの辞令が出たってことは、郁海ちゃんを口説き落とした奴が次の社長ってことでしょ？」

「は？」

　更に突拍子のない台詞に瞳が零れ落ちそうになる。目がシバシバする。乾き過ぎで目薬が欲しいくらいだ。

「さすがに十五歳はストライクゾーン外だったんだが、本気で考えてみようかな～」

　うっふふ～と人差し指で空中に円を描いている。確かにヒットマンだ。この人は間違いなくヒットマンだ。場を凍らすことが的確にできる。

「ちなみに、それまでのストライクゾーンは何歳だったんですか？」
「十六歳！」
陽気に答えて振り返った曽我は体を強張らせた。
当の本人が扉から顔半分を出している。
質問者は噂の社長令嬢。
「お従兄さま」
郁海が不気味な笑みで口元を歪めて呟いた。
「会社ですから、本来の親戚筋の関係でお呼びするのはやめようと思っていたのですが……やはり、これからは『お従兄さま』とお呼びしようと思います。いかが？」
黒縁眼鏡の奥の瞳がギラリと輝く。
「すいません。冗談！　冗談だよ、郁海ちゃん」
「……お従兄さま？　それとも幼い頃のようにお従兄ちゃまのがお好みですか？」
郁海の周囲の温度がみるみる下がっている気がする。シベリアにいるようだ。それともスウェーデン？　フィンランド？　アイスランド？　南極、北極でもいいかもしれない。バナナで釘が打てて、睫毛が凍りそうな雰囲気だ！　オーロラが見える！
「大変申し訳ありませんでした。郁海さん」
「わかりました。曽我さん」
ようやく温度が気持ちだけ上がった。
ああ。息苦しいのは変わらないが。
「すいません。という言葉は会社では謝罪の言葉にはなりません。すみませんも同様です。マーケティング部という社外の方ともお会いすることの多い部署にいらっしゃるのですから、注意なさって下さい」
「はい……あ、でも今は昼休みだからいいだろう？　郁海ちゃん。あれ、本気？　郁海ちゃんが了承したとは思えないんだけど」
なんて立ち直りが早いんだ、曽我さん。さすが社長の血縁。この打たれ強さは尊敬に値する。打たれ強さ『だけ』だが。

曽我は、社長の姉の子供だ。郁海が会社に顔を出すようになる前には、よく一緒に遊んだのだという。
「私が了承するわけないでしょう。父の独断です。私は、サラリーマンでいたいんです！！　社長業のような気苦労などしたくありません。給料日にきっちり給料のもらえるサラリーマンほど素晴らしい職業はありません！！」
郁海は拳を強く、ただでさえ白い肌がさらに白くなるくらい強く握り締める。
「だよなぁ。ずっと言っていたもんなぁ〜。で、伯父さんに説教でもすんの？」
気心の知れた従兄弟と話しているせいか、郁海の口調がお局口調からやや崩れた。それにものすごく新鮮な気分になる。
「説教して聞くとは思えませんが、私の腹立ちが治まらないから説教は致します。そして目標は即時撤回です」
むん！　と気合いを入れて郁海は両の拳を握る。さすが親戚。ポーズまで血が関係しているのか似ている。
「とりあえず、掲示されている辞令を回収します。吉野さん、お手数ですが手伝って頂けますか？」
「あ、はい」
「私も手伝おうか？」
畠山が自分を指差して苦笑いを浮かべる。
「いえ、畠山さんには恐れ入りますが辞令文書の元データの更新日時を確認して頂きたいんですが……もし、この辞令文書が保存されていたら、最終のアクセス者が誰かもわかりますから」
「伊東さんだと思うけど」
「あ、俺も伊東さんだと思う」
畠山と曽我がさらりと言う。
「やはり」
郁海も顎を撫でさすって頷く。っつーか、顎をオジサンのように撫でさするな、十五歳。ふっとした気配のようなものを遠くに感じ

て目を凝らすと……そこには。

「あ、社長……」

よく見たら、社長は唇に人差し指をあてていた。

やべ。

きっと、これで上手くなんで高校に行かないのか聞き出せたとしてもボーナスは消えたな。

だって、社長がいたのは普通の人だったらぼんやりとしか見えないような遠くで、判別までは難しい位置。俺が声を出さなければ見つからなかっただろう。

あの顔を見て確信。

この辞令騒ぎは社長流の愛娘への愛情表現。愛ある悪戯（イタズラ）。それにしてはとにかく質（たち）が悪いが。

「吉野さん、取っ捕まえて下さい！！」

「はい！！」

短くハキハキ、元気よく返事が出てしまった。もう、この一ケ月半の習性としか言えない。

俺は勢いよく走り出した。主犯格を捕まえるために。申し訳ありません、社長。俺は給料を払ってくれる社長よりも、俺の仕事で主に関わる郁海のが怖いんです。

社長が猛ダッシュをかけたが、元柔道部員、現役自転車（ケッタ）（注・Ａ＊＊県の方言）の新聞配達員を舐めるな！！

俺は、いとも簡単に社長を捕獲することに成功したのであった。

◇

「社長、我が社が４Ｓを推進していて、他の大手企業で使われてい

る5Sを使用しないのはなぜかご存知ですか？」
絨緞（じゅうたん）の上に正座をして凛（りん）と背を伸ばした郁海が、瞳を眇（すが）めて尋ねる。
「もちろん、4Sがなにかは把握されていらっしゃいますよね、社長？」
郁海は機嫌が悪いと、ことさら強調して自らの父親のことを『社長』と呼ぶ。他の者に対しては営業スマイルというか、対会社用スキルが崩れることのない郁海が、唯一父親に対しては感情のブレが起きる。
こういうところは子供だと思う。
甘えているんだと思う。
俺の弟や妹のような、素直な甘え方じゃないから可愛くないように見える。だが、いつも背筋を伸ばして、完璧を目指しているような頑ななヤツが、ひとりに対してだけ感情がブレる姿は、俺には可愛く映る。
「整理・整頓・清潔・清掃」
指を折りながら、ひとつひとつゆっくりと放つ言葉。
郁海の目の前で座らされている社長は大きな体を小さくさせていた。
「この四つの頭文字を取って4Sといいます。5Sにするにはこれに『躾（しつけ）』が加わります。躾です。躾。社長、躾って言葉ご存知ですか？　大変申し上げにくいことですが、社長が社長でいる限り、当社では5Sを普及できません。あなたを見る社員に対して、躾が大事だとはおこがましくて申し上げることができないの、おわかりですか！？」
「なっ！　酷いよ、郁海」
「第一、このような勝手なことをされるような方がトップにいるのならば『ホウレンソウ』が重要だと言うのも、憚（はばか）られます。覚えておいでですか？　わたくしにホウレンソウがどれほど大事か諭されたあの頃を」

「郁海はまだ小学生で、ちっちゃくて可愛かったよね～」
社長と呼び、一人称が『わたくし』になる。
郁海は電話応対や目上の者に対して一人称を変えている。普段仕事上で会話をする時はさすがに『私（わたし）』だが。男女関係なく、一人称は私かわたくしを用いるべきだと言われたので、俺も極力気にはしている。
こういうふうに、会社用の言葉を容赦なく父親に使う時の郁海は、相当怒っている。
「サイズの話は申し上げておりません」
寒さがぶり返してきた。
「……郁海、怒ってないで仕事しようよ」
「そういう、ご自分が不利になると仕事でごまかそうとなさるところは、本当っに、お変わりになりませんね」
「いや～」
社長は頭を掻いて笑う。
「社長、郁海さんはまったくもって、全然褒めておりません」
ピリピリと、血管が浮き出て切れてしまうんじゃないかという鬼のような形相をしている郁海を少しでも牽制するために横槍を入れる。
恐ろしい言葉だ、横槍。
槍を持って戦うというのは、本当にこれくらい怖いのだろう。正直言って、やらなくて済むならしたくない。だが、この親子の一方的な子から親に対する説教は誰かが止めないと、周囲が迷惑を被るのだ。
娘は辛辣な説教で溜飲（りゅういん）を下げ、父親は『ちょっと手厳しいけど親子の対話をしちゃった！』くらいにしか思っていないのだから。
「お。吉野くんは日本語上手いね。うんうん。『全然』という言葉に続く言葉は否定形であるべきだね。『全然大丈夫』って言うのはもっての他！　全然が付くなら『全然大丈夫じゃない』となるべきで大丈夫なら『まったく大丈夫』もしくは」

うんちくでその場をごまかそうとした社長は「社長」という郁海の冷えきった声で体を強張らせた。
うーーむ、作戦失敗。
返って郁海を怒らせてしまった。
「吉野さん」
「はいっ！！」
矛先がこっちにきたか！？　と思わず直立不動になる。
「ホウレンソウの意味を仰って下さい」
「ホウは報告、レンは連絡、ソウは相談。この三つを合わせてホウレンソウになります。部下と上司にとって、仕事上でとても大事なことで、互いに報告・連絡・相談をせずに自分だけで勝手に考えて動いたり判断したりしてはいけない。特に部下は些細なことだと自分勝手に思わずに、どんなことでも上司に報告・連絡・相談しなさいということです」
「はい。ありがとうございます」
膝に手を当て、郁海は目の前の社長を真っ直ぐに見つめる。
扉の前で直立不動な俺を見る気配はない。
「社長。わたくしは今回の辞令について、まったくなにも聞かされておりません」
「うん。今日の午前に思い付いたんだもん。だから郁海にはなにも言ってないよ」
あっけらかんと返ってくる言葉に郁海は眉をひそめた。
「社長、わざわざ郁海さんを怒らせてどうするんですか……」
思わず零れる。
うわ。
しまった、と思うがもう遅い。ひっくり返したお盆に乗っていた水は帰ることなく、俺が放った言葉も口の中には戻らない。
「怒らせるつもりなんてある訳ないだろう！　こんな大きな会社の副社長だぞ！！　嬉しいに決まっている。まだ年齢的には早いかもしれないけど、もう郁海はこの会社の正社員だし、誰にかまうこと

なく後継者になってもおかしくない」
最初は語尾が強かった社長だが、どんどんと自信がなくなるのが言葉尻は小さくなり、最後の方ではごにょごにょと言っているだけだ。
郁海は父親のその言葉に瞳を見開いて、そして唇を噛んだ。
小さな手がスラックスをきつく握る。シワができるって。
「兄が、生きていたら……わたくしに会社を継がせようとは思わなかったでしょう？」
郁海は視線を逸らして言う。
片頬を覆うように手のひらで隠し、大きく肩を動かして荒い息を吐き出した。
「社長。長々と失礼致しました。先程のお話はお気持ちはありがたく思いますが、お断り致します。そろそろお仕事を再開なさって下さい」
郁海は自分のスラックスの埃を払って立ち上がった。
そして、父親の顔を見ようともせずに部屋の扉に向かった。俺は慌てて彼女を通せるように横に退く。
「郁海！？」
父親の悲鳴のような呼びかけに答えることなく、郁海は丁寧に一礼をして「失礼致します」と扉を開け出ていく。乱暴に扉を閉めたり、震えるように弱くなったり、そんな感情は一切現れてこない。パタリと静かに閉められた扉を見つめて、残された社長は呆然としていた。
えーーと、と俺は考えた。
だが、俺に残されているのはふたつにひとつしかない。
覚悟を決めて社長の家のプライベートに踏み込む。か、仕事上なんだからと表面上の態度を取り続ける。か。
でも、考えるまでもない。もう実際問題、片足突っ込んでいるのだ。
社長がいなければ、秘書である俺がこの会社で秘書をしている必

要はない。郁海がいなければ、なにも知らない俺は秘書の仕事を続けることはできない。
いつもにこにこ仲良し親子でいる必要なんてまったくないが、でもある程度は仲良くないと、秘書としての俺の仕事が捗（はかど）らないのだ。
それは困る。
毎日毎日、会社に来て嫌な雰囲気のなか、最低でも九時間（八時間勤務&休憩時間の一時間）は過ごさないといけないなんてそんな生活嫌だ！
嫌だからと言って転職なんて、できるわけがない。自分に郁海並みのスキルがあるならば履歴書が埋まって採用も上手く行くかもしれないけど、高卒・入社二ケ月もしないで転職なんて……できるわけがない。正社員として採用されずにアルバイトや派遣になるしかない。それもなれるかわからない世の中だ。それ以前に給料がなくなってアパート代が支払えずに追い出されて……いかんいかん。想像が光よりも早く進んでしまう。
そんな困る未来はとりあえず置いておいて、現実問題を解決するしかない。
嫌な毎日を送らないためにはどうしたらいいのか？
嫌だと思ったら動くしかない。自分が変えていくしかない。自分が変わるしかない。
俺は呆然としている社長の前でしゃがみ込んで強く言った。
「社長、業務命令をして下さい」
「は？」
「私は社長の秘書でしょう？　だから命じて下さい。『総務部の匠郁海が辞令を拒否する理由を明確にしろ』と！！」
社長は俺を見上げて、そして苦笑を零した。
そして、足を崩して天井を見上げた。
「郁海には兄がいたんだ。海斗（かいと）といってね、郁海と三つ違う」
「俺と一緒ですね」
「うん。だから、君を選んだんだ」

そのまま社長は寝転がってしまう。
「瑞花さんと一緒に交通事故で亡くなったよ。郁海はよく会社に顔を出していたから社員とも仲が良かったが、人見知りの海斗はあまり会社に来ることもなくてね……。社員の中には海斗がいたことを知らないヤツもいた」
それは初耳だ。
「私は、会社でいつも海斗が次の社長になるのと、郁海の花嫁衣装を見るのが楽しみだって言っていた。小さかったけれど郁海は覚えていたんだな」
瞳を閉じて、社長はふふっと自嘲の笑みを零した。
「……社長、ひとつ聞いていいですか？」
「なんだい？」
「本気で、郁海さんを社長に任命するつもりなんですか？　今じゃありませんよ……何年後かもしれません。いつかは関係なく、あなたが社長を彼女に継がせる意思があるのかが知りたいんです」
「ないよ」
あっさりとした短い返答に気が抜けた。
「は？」
正直に言って頭が痛い。
「だって、今時さ血統でどうのこうのって、無理だって。こんだけ大きくしちゃった以上、会社はもう生き物だ。こんな生き物を御すには自分のほとんどを使わなくちゃいけない。そういうのはさ、娘にさせたくないよ。郁海はさ、可愛くないことばっかり言うけど、俺には世界で一番可愛いんだ。だから、俺がこいつなら任せられると思う男に嫁いで、幸せになってもらいたい」
そういうことは娘に言え。
そう思ったが、とりあえず黙る。
「もし……もしもですよ、郁海さんが会社を継ぎたいと仰ったらどうされますか？」
社長は機械人形のようなぎこちない動きで俺を見上げてきた。そ

して微笑する。
「郁海が社長になる実力を備えていて、その時に他の社長候補を凌駕するなら許可する。だが、二百六十名以上の社員の生活を双肩で担うにはそれ相応の覚悟が必要になるな」
「だったら、娘の気持ちを確かめるために副社長に任命なんて辞令を出さないで下さい！！」
　俺は叫んだ。
　叫んでもバチは当たらない。
　ゼッタイ。
「だって、郁海はさ……もう甘えてこないんだ」
　頬を膨らませてぷいっとそっぽを向く。
　これではどちらが子供で、どちらが親かわからない。完全に俺には郁海が保護者に見える。
「社長、無自覚ですか？」
　溜め息が零れる。
「俺は、この一ケ月半の間、社長の下、郁海さんの元で仕事してきました。彼女はいつだって社長の娘じゃなくて総務部一社員としてこの会社で働いている。でも、社長と話している時はその仮面が剥れ落ちているんですよ。微妙にわかりにくい甘え方ですが、彼女は彼女なりに甘えていると思います」
　俺の言葉に社長は起き上がって、呆然と見つめてくる。
「社長、郁海さんに反抗期ってありました？」
「……いいや」
　ゆるゆると社長は首を振る。
　まったく。
　俺は遠慮なく溜め息を吐き出した。
「それがないって不自然ですよ」
「俺は、反抗するような親がいなかったから経験せずに過ぎちゃいましたが。たぶん、今が反抗期じゃないんですか？　ホルモンのせいなんです。素直に甘えてこなくなったのも全部。あなたを嫌って

いるのならば、郁海さんは正社員になる道を選んではいないない。それくらい、わかってあげて下さい」
さっきからずっと、会社用の一人称の『私』が、普段の『俺』になっているが仕方がない。
吉野の目の前には、パチパチと音がしそうな程に、大きく瞬く男の瞳。
「社長。郁海さんが行きそうな場所の心当たりは？」
「たぶん、七階の図書室か、屋上の奥のベンチ」
「嫌っている親に、自分がよく行く場所の話なんてしませんよ。郁海さん本人が教えてくれたんでしょう？」
「……うん」
こくりと子供のように頷く社長を見て、俺は立ち上がった。
「俺がこれから動くのは社長の業務命令ですからね！」
見下ろして念を押すと、社長はようやく生気を取り戻した。そして、いつもの強気な表情を浮かべる。
「吉野くん、命令だ」
「かしこまりました！　じゃあ、俺は郁海さんを連れ戻してきます。その時に彼女を怒らせないように、ちゃんと、ここで、きちんと仕事をしていて下さいね！！」
俺は笑って、扉を目指しながら社長の高そうな机を指差して郁海のように言う。
それに社長が微苦笑を浮かべた。
「失礼します」
一礼をして扉を扉を開けた。
そして、自分にとっての上司を探すため、静かに目の前の扉を閉ざした。
扉の奥で「あーあ。郁海に似た部下ができちゃったよ」と肩を竦めた社長がいることを俺は知らない。

第四話（前書き）

この小説はある会社やさる会社やこんな会社がモデルになっているように見えるかもしれませんが、特定の会社とは一切関係ありません。予めご了承下さいませ。

第四話

◇

誰かに、会社に必要とされるって、なに？
たとえ、今は私のことが必要だと言ってくれても、所詮は代えなんていくらでもいる。
どれだけ優秀な人だって、やめてしまえば穴埋めはされる。
この人がいなくなったら立ち行かない部署なんて存在しない。
特定のある人が辞めたらなにもできない――――そんな状態を作り出してしまったら、それは会社ではない。

御社に必要とされる人材となれるよう努力致します……なんて入社試験で言う人がいるけれど、会社が必要としているのは人材であって『あなた』ではない。
その区別ができない人は、残される人達の迷惑を省みることなく、自分を必要としてくれる会社を追い求めて、二の舞を演じるため、一度目の舞台を降りる。
会社という目に見えない生き物に必要とされるため、自分を隠して、押さえて、堪えて……そんな毎日の過ごし方を甘受する。
そんなの最初のパワーバランスが間違っている。

誰かに……会社に、必要とされるってなに？

必要とされるんじゃない。
居場所は作り出すもので、仕事は能力を上げて奪い取るもの。
受け身でいたって理解してくれる人なんて会社では現れないし、見つけることも難しい。
だからと言って、アクティブに攻め込み過ぎれば孤立して仕事が回らなくなる。煙たがれて遠巻きにされる。
学校と違って、年代も性別も出身地も、なにもかも違う人間が集まるのが会社なのだ。
突出せずに自分の仕事を終えて、次に回す。仕事は巨大な工場のベルトコンベヤーのようで、次から次へと押し寄せる。前工程(まえこうてい)、後(あと)工程(こうてい)を考えて、余計なことをし過ぎないように周囲を見渡して、自分の仕事を最小の能率でなし得るのが仕事。
その仕事を終えるのに、頼っていいのは基本的には自分で、他人を頼るか判断する能力を身につけて頼るのならば、結局はそれは他人に頼っているのではなく自分の能力に頼っていることになる。
やってくれたら助かる。
でも、その頼る部分を全面的に相手に任すのはしてはいけないこと。
戻ってきたものは必ず確認するし、納期を考えて頼んだ相手が、きちんと処理をしてくれているか把握するのも自分。
それならば、仕事を分けるのであって頼るのとは違う。
誰かに頼って、甘えて、大事にされて……そういうのは能力の

ない子供がされるもの。
実年齢ではなくて、精神年齢が子供。
そういう人達は、学校を出ようが、会社で働こうが……自分の両足で大地を踏みしめて立つことはなく、誰かに頼る。
人という字は二人が支え合っている。
そんなの、嘘。
人だって入だって、結局は損をしているのは低い人。どう見たって長い人が低い人に伸し掛かっている。
そうとしか見えない。
そういうのは、好きじゃない。
私は、誰かに必要とされたいわけじゃない。
私は私でありたい。
そのために、自分の能力は最大限生かしたい。
なのに、年齢だけのせいで『与えられるだけの子供』でいろというのは理不尽な話だ。
能力があるのに子供でいろと強要される。
自分で、自分に能力があると言うのはおこがましいけれど、でも……子供でいろというのは、私にとっては重く苦しい足枷でしかありえない。

第五話（前書き）

この小説はある会社やさる会社やこんな会社がモデルになっているように見えるかもしれませんが、特定の会社とは一切関係ありません。予めご了承下さいませ。

第五話

◇

まずは七階の図書室を目指す。
図書室と言っても、社長や郁海が読み終った本を寄贈していったのだという。なので棚はまだガラガラ。新社屋ができた頃よりは社員がいろいろ寄贈してくれたから増えたのだとはいう。
基本的には貸し借りは自由。
透明なフィルムが貼られ、裏表紙裏には紙のケースがありカードが一枚。名前、貸し出し日付けを記載して入口にある箱に入れる。図書館司書はいない。ちなみに社内に図書委員もいない。貸し出しも返却も自己責任というわけだ。
全面硝子張りで、食堂からは図書室が丸見えだ。
中に、郁海と壮年の男性が一緒にいる。
あれは、運用管理部の部長、曽我康臣（やすおみ）氏。華麗なるヒットマンの父親だ。あれを作ってしまった人物。社長の姉の夫。
なんか、近付ける雰囲気じゃないよな……。悩んでいると郁海が一礼をして図書室から出てきた、そして俺に気付くこともなく奥の西階段へ向かってしまう。
あ。
これで見失うと困る。
だが、曽我氏は図書室の中で立ち去った郁海の方向をじっと見つめている。あの前を通るのは……。
俺は身を翻して東階段を目指す。
エレベータは七階までしか止まらない。屋上に行くには階段を使うしかないのだ。
途中で自販機に気付く。
郁海はあまり市販のジュースを飲まない。だが、この自販機のプ

リンシェイクは気に入っていた。あまり振らずにプリンぽさを残して飲んだり、思い切り降り続けてドロドロにして飲んだりといろいろ試していた……そういうところは子供っぽくて微笑ましく思ったものだ。

　俺は懐が痛むがなけなしの百円玉を投入した。

　社内で買うとジュースが割安になる。ありがたいことです。

　冷たいジュースを手にして屋上を目指す。

　逃げられても困るのでそっと扉を開くと、そこには別の壮年男性と一緒にいる郁海がいた。

　相手は……経理部の部長、北条さん。

　なんで曽我氏と北条さんが？

　ちなみに呼称の『さん』と『氏』は、ヒットマンを『曽我さん』、父親である運用管理部部長を『曽我氏』と呼び分けているだけなので北条さんより曽我氏のが偉いとかそうことはない。他意はないのだ。

　郁海が一礼をすると北条さんは西階段から下に降りていった。

　なんか、不穏な空気を感じるのは気のせいだろうか……

　郁海は頭を上げるとフェンスに近付いて、そして俯いた。

　高い高いフェンス。

　菱形に世界を区分けする。

　見下ろす世界は、菱形の平凡な日常。

　泣いているのだろうか。

　郁海はフェンスに額をくっつけたまま微動だにしない。

　俺は立ち竦（すく）んでいても仕方ないと、覚悟を決めて一歩を踏み出した。なにごとも肝心なのは最初の一歩。

「郁海さん」

　呼びかけると小さな体がぴくりと震えた。

　だが、振り返る気配はない。

　仕方がないので一人分離れた隣に突き進む。

　郁海が一歩、離れる。だが、逃げ出すようなことはなかった。

女の子の扱いは難しい。
それは妹で体験済み。
口だけ達者で、いつだってこまっしゃくれたヤツだけど、憎めない。郁海は桜良と違って感情をそのまま面に出すことはないけれど、でも女の子なのだから、妹の助言に従って女の子扱いをしなければならないと思う。
曰く、心配だったら黙って傍にいろ。
俺はフェンスに背を向けてその場に腰を下ろした。
片膝を立てて空を見上げる。
手にしていたプリンシェイクをコンクリートの床に置いた。
カンという高い音が意外と響く。
バラバラと音を立てて空を飛び舞うヘリコプター。すっきりと晴れた青空は、雲ひとつない。
——昼休憩終了五分前のサイレンが鳴った。
そして微かに聞こえる体操の音楽。匠工業専用の体操の音楽で、考えたのは社長だという。社長には可哀想だから言っていないが、この体操をしている社員を総務部以外で見たことがない。
体操が終わり、微妙な間があって就業のサイレンが鳴る。
工場が稼働する音が小さく聞こえる。
「吉野さん、仕事は？」
百は数えるくらいの間があって、郁海が尋ねてくる。
「これが仕事なんです」
吉野は事実を告げる。
「父が……あなたに頼んだのですか？」
郁海は社長のことを父と呼んだ。と、いうことは、これはプライベートの会話ということになる。思い出せ、妹の助言を全部思い出すんだ、俺。
『もう、お兄ちゃんってば、そういう言い方するから女の子にモテないんだよ！』と何度言われたことか！！
「いいえ。俺が社長に業務命令をもらいました。社長が迎えに来ると、

きっと郁海さんは戻ってこないと思って」

俺の言葉に、郁海の息を飲む音が聞こえる。

だが、彼女の方は見ない。

『女の子は泣いてる顔を見られたくないんだから！』

ああ、桜良を魔法で呼び出せるなら呼び出して、この役を交代してもらいたい。ぜひとも！

「ふふっ。吉野さんは父の扱いが上手ですよね」

郁海の声は硬いが、泣いてはいないようだ。

「耐性がありますから。園長さんが社長に似た自由（フリーダム）な人なんです」

「そうですか」

会話が途切れる。

うーーん。どうしたもんか。

郁海が喜怒哀楽のどれでもいいから感情を吐き出してくれれば、それ相応の対処があるかもしれない。桜良が感情表現過多なヤツだから荒れ狂う妹を宥めるのはお手のものなのだが、まるで仮面や能面のような無表情な落ち込み具合はどう対応すればいいのか対妹俺マニュアルには存在しない。

「いい天気ですね」

うわ、なんの話だ、俺。

当たり障りがなさ過ぎるだろう。

会社で話題に困ったら、まずはこれという常套句を持ち出してどうする。

「そうですね」

返答、短っ！

どうしたもんかと思っていると隣で立っている郁海が腰を下ろす気配がする。ああ、ここは紳士を気取ってハンカチでも広げた方がいいのか？

あ、ハンカチなんて持ってない。

最近はハンカチがなくても生活していけるからうっかりしていた。

トイレにはエアータオルがあるし、給湯室にはタオルが設置されて

いる。あまり困らないのだ。
ひとりと半分開いていた空間が、ほんのちょっと郁海が近付いてきたおかげで半人分になっていた。
俺は置いていたプリンシェイクを差し出す。
「これ」
やるって言うのもおかしいし、普段の仕事上で使うように差し上げますっていうのも変な気がする。
だから、そのまま差し出す。
「……いいんですか？」
郁海は少し手を伸ばしてから確認をしてくる。
あんなに鬱陶しいくらい父親に愛されているのに、不思議なことに彼女は善意や好意を受け慣れていないようだ。
「はい」
頷く。
「ありがとうございます」
すると郁海はふっと微笑を浮かべて、小さな手で俺が差し出したプリンシェイクの缶を受け取った。ポケットから小さなハンドタオルを取り出して缶を包む。
そして、両手で缶を包んで上下に振る。
懸命な顔をして上下に振る姿を見て、思わず俺は吹き出した。やべ。こいつ、可愛過ぎる。
小動物が懸命にご飯を食べるような必死さを、可愛く思わないヤツって少ないと思う。
俺の笑い声に郁海が唇を噛んだ。
「貸せよ」
笑いながら、懸命に握り締めていたせいで普段よりもさらに薄紅色に染まっている小さな手から缶を取り上げた。
「で、あと何回振ればいい？」
「今、五回でしたから、あと二十五回振って下さい」
その言葉に俺は思わず聞き返す。

「二十五回！？　そんなに振ったらドロドロだろ？　あと五回のが美味いって」

「ドロドロになっているのが美味しいんじゃないですか！　十回のプリンぽさが残っているのも捨て難いですが、プリンシェイクは、ファーストフードのシェイクくらいにドロドロになっている方が美味しいです。それに十回だとけっこう残ってもったいないです」

断言するのに微笑が零れる。

お局の仮面を外した郁海は確かに社長の言う通りだ。なんというか、雰囲気が可愛い。

「じゃあ、あと二十五回な」

俺は笑って振り出した。この、プリンシェイクを振るのはけっこう本気になる。心の中で回数分振ってそれからプルトップを開けてやる。このジュース会社のプルトップは意外と堅いのだ。郁海がいつも苦心しているのを見ているから、気を利かせてみた。

ずっと、俺の振る腕を見つめていた郁海に改めて差し出す。

「ほら」

「ありがとうございます」

郁海は微笑んで受け取ると缶に口をつけた。

こくりと一口飲んで「美味しいです」と破顔した。

ようやく満面の笑みを見た。

そのことにほっとする自分がいる。

「やっぱり力のある方に振ってもらうといいですね。私が振ると、もっと荒い感じなのですが……」

「ここの自販機にはないけど、グレープゼリーは飲んだことあるか？」

「マンゴーゼリーなら飲んだことありますが」

「マンゴーもあるんだ。それ、どこの自販機だ？」

「本社に向かう途中にある信号の近くです。あと、そこの自販機は去年の冬には茶わん蒸しがありました」

「茶わん蒸し？」

思わず繰り返してしまう。
桜良と祥真に持っていったら喜ぶだろう。プリンシェイクも会社で見つけて珍しくて、二人に買って持っていったら大喜びしていた。
「それ、銀杏（ぎんなん）入ってた？」
「残念ながら、具はほとんど入っていませんでしたよ」
ゆったりと答えて、郁海は唇を閉ざす。そして空を見上げて息を吐いた。
「吉野さん、社内で私に敬語を使うのが苦痛なら、使わなくてもかまいません」
淋しげに眉根を寄せて、郁海は泣きそうな顔で笑う。
黒縁眼鏡の奥で真っ黒な瞳が揺れている。
「会社でも、私の存在を快（こころよ）く思わない人はいっぱいいるんです。いくら、いる期間が長いといっても、本当のところを言えば、私はあなたと同期で、四月に正社員になったばかりですから」
郁海が同期というのはびっくりだが……確かに十五歳なら、去年までは中学生。義務教育だ。
「出る杭は打たれるのが日本の会社での『普通』なんです。なるべく、出ないように気をつけているのですが社長の娘で十五歳というのだけはどうしようもありません」
ふふっと唇に浮かぶのは自嘲の笑み。
こういうところでの笑い方が親子そっくりだ。
「社長と同じ笑い方、するんだな」
「父と？」
言うつもりはなかったが言葉が零れてしまった。いかん。俺はどうにも考えずに喋ってしまうようだ。
瞳を瞬かせて小首を傾げる。
その姿に、普段のお局の姿が重ならない。
「俺は、ただオン・オフの区別で口調を変えているだけだ。お前が社長のことを父って呼ぶから、だから今はオフなんだって思って…

「……別に、郁海さんのことをどうこう思ってはいない、っつーか、反対に俺はお前のこと尊敬してる。いろいろなこと知ってるし、仕事だって的確だし、人当たりだっていいし……確かにお前のことを嫌ってるヤツがいるのかもしれない。だけど、俺はお前の仕事の仕方を真似していて、褒められることはあっても貶されたことはないぞ。お前のやり方を真似ろとか、参考にしろとか、みんな凄いって言ってたんだから」

なんか泣きそうな妹を相手にしているようで、ついついいろいろ言ってしまう。

郁海は瞳を見開いて、そしてそっぽを向いた。

一瞬、嫌われたのか？　と思ったが、彼女は缶を床に置いて、眼鏡を外し、そして自分の膝に顔を埋めた。

小さな体が震えている。

懸命に、涙を噛み殺しているのがわかる。鳴き声を押し殺して、涙を飲み込んで、震える指先を叱咤して……手にしている黒縁眼鏡が小さく揺れている。

ああ、これが妹や弟だったら抱き締めて背中をぽんぽんしてやるんだが、さすがにそれをしたらセクハラだろう。

眼鏡が床に落ちる。

プラスチックの軽い音。

少女が嗚咽を懸命に飲み込む。

両手で口を押さえて小さくしゃくり上げるのを堪える我が社のお局は、ただの子供にしか映らない。

俺は決意をして，、左手で黒いツヤツヤの髪の毛を撫でた。

「絶対に、秘密にするから……声を上げて泣いてくれ。頼む」

押し殺して、押し潰して、飲み込んで、噛み殺した涙は枯れることがない。声を上げて吐き出さなければ涙は昇華されない。これは俺の体験談。

「涙は、そのまま解放しないと中に溜まるだけだから、泣くんだったら涙も声も我慢しちゃダメだ」

つと顔を上げた郁海の瞳から、今度は大粒の涙が零れ落ちる。
それを彼女は缶を包んでいたハンドタオルで覆って、また膝に顔を埋めた。
「……うわぁぁぁ」
今度は、小さくだけど声が絞り出される。
ひっくしゃっくと肩が揺れる。
小さな啜り泣きは号泣になることはなかったけれど、先程のように押し殺して泣くことはなかった。
隣で、泣き続ける妹とひとつしか変わらない年の少女。
一度、妹と同じようだと思った心は彼女を同僚として見てくれない。ああ、俺ってばセクハラで退職になるかもしれない。そう思ったが、でも後悔はしたくない。
まだ半分以上残っているプリンシェイクの缶を脇に除けて、半人分の距離を詰めた。そして、左腕で背中を覆うようにして、郁海の左肩を抱く。郁海の体が動きを止めた。呼吸まで止まっているようだ。だが、俺はそんな郁海の緊張など無視をして、ぽんぽんと肩を軽く叩いて囁いた。
「お前、兄がいたんだろう？　俺にも妹がいるんだ。俺がお前の兄だったら、絶対抱き締めて慰めてる。だから、天国のお兄さんが俺の体を借りてるって思って、泣いてろ」
俺の言葉に。郁海は膝に顔を埋めてふるふると首を左右に振る。
体はまだカチンコチンだが、呼吸は戻ったようだ。
「……あ、兄は、きっと、私を慰めては、くれないです」
しゃくり上げながら、聞き取った言葉は穏便ではない。
「じゃあさ、お前が俺の妹だったら絶対抱き締めて慰めていた。泣きやむまで傍にいてやるから、思いっきり泣けって言ってやる。だから、泣いてろ」
肩を撫でてもう一度言う。
「泣けよ」
郁海はようやく再び泣き出した。

俺は肩を軽くぽんぽんしながら晴れ上がった空を眺めた。
いい天気だ。
左腕の下に感じる体温はやわらかくて、なんだかくすぐったい。
小さくなって泣いている郁海はただの子供で、庇護すべき対象に見えてくる。きっと、本人にそんなことを言えば怒られるのだろうが……。
しゃくり上げるのが少なくなり、徐々に嗚咽も聞こえなくなってきた。すーはーと大きく息を吸って吐いてを繰り返しているのがわかる。
そろそろ泣きやむのだろう。
「仕事、サボってしまいましたね」
俯いたまま小さく郁海が呟いた。
今まで泣いていたせいか、声が少し掠れている。
「離業扱いにしておいて、後で残業すればいいよ」
フレックスタイムはこういうところが融通が利いていい。
ぽんぽんと肩を叩く。
すると、膝に顔を埋めていた郁海が顔を上げた。目元は真っ赤に染まり、腫れぼったくなっている。羞恥のためか頬は紅潮していた。全体的に真冬の真っ赤な林檎のようだ。
黒縁眼鏡がないせいで、線の細さが際立つ。
「私は、すっかり吉野さんに子供扱いですね」
「子供扱いじゃないぞ、妹扱いだ」
「一緒です」
「一緒じゃない！　子供は大きくなって大人になるけど、妹は大きくなろうが何年経とうが、お婆ちゃんになろうが妹だ」
俺の断言に郁海は淋しげに微笑む。
だから、吉野は慌てて言葉を続けた。
「社長の、娘扱いも一緒だと思う。お前を、子供だと思っているんじゃなくて、親にとってはいくつになっても子供は子供で、心配と庇護の対象なんじゃないか？　よくわかんねーけど」

両親を亡くした俺にはいくつになっても親に子供扱いされるかどうかはわからない。
でも、社会人になっても親に弁当を作ってもらっている子供はたくさんいる。だから、あながち間違っていないと思うのだ。
「腕、ありがとうございます」
郁海が瞳を逸らして言う。それでようやく俺は泣き止んだのにまだ彼女の背中に腕を回していたことに気付く。
「わ、悪い！」
吉野は慌てて腕を離した。体温が感じられなくなって、少し寒いのと淋しいのを同時に感じる。
「いえ、人の体温は……あたたかいんですね」
遠くを見つめて、宙（ちゅう）に飛ばされた声。
その言葉は俺に対してではなくて、過去を不意に思い出して懐かしんでいるように聞こえた。
あの社長のスキンシップは間違っている。
俺は断言するね。
頭撫でてやったり肩を叩いたり、そういうスキンシップのがまだマシだ。勝手に辞令出したり、社長室から脱走したりなんていうのは親子のスキンシップじゃなくてただの質の悪い悪戯だ。今の社長は幼稚園児の好きな子いじめと大差がない。
「吉野さんは、男尊女卑って言葉、ご存知ですか？」
「ダンソンジョヒ？」
聞き慣れない言葉に首を傾げる。
「男性を尊（とうと）び、女性を卑（いや）しいと見る……男性上位の社会構造のことです。女性は結婚をして子供を産んで家庭を守るのが仕事っていう古くさい考えのことですよ。女性蔑視（べっし）とも言いますね」
郁海は疲れたように言葉を吐き出す。落とした眼鏡を拾いあげてかける。
ああ、確かに社長も連呼していたな。
郁海の花嫁衣装。

郁海の結婚。
郁海の幸せ。
「女性の幸せイコール結婚。何年前の価値観なんでしょうね。現在はひとりだけの収入で家庭を維持できるような甘い状態ではありません。若い世代の低賃金。就職難。アルバイト・派遣・パートの急増。現実を見つめれば結婚しても両方が働かなければ暮らしていけない家庭は数多くあります」
なんだかこ難しいオフの話になってきたぞ。
だが、郁海は普段は自分を律していて、あまり政治的だったり宗教的だったりする自分の考えを誰かに訴えるようなことをしない。会社でタブーの会話は政治・宗教・同僚の悪口だといつも言っているようなヤツだから。
「それなのに、女性の家事負担は昔と変わらないって、知っています？　八時間も働いて、ご飯の支度、洗濯、掃除。子供が生まれたら子育て。全部を女性が負担して、大半の男性は仕事にだけ集中していればいいんです。不可思議でしょう？」
「……ああ」
ここは否定しちゃダメだ。本能がそう告げている。
いやいや、一番突っ込みたいのは十五歳の考えじゃないだろうってことなのだが……今はお口にチャック！
「吉野さんも、私と負けず劣らずデンジャラスな人生ですよね」
郁海がふっと笑う。
「ごめんなさい。秘書になられる前に履歴書を拝見しました。個人情報ですから本来は私が見るべきものではないのですが、私の部下になるのだから父が見ておけと申しまして」
「別に……隠してないから、いいですよ」
これは本音。
まあ、確かに俺の人生ってまだ十八年で、社長や伊東さん達に比べれば短いけれど、いろいろ山や谷や渓谷が溢れ返っていたと思う。

「社長というのは、端から見ていれば楽な職業に見えるでしょう？　特に父なんていっつもふらふらして、遊んでいて、楽しそうで、悩みなんかないみたい」
それは言い過ぎだろう、娘。
思ったが口にはしない。
「でも、社長は両肩で、会社も社員も信用も信頼も未来も、すべてを担がなければいけないんです。会社の業績が悪化して、借金に首が回らなくなったら、真っ先に差し押さえられるのは社長の車や家や財産なんですよ。倒産なんかしたら、会社どころか、なにもかも……命以外はなくなってしまうのです」
ああ、なんだか思い出してきた。
「借金取りが来て、玄関に落書きしたり貼り紙したり、電話が一日中鳴り響いたり……あれって、トラウマになるよな」
俺も遠くを見つめて溜め息を吐いた。
社長という職業のリスクなんて知っている。
実体験として知っているわけじゃないけれど、両親を見て知っている。いろいろな人にぺこぺこと頭を下げて、我慢して我慢して、ちっぽけな生活を守るために自尊心も誇りも、ひと籠いくらで切り売りして……
「知ってます？」
郁海がくすくす笑いながら聞いてくる。
「なにを？」
「最近の借金取りは、乱暴な口調や態度、貼り紙などをしないんです」
「へぇ」
「そんなことをしたら、警察に捕まってしまうから。それに伴って、脅しも真綿で首を絞めるように……お宅のお嬢さん、小学校六年生なの？　可愛いねえ。大事にしなくちゃねぇ。最近は小さな女の子を狙う悪質な犯罪者がいるから気をつけなくちゃダメだよ……なんていう、遠回しの忠告なんですよ。親切でしょ？」

郁海が冗談めかしてダミ声を作って借金取りの口調を真似てみせた。
息が止まる。
まったく親切じゃない。
「それって、つまりは……超訳すると『あんたが、借金を返さなかったらお嬢さんに水商売で働いて返してもらおうかな。今はロリコンが趣味なヤツも多いから客ならどんどん付くぜ』になるんだろう」
は〜〜〜と溜め息を零す。その俺を見て、郁海はくすくすと笑っている。若干、疲れた感じはするが。
「親の借金は、財産放棄できるんだぞ。子供には関係ないだろうが！」
口の中が苦い薬で溢れているような錯覚を感じる。
だが、関係ないという言葉で思い出した。
「あ。社長な、お前に会社を、無理矢理継がせるつもりはないって言ってた。あの辞令も、お前が甘えてくれないからちょっかい出したってさ」
これも要約し過ぎだろうか。要約というか翻訳というか、超訳。短くし過ぎかも。
「知っていますよ。父だってバカじゃありません。血統継承はリスクが高過ぎます。会社を円満に継続させるために、跡継ぎは血を引いた者などと言っていたら潰れてしまいます。血に頼っていたら、どんなバカが会社を継ぐかわからない」
「別にお前はバカじゃないぞ」
あまりにも卑下しているように聞こえたから、そう話を分断する。
俺だって、あまり俺自身のことを好きじゃないが、なんというか郁海は自分のことを低評価し過ぎな気がする。
これだけしっかりしているなら、世界最年少の女社長とかになってもいいような気がする。その方が、あの社長の下で働くよりも仕

事は進みそうだ。
「父は、基本的に差別をする人種なんです」
突然の言葉にドキリとする。
「もちろん、誰かを無視したり、あからさまな嫌がらせをしたりなんて、そんな低俗ことはしません。でも、一緒に喫茶店に入ると女性のウエイターに見下したような口調を使ったり、デパートのレジのキャッシャーに自分が客なのだからというような、高慢な態度を取ったり、女は家を守り男は働く、そんな幻想を未だに持ち続けているんです」
いや、それって言っちゃ悪いけど、社長じゃなくて現在の世の中の大半の人がそんな感じではなかろうか……俺も社内でも感じた。新人扱いじゃない、なんというか見下す視線。それは大半が壮年の男性からのものであったが、男女年齢問わず、そういう視線を送ってくるやつらはけっこう多い。
「私は、女だから、父に期待されていないんです。でも助けたいって思ったから会社で頑張りましたが、ちょっと考える必要があるかもしれません」
「……郁海」
思わず呼び捨てにしてしまった。やば。
だが、俺の戸惑いなど郁海は気付いてもいない。瞳は遠い青空を眺めたまま。
「男に生まれたかった。吉野さんが羨ましいです。その体力も筋力も身長も私にあれば、もっと仕事に打ち込めるのに」
呟いて、頭を振る。また泣きそうな顔。
「いいえ。兄が生きていて、私が……」
「待てよ！」
思わず聞き捨てならなくて郁海の言葉を遮る。
郁海は驚いて瞳を丸くさせ、体を強張らせた。
文脈から考えれば、言葉を濁したけれど、それは……自分が死んで兄が生きていれば社長はもっと喜んだということだろう。そん

なの、郁海にも社長にも顔をまったく知らないがその兄に対しても失礼な言葉だ。
「死んだヤツは生き返らない。生き返るのなんて、マンガや小説やゲームの中だけだ」
「わかっています」
「わかってない。お前は、だって、自分を殺そうとしてるだろ？　せっかく生きているのに、お前は匠郁海という人間の人生を殺してる」
吉野の言葉に郁海が瞳をさらに見開いて、口を小さく開けた。
「私が、私を……？」
俺は無性に腹立たしくなって、彼女の右手首とジュースの缶を掴んで立ち上がった。目指すは社長室。
こんな、こんがらがった糸は、もうどうしようもない。断ち切るしかないのだ。
階段を降りてエレベーターホールを目指す。
右手にはプリンシェイク缶。
左手には困惑顔の上司。
郁海の手首は体と同様に細い。
それがいつも背筋を伸ばして、毅然とした態度と凛とした口調で大人に見えるように振舞っているのだと思うと……なんだか無性に泣きたくなってくる。
三階まで降りて、社長室を目指すと、中からは怒鳴り声が聞こえてきた。
社長ひとりに対して数人で詰問するような声。
その声に郁海が震える。
意を決して、郁海の手首を離して扉を開けると……そこには社長を取り囲むようにして役員達が立っていた。
『あんな子供』『女に会社経営ができるわけがない』『仕事ができるわけがない』『馬鹿にしているのか』『今、会社にいるのでさえ可笑しい』『女が社長など継げるわけがない』『どうせ結婚した

ら会社を辞めるんだろう』『腰掛けのくせに』
そんな声が廊下まで洩れ聞こえていたというのに、大人達は一斉に口を噤んだ。だが、先程郁海と会っていた曽我氏はいない。
経理部部長の北条さん
設計開発部部長の小松さん
設計開発部・設計室室長の信西さん
営業部部長の足利さん
この四人が社長に詰め寄っていたのだ。
「失礼します」
扉を開けたが四対の鋭い視線に気を呑まされ呆然と立ち尽くす吉野の腕を軽く叩いて、後ろから郁海が一歩踏み出した。
「この度は、父の悪戯でご迷惑をおかけして申し訳ございません」
言葉を切って、深々と頭を下げる。
いや、郁海が謝ることじゃないだろう。
「わたくしは父の娘ではありますが、そのことに甘えてこの会社を継ごうとは毛頭思っておりません。高校も出ていない、未成年のわたくしが会社で働いているのが皆様にとってそれほどお目障りだとは露とも知らず、ご不快な思いをさせて失礼致しました」
今度は軽く一礼。
「会社の人事に対しては、一総務部社員であるわたくしが口を差し挟むことではありません。わたくし個人としては、この会社を継ぐ気はまったくございません。ですが、会社に混乱を招いた以上、処分を下されても致し方ないことだと思います。わたくしの処分などは、そちらでご判断下さい」
郁海は顔を上げて、背筋を伸ばして、澱むことなく大人と同じ口調で四人の男に対峙する。
「社長。パートの頃より持ち越しておりました有給休暇がございますので、突然ですが明日から五日程休みを頂きます。急ではありますが、よろしくお願いします」
呆然としている父親に向かって、郁海は言葉の矢を無表情に放つ。

「わたくしは、自分の足で立ちたかった。ですので、高校も自分で稼いだお金で行こうと思っておりました。大学まではまだ考えてはおりませんでしたが、いずれは海外に留学や、ワーキングホリデーで滞在したいなど……お恥ずかしいですが、夢のようなことを考えておりました。でも、親に甘えるのは申し訳なくて、自分の手でお金を貯めてからと思っていたのです」

そこまで言って郁海は困ったように笑った。

「どうぞ、わたくしがいない穴を皆様で埋めて下さい」

そして踵(きびす)を返して郁海は振り返る。

「わたくしなどがいなくても会社は回ります。潤滑油が多少減ったくらいで動きが止まるようなことはありません。そうでしょう？」

試すような強い瞳で、四対の瞳を見上げる。そして、泣きそうな笑顔を浮かべた。

「わたくし、匠工業という会社で働くのが好きでした。受け入れられなくてとても残念ですが、女性蔑視をなさる皆様のお気持ちは簡単には変わりませんでしょうね。あなた達は、ご自分がどちらの性別の親から産まれたのか、よく思い出されるといいと思います」

顔は笑っているが、郁海の周辺の温度はどんどん冷たくなっていく。

「失礼致します」

扉を開けて静かに一礼をする。

「吉野さん、一緒に戻りましょう」

郁海の声がなければ、俺は動くこともできなかっただろう。ようやくその声に促されて「失礼します」と一礼ができた。

あんな、深夜の砂漠のような乾いて冷たい対応の郁海は初めて見た。

「吉野さん」

扉を閉め、しばらく歩いていると郁海が俺の名前を呼んで振り返り見上げてくる。

先程の乾いた雰囲気は既になく、屋上での小さな女の子の郁海が吉野の前にいた。
「缶が、可哀想です」
俺の手の中のプリンシェイクの缶は潰れかけていた。その缶ごと俺の右手を両手で包んで郁海は小首を傾げた。
「さっきの、ワーキングホリデーとか留学とか全部ひっくるめて、嘘なんです」
「は？」
「中学の頃から、自分の将来に対してどうしたらいいのかまったくわからなくて……調べて、情報としてはそういう方法があるというのは知っていましたが、本当にそうしたいと思っているわけじゃないんです。よく、あんな口からでまかせが咄嗟（とっさ）に出ますね、私も」

郁海は自嘲気味に笑う。だが、一瞬口籠（くちご）って、そして吉野を見上げる。瞳にはやわらかな光。
「屋上で、吉野さんに言われた……自分を殺そうとしているという言葉をよく考えてみます。あんな口からでまかせの未来像じゃなくて、本当に私がしたいことをこの五日間、いいえ土日を挟みますから一週間で、考えてみますね」
握り締めていた指を一本ずつ引き剥して、郁海の手のひらに缶が移った。
「父のこと、よろしくお願いします」
郁海は、小さく笑って、総務部の扉を開けた。

第六話（前書き）

この小説はある会社やさる会社やこんな会社がモデルになっているように見えるかもしれませんが、特定の会社とは一切関係ありません。予めご了承下さいませ。

第六話

◇

次の木曜日から、匠工業は凄じいことになった。
郁海が休むと同時に、他部署で庶務の仕事をしている女性陣が示し合わせたかのように体調不良や親戚の法事や子供の熱などで休み出したのだ。
もちろん、総務部の畠山、開発部の清水も休んでいる。
困ったことに、各部所の本当の要が誰なのかこれではっきりしてしまった。
皮肉だなあ、と思う。
部長や課長が突然休んだところで決裁者が変わるだけで仕事は滞ることはあまりないけれど、こまごまとしていたことを一手に引き受けていた庶務陣がいなくなると、仕事はあからさまに滞る。
潤滑油がなければ機械は壊れるという郁海の言葉は正しかった。
書類がない。
判子がない。
あのファイルはどこだ。
申請順はなんだ。
同じようなファイル名のデータがあるがどちらが新しいのか。
などなど。
総務部は郁海が音頭を取って仕事のマニュアル化整備を進めていたから、困ったことがあったらマニュアルを探してその通りに進めればなんとかなるが、彼女たちのメールアドレスに届く仕事に関しては把握しようがなく「大変申し訳ありませんが、畠山は本日、休みを頂いておりまして、明日になれば出社すると思いますので、改めてこちらよりご連絡を差し上げます」と答えるしかなかったのだ。
明日、畠山が出社してくれるかどうかは不明ではあるが。

　そして、こちらのがさらに困ったことになっている。頂点で様々なことを決裁をする社長が、どろどろに溶けたクラゲのようになっていて、いっこうに使い物にならないのだ。

「社長、郁海さんと家で話されました？」

「……俺が帰ったら、瑞花さんの妹の雪花さんの家に泊まりに出かけたって……うわあああああ」

　こんな男泣き、見たくない。

　だが、社長からしたら娘に見放された気分なのだろう。

　まったくこの親子は表面上は似ていないようで、内面はそっくりだ。お互いに甘えたいのに甘え方を知らないような、そんな部分が特に。

　昨日の話をした方がいいのだろうか。いろいろ郁海とは話をしたから、どこを話せばいいのか判断に苦しむところなのだが。

　言葉を探していると、社長室の扉が三回ノックされる。

「入りたまえ」

　社長の声に扉が開かれた。そこには自称ヒットマン。

「社長。ちょっとお耳に入れたいことが」

「言ってくれ」

　曽我さんは俺をちらりと見たが、肩を竦めてそのまま社長机に近付いてきた。机を回って屈み込み、耳元に囁かれるのは重大発言。

「今月の給料日、社員に給料が支払われない可能性があります」

「「え!?」」

　社長と俺の声が思わずハモった。

　ここでハッピーアイスクリームって社長の腕をつねったら社長にアイスクリームを奢ってもらえる。なんて馬鹿なことを想像するしかないくらい、その言葉に驚いた。

　ちなみにハッピーアイスクリームとは俺の通っていた小学校で流行っていた遊び。同じ言葉をハモった二人のどちらかが「ハッピーアイスクリーム」と言って相手をつねり、つねられた側は相手にアイスクリームを奢らなければならないという理不尽な遊びだ。

「たぶん、経理部からその旨が回ってくるのは……あの北条さんが部長なんで遅くなると思いますが、中のヤツが社長に先に回してくれといいまして……」

曽我は肩を再び竦めて微苦笑する。

「今、この会社で仕事の流れを把握しているような社員は、正社員、派遣関係なくみんな郁海さんに指導をされているんですよ。郁海さんはこの会社一社に限らずに、どこの会社に転職しても仕事のスキルを役立てることが出来るように後輩たちを教育している。本人もそうなるように目指しているし、教育を受けた側もそれをひしひしと感じている。そんなふうに真摯に自分のことを考えてくれる人に指導されれば、会社に対しても愛着が湧く。それを見越しているんです。だから、郁海さんは新人が入ると必ず一日目の『お昼ご飯』を世話してくれるんです。私も同じでした。知ってました？」

「いいや」

「ちなみに私に今の情報を教えてくれたのも、入社したての頃、郁海さんにお世話になったヤツです。郁海さんが、匠工業の社員としてではなく、ひとりのサラリーマンとして立っていけるように後輩を指導しているから、我が社には優秀な社員がたくさんいてくれるんです。会社が泥の船じゃないかと思った時、真っ先に去っていくのは優秀な社員ですからね」

曽我さんは社長を見下ろして、そして意を決したかのように拳を握り締めた。

俺が叫んだ時にはその拳は、クラゲのように机にべったり張りついている社長の頭に振り下ろされていたのだ。

鈍い音が室内に響く。

「郁海ちゃんは、あんたのことが好きだからこの会社にいるんだ！　父親を助けたい、守ってやりたい。だから最善の力で、父親のため、この会社のために頑張ってきた。それなのに、あんたはいつだって『可愛い娘』としての郁海ちゃんしか求めない！！　それがどれだけ郁海ちゃんを傷付けているのか、わからないのか！？」

曽我さんの叫びに思わず俺は拍手喝采！！
そう、それです！それこそが俺の言いたかったことです！！
俺の拍手を耳にして曽我さんはこちらを向いた。
そして、にやりと笑う。
「屋上でのこと、社長に話してやれよ」
「え？」
なんで知ってるんだ。
っつーーか、見られていたのか？
でも、今はそんなことはどうだっていい。郁海の気持ちをこのバカ社長に伝えなければならないのだ。
「社長は、郁海さんが男だったらいいのにって、考えたことありますか？　男だったら会社を継がせて、女だったら嫁がせて……でも郁海さんは女の子だ。だから自分を殺して、性別を打ち消してまでこの会社のためになろうと、しているんです。郁海さんがそんなふうにお局になろうとしているのは、お父さんであるあなたに、振り向いて欲しいからなんです」
瞼の裏に小さな手の幻影が見える。
お父さん、お父さん、お父さん。
そう呼びながら走り続ける小さな少女。
小さな手を懸命に伸ばして、仕事で忙しい父親の背中を懸命に追いかける。
「母親のようにあなたを仕事で支えることもできず、兄のようにあなたから会社を継ぐことを期待されることもない。嫁げというのは、あなたから見捨てられているからなのだと思っています。なんで生き残ってしまったのが自分なのかと、郁海さんが自分を責めていたのを、知っていますか？」
ダメだ。
涙腺が緩む。
でも、少しでも彼女の気持ちを伝えてやりたい。
「郁海さんは、あの小さな体で懸命にあなたを守ろうとしている。

昨日の留学とかワーキングホリデーとかはまるっきりの嘘だそうです。自分の将来像も描くことが出来ないくらい、社長、あなたとあなたの会社を守ることに必死になっているんです。まだ十五歳なのに」
社長は一度マホガニーの机につっ伏した。
そして毅然と顔を上げ、ゆっくりと立ち上がった。
「郁海を、迎えに行ってくる」
「はい」
「お願いします」
俺と曽我さんは同時に頷いた。
「そして、ちゃんと抱き締めて郁海が大好きだって伝えるから」
背広を手にして社長は早足に部屋から出ていった。
その後ろ姿は社長ではなく、ひとりの父親だった。
頑張れ、頑張れ、頑張れ。
俺はその後ろ姿に心の中で声援を送った。
扉が閉じられると同時に肩をぽんっと叩かれる。
「さて、吉野さん。俺の悪だくみに、付き合ってもらうから」
肩に腕が回される。
「付き合わないと、昨日、屋上で郁海ちゃんを抱き締めていたのを社長にチクるぜ」
「抱き締めてなんていません!!」
思わず言い返すが、目の前には意外な程に真剣な双眸。
「君は、気付いているか?」
「は?」
「匠工業の社長は叔父さん、ひとりだけじゃない」
曽我の言葉に瞳を瞬かせる。
「郁海ちゃんが傍にいる叔父さん。それがこの匠工業の社長なんだ」
「つまり、郁海さんが会社を辞めたら……」
嫌な予感がする。

「そう、この会社昨今潰れるな」
うわ。ありえそうなこと言わないで下さい！
「それを、あのバカ役員共はわかっていない。第一、社長業をやりたいなんてよく言える。社長は表面バカだけど、あの人程未来を見据えて会社を運営している人もいない」
「……はい」
「吉野さんはなんとなく気付いているんだな。君、この一ケ月半で全ての部署、役員、役職の顔を覚えただろう？　それは社長が狙ってしたことだって、気付いているかい？」
「え？」
「君が全ての部署を通るように脱走していたんだよ、あの人。わざわざわかるようにね。郁海ちゃんは気付いていなかったけど」
曽我さんの言葉に俺は喉を詰まらせる。
「と、いうわけで、その全ての部署の人と話したことのある君に、ある任務を頼みたい！」
嫌な予感がする。
俺は、再び嫌な予感を抱えつつも、その言葉に頷くことしかできなかった。

◇

俺が曽我さんに渡されたのは、アンケートの束と肩にかけるカバン。カバンには『目安箱』とマジックで書かれた白い用紙が、ガムテープで貼り付けられている。
うわ。
目安箱。なんて前時代的。

……敢えて褒めるところを無理矢理探すなら、箱じゃないところが斬新、だろうか。
俺は曽我さんの悪だくみとやらが、まったくもって古くさい手法だということを実感していた。
「動く目安箱・吉野さん」
総務部で準備を済ませた曽我はにこにことしている。伊東さんはなんだか申し訳なさそうな顔をしている。確かに変わってもらえるなら変わって欲しいですが、腰痛の酷い伊東さんに頼むのは酷だろう。
「では、行ってきます」
俺は廊下に出るととりあえずエレベーターで七階を目指した。
今はシャワー効果って言葉は使わないみたいだけど、上から降りていった方がたぶん負担は少ない。
俺はこれから毎日このカバンを抱えて社内を歩き回るのかと考えて、溜め息を吐いた。

社員食堂の人達からマーケティング部、営業部、運用管理部の中の管理室、サポート室、設計開発部の中の設計室、開発室、宅配便置き場のおじちゃんたち、あと会議室の運営をしている人達。一階、二階の工場で働く人々。
会う人、会う人にアンケート用紙を渡していく。
外に出て本社工場で働く人達と、とりあえず三階以外の部署の人達のところをすべて回って総務部に戻る。
後は三階にある総務部、経理部を回れば終わりだ。
カバンの中にはあまり用紙は入っていない。
アンケートというものは渡してすぐに書かれて返ってくるような

ことはないだろうから、気長に待つしかないだろう。今日の午後も回って、明日の午前、午後と、こまめに回ろう。うん。
そう考えながら経理部の扉を開けると、そこはざわついていた。女性社員が誰もおらず、男性社員が一台のパソコンの周辺に集まっている。
自分と同期の社員がいたので尋ねてみると「北条部長がね……」と言葉を濁す。
「部長？」
「吉野さんは知らないかもしれないけど、経理部だけ北条特例で、役職つけて呼ぶことになっているんだよ」
本当に小さな声で教えてくれる。
突然、ブッと短くパソコンが鳴った。
「なんだ、これは！！」
パソコンの前に座っていた北条がもう一度キーボードに打ち込む。だが、それもブッと鳴る。
パスワードが間違っているんだな、あの音は。
「これで合ってるのに！」
またブツブツ言いながら打ち込む。
また拒絶する機械音。
今ので三回。
「あ、あの北条さん、もう打ち込まない方がいいですよ。パスワードは」
と俺が人波を掻き分けながら止めようとしているうちに、一回、二回とパソコンが北条の『これで合っているはず』のパスワードを拒絶した。
五回目のエラー音は長音。
「……ああ」
「お前は、総務部のひよっこ」
あら。あからさまな蔑視のお言葉。
吉野は返って新鮮な気持ちで北条の苦々しい顔を見つめ返した。

が、彼は気にせずにもう一度打ち込もうとするが、今回はパスワードを入れることすらできない。
「なんで入れられないんだ！！」
バンバン！とキーボードに八つ当たりをする。
「あの、北条さん……パスワードは五回打ち間違うとログインエラーを起こして、運用管理部サポート室にパスワードの再発行をしてもらわないと、起動できなくなるんですが」
「……そんなこと、お前に指図されなくともわかっとる！！」
わかってないじゃん。
そう、心の中で思ったが、今の状態で北条に逆らっても不平不満を言い返されるだけだ。
「サポート室の電話番号を」
経理部の人達は吉野の声に誰も答えようとしない。
仕方ないので一番近くの机にある電話の傍からクリアファイルに入った電話番号一覧を取り出した。
「内線、２‐１２１２です」
そう教えるが、北条部長は電話をしようとはしない。
「……あの」
「吉野さん、サポート室に電話しても無駄だよ。今、必要なのは今日休んでいる巴（ともえ）さんのパスワードなんだ。仮パスワードを発行してもらっても、巴さんがいないから静脈認証のパソコンは起動しない。経理専用端末のパスワードは、巴さんのＩＤなんだよ」
「……なんですか、それ」
「北条部長が、彼女ひとりに押しつけていたんだよ。自分の決裁とかもなにもかも」
「電話とか……」
「誰も、彼女のプライベートの電話を知らないんだよ。実家の電話にも誰も出ない……」
「留守電は入れたけど、返事が来る気配がないんだ」
大の大人が揃った経理部なのに、社員ひとりが休んだだけで全員

途方に暮れている。
「あの、マニュアルとかないんですか？」
吉野の問い掛けに「マニュアル？」「マニュアルなんてあったけ？」とぼそぼそとした会話が繰り広げられる。
えーーと、経理部社員って巴さんひとりがいればいいんじゃなかろうか。
「派遣ひとりがおらんでもかまわん！」
北条がそっぽを向いて腕を組む。
えーーと、現在とってもかまわんじゃない状態なのですが。
「でも、今月の給料」
誰かがぽつりと呟いた。
「今日中に仕上げないと、間に合わない……」
また小さくぽつりと呟いた。
だが、誰一人として動こうとしたり、北条に判断を仰ごうとはしない。おいおい。
吉野は意を決して、北条を見下ろした。
「北条さん、ご判断を」
短く尋ねる。
北条は腕を組んだまま、そっぽを向いた。
そして一言。
「知らん」
その言葉に、この場にいた全員の体が固まった。
知らん。って、知らんって。知らんってーーー！！
「知らん、ってなんですか！？　やることいっぱいあるでしょう？
とにかく他の部署とかで巴さんと仲のいい人いないんですか？
その人に電話番号聞いて下さい。後はマニュアルを探して下さい。
巴さんは入社した時は誰に指導されたんですか？」
吉野の言葉にひとりふたりと動き出してくれた。
質問には隣の人が「郁海さんだよ」と教えてくれる。
「郁海さんが指導しているんだったら、絶対マニュアルがあるはず

です。きちんとした形でなくてもメモとかノートがあるはず。後、俺が社長に連絡して郁海さんに巴さんの電話番号知らないか聞いてみます」
「うるさい！！」
吉野の言葉を遮って北条が叫んだ。
「あんなガキに指導された？　だからマニュアルがある？　なんだそれは！！　子供や女や派遣なんかいなくたって仕事は回る。そうだろう、みんな！？」
北条が拳を握って周囲を見渡すが、経理部社員は誰一人として北条の瞳を見返さない。
「でしたら、緊急時の対策を教えて下さい。今が、その緊急時だと思いますが」
俺は溜め息を飲み込んで、尋ねた。
「どうしたら、この事態を回避できるんですか？」
「勝手に休む方が悪い！」
「私達は人間です。急な体調不良で出社できないことだってあり得ます。そういう時の対策は日頃から行うべきじゃないんですか？だから、業務として、改善提案やQC活動に時間を使っているんでしょう？」
吉野の質問に、北条は喉を詰まらせた。
「北条さんの言葉って、男で正社員だったら仕事ができるってことなんでしょう？　だったらここにいる人達で仕事が回るはずじゃないですか。どうして回らないんですか？」
「それは……」
「それは？」
吉野は北条の言葉を待つ。
「お、お、お、お前は年長者を敬うという言葉を知らないのか！！」
あちゃー。支離滅裂(しりめつれつ)だ。
吉野は小さく溜め息を吐いた。

俺、こんなことを言ったらクビかもしれない。
「あなたには、正社員で、男で、年を取っていることとしか威張れることがないんですね。どうせだったら仕事ができることで威張って下さい」
後の北条のキャンキャン声は無視をする。あれは躾のなっていないポメラニアンか、ミニチュアダックスフンド。そんな可愛い存在じゃないけれど、そう割り切って無視をした。
「申し訳ありませんが、巴さんが作ったかもしれないマニュアルを探して下さい。あと、このサポート部に電話して大至急仮パスワードの再発行をしてもらって下さい。私はとりあえず社長の指示を仰ぎます。指示が来ましたら急いでお知らせします！」
俺は矢継ぎ早にそれだけ言って一礼をした。
とにかく、急いで社長と特に郁海さんに戻って来てもらわなければ……俺の今月の給料が！！
そんな時に、室内がざわついた。
「よっ！」
明るい呼びかけに経理部にいた全員が振り返る。
そこには満面笑顔の社長と、まるでピンクの小薔薇のような少女が立っていた。
その小薔薇は、たかたかと北条のもとに近付くと「失礼ですが、席を替わって頂けますか？」と命令をした。丁寧語で疑問形だがこれは命令だ。
北条は息を呑んで「はい」と小さく呟いて席を立つ。
「巴さんが作ったマニュアルは左から二つ目のキャビネットの二段目に、他のマニュアル類と一緒に入っています。昨年のQC活動で五位だった、巴さんの努力の結晶です。同じ部署の方がどなたもご存じないとはどういうことですか！」
肩のあたりがふんわりと膨らんだパフスリーブのワンピース。胸元には同色のレースが施され、鎖骨が綺麗に見える。高い位置から始まるスカートは何枚もの柔らかな布が重なり、動くたびに風に踊

る花片のようだ。華奢なパンプスにおさまった細い足。背中に妖精の羽がないのが不思議だ。うわ、俺って詩人（ポエット）。
　見目形は可愛らしいとしか言いようがないのに、お局降臨だ。
　ＩＤとコードを入れて郁海がパソコンを起動させた。
「とりあえずはアドミニストレーターで起動しました。これで作業はできますが、ショートカットなどはすべて飛んでいますので入れ直すことが必要です」
　カタンと立ち上がって周囲を見渡す。
「給料明細の仕事の流れをこの中で一番ご存知の方は？」
　郁海の質問に顔を見渡してひとりが手を挙げた。
「では、お願いします。とりあえず仕事に必要なショートカットなどを作成しておいて下さい。あと、アドミニで立ち上げていますので、余計な操作はいっさいしないようにお願いします。暫定的な対処方法ですから」
　手を挙げた社員はこくこくと頷いて郁海が座っていた椅子に腰掛けた。
「吉野さん。総務部の社長室に一番近いキャビネットに赤いファイルがあります。その中に三段ワゴンの鍵が入っています。緊急事態につき巴さんの許可は得ていますので、鍵番号を確認して開けて下さい」
「はい」
「北条さん。巴さんはインフルエンザで病欠です。昨夜、北条さんの携帯電話にメッセージを入れたそうですよ。ご確認下さい」
「……はい」
　北条が苦い薬を飲み込む時のような顔をして頷く。
「では、次に巴さんのパソコンもアドミニで起動させましょう。失礼ですがサポート室からの返信メールだけ確認をします。許可は得ていますし、緊急事態ですからね」
　郁海は電話を取ると電話帳で確認することもなく、内線番号を押す。

俺は一瞬見惚れていたが、いかんいかん、頼まれた仕事をせねばとメモを取り出して巴さんの三段ワゴンの鍵番号を書き写す。そして走って総務に戻って、鍵を取り出してキャビネットを開ける。赤いフォルダの中から合鍵を探し出して、また扉を閉める。

部屋に戻ると、郁海が専用端末で作業をしていた。

近付くと、エンターキーを郁海が押す。

今度は機械音は響かず、起動の音楽が短く鳴った。

周囲から拍手が起こる。

おいおい。

「郁海さん」

声をかけると郁海が振り返る。黒縁眼鏡をかけておらず、ピンクのふわふわした服を身につけている彼女は、日頃とは随分違って見える。

「すみませんが、郁海さんに開けて頂いていいですか？　さすがに女性のワゴンを勝手に開けるのは気が引けて」

「ふふ。いいですよ」

郁海はやわらかく笑って鍵を受け取って立ち上がる。巴のキャビネットは綺麗に整頓されていて、やりかけの仕事もポストイットが貼られていてどこから続ければいいのかすぐわかった。

俺は受け取ると専用端末の前で座る社員に届ける。

「これで、とりあえずは通常業務は滞りなく進められますよね？」

郁海が北条さんを無視して経理部社員に問い掛ける。

ぽつりぽつりと肯定の返事が戻って来た。

「同僚の突然のインフルエンザで混乱されていると思います。インフルエンザが発症したということは、ここにいらっしゃる方も、かかっている可能性があります。そういう時に厚かましいお願いではありますが、どうか本日決裁の仕事が終わるまでは残業をお願い致します。もし、どうしても期日中に終わらないようでしたら、総務部まで早めにご連絡下さい。対応致します」

郁海はぺこりと頭を下げる。

「巴さんのワゴンの鍵はいったん閉めておきますので、そのファイルはお手数ですが佐藤さんが保管して頂けますか？」
名指しされた社員は専用端末に座っている男性だった。佐藤さんというのか、彼は。
「社長、なにかございますか？」
郁海がのんびりと椅子に座って眺めていた社長に問い掛ける。
「んー」
社長は頬杖をついてのんびりと首を傾げた。
「経理部って、こんなに人がいらない？」
その疑問形に部屋がざわつく。
だが、社長はそのざわつきに微笑を浮かべて「北条さん」と名前を呼んだ。
「はい」
「今回の事態に関する始末書を提出して下さい。北条さんが機械関係に弱いのを知っていて経理部を任せた俺にも責任があるんで、責任の所在については、後日の役員会で検討しましょう」
にっこりと微笑む。
「あと、本当なら巴さんに頼みたいんだけど……とりあえずの改善提案を佐藤さんをリーダーで取り纏めて下さい。二度と同じようなミスをしないように、今回のことを教訓として情報の部内共有を心がけて欲しい」
経理部社員が息を呑む。
「それから、これが一番大事だが……」
社長が言葉を切る。
全員の視線が社長に集まる。
「郁海の今日の格好が可愛いからって、いつまでも覚えておかないように！脳内の記憶は速攻破棄しなさいっ！　あと、インフルエンザ。発症者がこの部から出たということを踏まえて、健康管理には充分気をつけるように。うがいと手洗いは大事だぞ。微熱が出てもすぐに病院に行け！　いいな！！」

隣で郁海が頭を押さえる。
俺だって溜め息を吐きたい。
「お父さんの、ばか」
小さな呟きが、ふたりが仲直りしたということ示していた。
うんうん、よかったよかった。
身を小さくして郁海が頬を染める。
「あの、本当にこんな格好で出社して申し訳ありません。今日は有給休暇を頂いていたんですが、緊急事態だとお聞きして取り敢えず急いで駆け付けてしまったんです」
「謝らなくていいぞ、郁海。可愛いのは会社を救う」
社長、それは変です。
「うんうん、社長！　それにはとっても同感」
ひらひらと紙を一枚振って曽我が現れた。
「曽我、それは頼んでおいたものか？」
「はい。なかなかいい証拠が揃いましたよ、ね、北条さん」
突然、曽我に名前を呼ばれて北条は身を固くした。
場の空気が一瞬冷えきったが、社長が大きく手を叩いた。
「はいはい。仕事に戻る！」
にっこりと笑った社長は曽我から紙を受け取って踵(きびす)を翻した。それに郁海が続く。俺も慌てて三人に着いていった。

第七話（前書き）

この小説はある会社やさる会社やこんな会社がモデルになっているように見えるかもしれませんが、特定の会社とは一切関係ありません。予めご了承下さいませ。

第七話

◇

「北条さんが、社内のパソコンからネット通販？」
　運用管理部の曽我氏は以前から北条のさまざまな不正に気付いており、息子を通して社長にリークをしていたのだという。曽我親子は社長親子に協力的で、今回の件も内密で調査してくれていた。
　役職の高い曽我氏が社長に近付くよりはと、息子を通して指示をやり取りしていたという。二人は郁海に対してもやさしくて、図書室では顔色の悪い彼女を曽我氏が心配をしていたのだと言う。
　北条さんはあの通りの人なので、たっぷり郁海に嫌味を言ってきたそうなのだが……。
　郁海が口元に手を当てて眉をひそめる。
「弱くありません？」
　その質問に社長と曽我は互いに視線を交わして、同じタイミングで肩を竦めた。
　社内のパソコンから外部のサイトにアクセスするのは匠工業では基本的に禁止されている。誰がどのパソコンからどんなサイトを閲覧したのか、誰が誰に宛ててどんな内容のメールを送ったのか、サポート室ですべて把握をしているのだ。
「彼を弾劾するならば、弱いだろうね。だが、私は北条さんをこの会社から追い出すつもりはないんだ」
　社長の言葉に吉野は瞳を丸める。
「一度の失敗で会社を追い出されるのなら、誰だって新しいことに挑戦しなくなる。彼はどんな悪事がバレたのか知らない。証拠がこちらの手に入ったものはネット通販だけだが、他にもいろいろ就業規則違反や不正はしているはずだ。それを改めて、仕事に励むなら

今回は許してもいいんじゃないかと思う」
父親の言葉に郁海はやさしく笑って「お父さんはやさし過ぎます」と呟いた。
それは会社で聞いたことのないようなやわらかな声。
「まあ、給料が払えないなんていう最悪の事態は回避されたんだから、北条さんをあまり責めることはできないな」
曽我さんは朗らかに笑って冗談口調で「いっそ、助けなければよかったのにって思わないの？　郁海ちゃん」と、穏やかじゃないことを言う。
「ダメですよ。給料日は、会社にとっては毎月の繰り返しでしかありませんが、受け取る人からしたら生きていく上での糧なんです。こちらの都合で一日だって遅らせてはいけません」
「郁海の言う通りだ。給料は働いた報酬だけではない。給料日は、毎月起こるハッピーであって、迷惑なサプライズであってはいかんのだ」
父親の言葉に郁海はやさしく微笑む。
いろいろな誤解が解けたのだろう。
「吉野くん、悪いけど郁海を家まで送ってくれる？」
曽我と話していた社長は不意に顔を上げて吉野を見上げる。
「郁海は本当だったら今日は休みなんだからさ、帰ってのんびりしてろ」
父親の顔をして社長が笑う。
「でも」
郁海が言い淀む。
「明日も申請通り休むか？」
郁海は困ったような父親の顔を正面から見据えて、そして花がほころぶように嬉しげに笑った。
「私に出社して欲しいですか？」
「欲しいです」
「どうしても？」

「どうしても！」
まるで年の離れた恋人同士のような、甘い言い合いに吉野は苦笑を零す。社長、娘に負け負けです。
「じゃあ、出社します。でも、今日はお言葉に甘えて帰りますね。この格好でいるの、想像以上に恥ずかしいです」
郁海は両頬に手を当てて身を小さくする。
「似合ってるのに〜！」
社長が嬉しそうに親指を立てる。
それに合わせるように曽我さんが「そうだよ。もっと郁海ちゃんもおシャレしなよ」と笑う。
「会社には会社服でくるのが私のルールなんです！　こういう可愛い服は、自分へのご褒美なんですよ」
郁海はスカートを軽く持ち上げてくるりと回って見せた。そして、すぐに、自分のした行動に恥ずかしくなったのか両手を口元に当てて壁に向かって固まっていた。
「はっ」
それを見て社長が声を上げて笑う。
「その服って、ローズガーデンファクトリーですよね？」
吉野が首を傾げた。
「嫌いじゃないんですか？」
吉野の言葉に郁海が振り返った。
「確か前に社長が、ローズガーデンファクトリーに郁海さんを連れていったらピンクが着たかったら自分で着ろって……」
「あれは、お父さんの言い方が悪いんです！会社で着るなら買ってやるって言うんですよ。小さな頃からローズガーデンファクトリーは私の憧れで、初任給で買うんだってずっと決めていたんです。だから……」
郁海はまた壁に向かってしまう。
「に、似合わないのはわかっているんですけど、どうしても欲しくて、今日は雪花お姉ちゃんと選んでいる時に父が来て……」

今度は壁に額をくっつけてしまう。
耳や首筋まで真っ赤だ。
「社長、なにをしたんですか……？」
曽我が社長を見やる。
「……あんな、恥ずかしいっ」
「社長」
郁海が羞恥に全身を震わせ始めた時、明るいあっけらかんとした声が響く。
「ショッピングモールの真ん中で愛を叫びました！！」
いえい♪　と言ってポーズを決めるな、この子持ち！
吉野は、想像するのを辞めた。郁海のこの真っ赤っか具合からして、そうとう恥ずかしい台詞を叫んだのだろう、この人は。
「もう、あのローズガーデンファクトリーには行けない……」
なんだか郁海が壁と一体化してしまいそうだ。
吉野は社長に向き直ると「では、壁と一体化する前に郁海さんを送って行きます」と告げる。社長は陽気に「おう！頼んだぞ」と、笑った。
なんですか、このバカップルみたいな雰囲気は。世の中には友達親子という母と娘の関係を指す言葉があるらしいが、このふたりは強いて言えば『バカップル親子』かもしれない。
「郁海さん、行きますよ」
「あ、はい……では、お先に失礼します」
郁海は丁寧に振り返ってお辞儀をする。
でも、顔は真っ赤だ。扉を開けて先に彼女を通して俺も一礼をして出ていく。
廊下に出ると、郁海はまだ真っ赤な頬を両手で押さえていた。
「郁海さん、よかったですね」
しみじみと言うと、郁海は顔を上げて、眉根を寄せながらも幸せそうに照れて見せた。
「どんな愛を叫ばれたんですか？」

悪戯心で尋ねてみれば、彼女は本当に綺麗とはこういう表情を指すのだというような、雲ひとつない澄んだ青空のような、澄み切って底がどこまでも見える海のような顔で微笑んだ。
「秘密です」
胸の中の小さな宝物を大事に抱えているような幼い子供の笑い方。
ああ、よかったと心の底から思ってしまう。
もう、あんな号泣をすることはないのだろう。よかった。本当によかった。
「了解です」
笑って返せば、郁海は頬に手を当ててまだ照れている。こいつ、本当に可愛い、と単純に思う。
階段を降りて外に出ると、初夏の風は爽やかだった。
が、ひらひらとした薄手のシフォン生地のワンピースの郁海は寒そうに両腕を押さえた。会社から社長の家までは歩いて十分程はかかる。俺は背広を脱ぐと彼女に差し出した。
「着ます？」
俺を見上げて郁海は小首を傾げた。
「寒いんでしょう？　風邪をひかれたら社長に俺が怒られます」
冗談めかせて言えば、郁海は申し訳なさそうに俺の背広に手を伸ばした。
「では、申し訳ありませんがお言葉に甘えてお借りします」
「あ、じゃあどうぞ」
背後に回って俺の背広を彼女の肩にかけると、肩幅が大き過ぎる。袖に腕を通しても手が出ない。
そういえば、百五十センチないんだっけ。俺と三十センチ以上違うんだ。なんというか雰囲気がデカいので普段は気にならないが、こういうなにか比較するものがあるとよくわかる。
「まるで、中国の人みたいです」
郁海は笑って両袖に手を入れて持ち上げて顔の前で一礼する。中

国の歴史映画とかに出てきそうな袖の垂れ具合。
「吉野さんは寒くないですか？　大丈夫ですか？」
寒さに負けて借りたものの急に心配になったのだろう。郁海は吉野を見上げる。
「あ、俺は大丈夫ですよ。筋肉があるんで、冬のがすごしやすいくらいなんです」
「筋肉ですか……やっぱり私も、もう少し運動をして筋肉をつけた方がいいのかもしれません。冬は寒くて寒くて。指先が冷えて仕方がないんです」
珍しく、郁海が世間話に答えてくれる。
彼女の中で、今はプライベートということなのだろう。口調も社内よりも子供っぽい。話している内容はババくさいが。
社内から出て、ガードレールのない幹線道路に出る。吉野は振り返って確認をして、車道側を歩く。
そんな吉野を見上げて郁海が微笑んだ。
「吉野さんは父と同じことをします」
「社長と？」
「今、車道側を歩いているでしょう？」
アスファルトに走る白いラインを指差して郁海が言う。
「どれだけ頑張っても、自分はどうせ守られる側だと感じてしまうなんて……せっかく守って下さろうとしているのに、バカですね、私は」
ふるふると首を振って郁海が微苦笑を浮かべる。
「郁海さんは、社長にそんなにピンクが好きなら自分で着ろって、言いましたよね？」
吉野の質問に郁海は「はい」と小さく肯定する。
「たぶん、俺も社長と一緒なんですが、こう……フワフワしてたりヒラヒラしてたりピラピラしてるピンクとかオレンジとかの可愛いものが好きなんですよ。でも、それは好きであって、自分が着たいわけじゃないし似合いもしないってのは自覚してる。だいいち、

俺や社長がそんなの着てたら犯罪です」
「……犯罪にはならないと思いますが、確かに社内でもピンクのワイシャツって少ないですね」
「だから、そういうのが似合う人がいたら着てくれたら嬉しいし、見てて幸せだな~とか思うんです。俺も、妹が可愛い服を欲しいと言ったら頑張って働きますからね」
俺は頭をガシガシと掻いた。
「まあ、俺は未だに妹の好きなローズガーデンファクトリーの服はプレゼントできないんですが」
郁海は黙って吉野を見上げるだけ。話を急かしたり、勝手に納得してこうなんでしょう？　と決めつけることなどしない。ただ、静かに続きを待ってくれる。
「男って……いや、男がみんなとは言いませんが、俺とか社長みたいなタイプって、好きで可愛いくて大事なものを守ることが生き甲斐なんですよ。可愛くて綺麗なものがあったら壊すんじゃゃなくて見守っていたい。だから、表面だけでも守られてやって下さい。頼ることが子供の仕事の時もあるんだなって、社長を見ていて思いました」
「頼るのが、子供の仕事？」
「俺達みたいなのって単純なんですよ。缶とかペットボトルとか開けられないから開けてって言われるだけで嬉しくて……ただの体格の差でしかないんですけど、そんなこと言われたら開けなくてもいい缶まで開けちゃうくらい浮かれちゃいます」
「ふふ。ここで可愛いとか言ったら怒ります？」
自分よりもちっちゃい少女に「可愛い」と言われるのは正直言って嬉しくない。
「えーーと、社長のためにも心の中だけにして下さい」
本当は俺のためになのだが。
「嫌な考えに聞こえるかもしれませんが、郁海さんが頼ったり甘えたりすることが社長を守ることに繋がってもいるんだと、俺は思い

ます」
　吉野の言葉に郁海は息を呑む。
　呆然と瞬きを忘れたかのように吉野を見上げたままだったが、息を大きく吸い込んで小首を傾げた。
「吉野さんの、妹さんが……もう、あなたの力など借りない、ひとりで生きていくと言ったら、どう思います？」
「……ちょっ、それは本気で落ち込むんで想像させないで下さいよっ」
　俺は車道に首をやって目頭を押さえた。
　ちょっとというか、だいぶというか、できる限り少しでも想像したくない。そんな未来。
「……いつか、妹も弟も俺から離れて飛び立つのはわかってます。できるだけ、いい翼を与えたいって思うのは、親バカに近いかもしれませんね」
　息を吐き出して、郁海を見た。
　郁海は俺を見上げて瞳を丸めている。
「郁海さん？」
「……吉野さんは、素敵なお兄さんですね」
　春のやわらかな光のような笑顔で郁海が呟いた。
　暖かな微笑が浮かんでいる。
　穏やか口調で褒められて、俺は息を呑んだ。
　郁海が歩き出したので、俺も歩き出す。
　ブカブカの背広を着てちょこちょこと歩く。俺は歩調を気をつけて、彼女に合わせる。
　なんだっけ、古典で習った。
　枕草子だっけ……可愛いものをつらつらと書き綴る。
　俺だったら、可愛いもの、ピンクのヒラヒラ、真っ白のレース、大きな背広を着た少女がちょこちょこと歩く姿とか書き連ねるかもしれない。
　爽やかな青空に、今日はふたつの雲。

彼女の歩調に合わせてゆっくり歩いていると、右の手のひらに細く冷たい感触。見下ろすと、郁海が俯いたまま吉野と手を繋いできたのだとわかる。

たぶん、なにかを言ってしまえば、彼女は「申し訳ありませんっ」とか言ってこの手を離してしまうのだろう。

俺に重ねているのだろうか、亡くなった兄を。

それを思うと切なくて、吉野は黙ったまま、身長と一緒で可愛い手をやさしく握り返した。

ピクリと肩が震える。だが、俯いたまま。

強く握れば折れてしまいそうな小さな手。

この手が脅威のスピードで書類を仕上げたり、図面を折ったり、指示を出したり、打ち込みをしたりするのを知っている。ただ、守られるだけの存在じゃないのだと、父親と共に戦おうと、父親を守ろうと頑張る手だというのを知っている。

大きさで言えば小さいけれど、でもとても存在の大きな手なのだとわかっている。でも、だからこそ、この手を守りたい。この存在を守りたいと思い、働こうと思い、強くなろうと思うのだろう。

実際、俺もそう思ってしまっている。

吉野は急に自覚した自分の感情に戸惑いを覚えつつも、まあ、いいかと軽く思う。

今、握っている手は彼女の家に着けば離されるが、今度は自分から彼女の手を握ればいい。

握れるようになればいい。

簡単なことだ。

いや、振り払われるかもしれないが、まあ、その時にまた考えればいい。

会社に程近い一軒家。あれだけ大きな会社の社長の家だというのに、周辺の住宅とさほど変わりがない。

名残惜しくて離せずにいたら、「吉野さん」と小さく名前を呼ばれた。

「ん？」
と、短く問い返すと郁海が真っ赤な顔を上げて照れ笑いを浮かべる。
「送って下さって、ありがとうございます」
「……いや」
「また、会社に戻るんですか？」
「あ……はい」
これは暗に手を離せと言っているのだろうか……だが、郁海から手を離す気配はない。
しばらくの間、玄関の前でふたりして黙ったまま手を繋ぎ続けてしまった。
ダメだ。このままじゃ。いったん会社に戻らなければいけないのに。
俺は覚悟を決めて「じゃあ、会社に戻ります」と笑って手を緩めた。
「はい」
小さく頷いて、郁海も手を緩める。
大きな手と小さな手が離れた瞬間、景色が歪んだ。
「あれ？」
呟くと同時に、吉野の体は、その場に崩れ落ちた。
「吉野さん！吉野さんっ！？」
郁海が必死に名前を呼んでくるのが、なんだか遠くに聞こえる……
……こんなふうに、誰かに必死に名前を呼ばれるなんて初めてだ。
そんなことをのんびりと考えながら、吉野は意識を手放した。

第八話（最終話）（前書き）

この小説はある会社やさる会社やこんな会社がモデルになっているように見えるかもしれませんが、特定の会社とは一切関係ありません。予めご了承下さいませ。

第八話（最終話）

◇

郁海は、病院のベッドでもりもりとご飯を食べている吉野を見て瞳を眇めた。
「栄養失調だそうですね？」
そう、倒れた原因は栄養失調。
目が覚めた時、目の前には白しかなくてビックリした。天井も壁もカーテンもベッドも白。その白は病院の白だ。
耳にずっと残っている自分を呼ぶ郁海の悲痛な叫び。「吉野さん！吉野さんっ」と、手を握って彼女が俺の名前を何度も何度も呼び続けているのが記憶の片隅に残っている。
なので、目が覚めた時に看護士さんが呆れたように「栄養不足ですよ、吉野さん」と言った時には正直に言って、違う意味で眩暈がした。仁王が再臨すると……。
そして、想像通り目の前には背のちっちゃい仁王が立っている。
「はい。その通りです」
吉野の返答に郁海の眉根がぎりっっと寄る。
「入社してから一ヵ月半もの間、ずっっと昼はサラダバーで、夜はカップラーメン……？」
食べていたデザートのバナナをそっとテーブルに置く。そして口の中の物を慌てて飲み込んだ。
ヤバい。これは相当、怒っている。
この時間に来てくれたということは、きっと彼女は昼食も摂らずに駆け付けてくれたのだろう。この病院は会社から歩いて十分程の、郁海の家とは反対の方向にある。
郁海の手は真っ白になるくらい握り締められている。
「吉野さん、中学生の時に家庭科を習いましたよね？」

「はい、習いました」

「ちなみに、朝ご飯は？」

「あ……の……」

「あの？」

口調が切れかかっています。低音です。

「た……食べてません」

言ったと同時に般若（はんにゃ）が郁海の背後に浮かんでいる錯覚が見えた。

錯覚だ錯覚。錯覚であってくれ。般若と仁王のコラボレーションなんて本当に勘弁だ。

「あなたは社会人として、自分の体調管理もできないんですか？　もともと体が弱くて、どうしても自己管理が難しい人も世の中にはいます。でも、自分の体調を考慮して、ベターな状態で働けるように調整するのは大人として当然のことです。それなのに、朝は抜いて昼は煮た物よりも栄養価の少ない生野菜に、カロリー・塩分ばかりが溢れ返ったマヨネーズたっぷりのポテトやマカロニのサラダだけ？　夕飯もカップめん……どうせ卵を入れたりキャベツを刻んで入れたりなんて工夫もしていないんですよね？」

ギロリと睨まれる。

どうしてこいつは心配をしていると目つきが悪くなって睨んでくるんだ……

「まったくもって、弁解のしようもなく」

「横領した銀行員のような返事はけっこうです」

郁海が持っていた目安カバンからばさりと紙の束を取り出した。

「見て下さい」

中から出てきたのは食堂に関する改善提案ばかり……

「今日は吉野さんの代わりに畠山さんに回ってもらいました。ちなみに、今日は滞りなくどこの部署も仕事が回っていますよ。畠山さんも清水さんも出社してくれています。私が連絡したら、父親を甘やかし過ぎだと怒られてしまいました。ええと、話を戻します。そうしたら、食堂に関する意見がこんなに！」

『サラダバーを毎日食べている人がいます。彼らの栄養が心配です』
『値段の割りには量が少ないです。サラダバーしか食べない人がいるのはそのせいだと思います』
『サラダバーをなくして、煮物バーにして下さい』
『サラダは健康に良さそうに思えますが、あんなにマヨネーズがたくさん入ったポテトサラダばっかり食べていたら返って体に悪いのではないかと思います。食堂をもう少し改善して下さい』
どれもサラダバー関連。
「これだけ意見が統一されているのはおかしいと思って、少し調べてみました……これらは全て『よっちゃんの食生活を守ろうの会』のみなさんのご意見だそうです」
「は？」
「吉野さん……ご自分が社内で有名人なの、知らないんですか？　開発部の清水さん達が好意で作った会だそうです」
額にわざとらしく手を当てて郁海がはあ、と溜め息を吐く。
「もともと、サラダバーで飢えを凌（しの）ぐ若い社員がいることは把握しておりました。ですが、食堂を委託している業者と折り合いが悪く、代わりの業者も見つからなかったので業者変更を先伸ばしにしていたのですが……本格的に動くことを先程の役員会議で決定致しました」
「……はあ」
「とりあえず、今から社長の家に行って下さい」
「は？」
「いくら即時退院が許可されたといえ、あなたを栄養素のある食糧がまったくないアパートに帰らすわけには参りません！　今日は即刻我が家に行って、栄養のあるものをたっぷり食べていらっしゃい！！」
「え？」
「四の五の言わない！反論は認めません。家には既に連絡してあり

ます。祖母が料理を作っていますから、そのからっ空で背中とお腹がくっついちゃいそうな胃を美味しいご飯で埋めて下さい。あと、ほがらか園にも連絡は入れてあります。妹さんと弟さんも社長宅で待っています」

「……」

もう、黙るしかなかった。

郁海はそれだけ言うと踵（きびす）を返し、病室から出ていこうとする。だが、振り返ってにっこりと笑った。寒っ。

「それから、新聞取扱店の店長の大江氏には一か月後の退職を伝えておきました」

「うげ」

そこまでバレてますか。

「店長さんは快く了承して下さいましたよ。代わりの方はこちらでも探しています……今回だけは弟妹を思うやさしい心根に感動したということで不問に処しますが、次に就業規則違反をした場合は覚悟しておいて下さい」

ふっふっふ。という低音の笑い声が怖い。

「す、すみません」

「『すみません』という言葉は、社会人が使う謝罪の言葉ではありません」

そういえば、曽我さんも注意されていたっけ。

『すみません』という言葉は、日常でも頻繁に使われる。ちょっと誰かにぶつかった時、扉を開けてもらった時、落とし物を拾ってもらった時。本来なら『ありがとう』が正しい場面でも『すみません』は使われる。だから、『すみません』は謝罪の言葉であっても、軽く、会社で失敗をした時に用いる言葉ではない。

英語で言う『アイムソーリー』を社会人が日本語で言う時は『申し訳ありません』になるのだと……言ってしまえば相手が『すみません』と言っている時は本当に謝罪はしていないかもしれないと考えるべきなのだと郁海から聞かされたことがある。

日本語って難しい。
さらに余談で、海外で日本語と同じ感覚で『アイムソーリー』を言ってはいけないという。『アイムソーリー』は『自分に非があります。申し訳ありません』という意味なのだそうだ。
へえ。
「も、申し訳ありません。ごめんなさい。許して下さい」
うううう、と思いながら思い付く謝罪の言葉を口にする。
「郁海、あんまり苛めるな」
「苛めるなんて人聞きの悪い！」
「昨夜からずっと顔を見るまで心配だって言っていたくせに、いざ本人を目の前にすると小言が出てくるんだから……」
「社長っ！」
郁海が真っ赤になっている。
扉を見ると、そこには社長が立っていた。後ろに妹の桜良と弟の祥真がいる。
「お兄ちゃん！」
二人が走り寄ってくる。
「社長、書類は？」
「これから一緒に帰って、やろうな？」
社長は真っ赤な郁海の頭をがしがしと掻き回す。
おお、郁海がおとなしく頷き返すだけだ。
「で、俺から郁海と吉野三兄弟に提案があるんだが」
「「「提案？」」」
見事に声がハモった。
「吉野三兄弟。うちに、丁稚奉公(でっちぼうこう)に来ない？」
にこっと投下された爆弾発言に部屋の中の未成年が全て固まった。
「丁稚奉公って、なんですか？」
「ああん！そこから説明しないとダメなの？　丁稚奉公って言うのは、子供が親元から離れて商人の家でたくさんの奉公人(ほうこうにん)、その商人

の家で働いている人達ね、と一緒に生活を共にしながら雑役なんかをして、将来自分でも店を開けるように修行することだよ。吉野くんは時代劇とか見ないの？」

「僕、知ってる〜。園長先生は大岡越前がもう一度やらないかっていつも言ってる〜」

祥真がにこにこと笑いながら言う。その頭をがしがしと撫でてやりながら吉野は社長を見上げる。

「それは、俺だけじゃなくて桜良と祥真も一緒ということですか？」

「社長、寝言は寝ている時だけにして下さい」

郁海さん、言い回しがお局ではなくオヤジくさいです。

「え〜〜。だって、ずっと綾子さんがひとりなのって心配だし、桜良ちゃんと祥真くんが先に帰って綾子さんと一緒に居てくれたら助かるじゃん。あ、桜良ちゃんと祥真くんは別に働かなくていいからね。でも、お手伝いはしてもらうよ。そうすれば郁海と綾子さんの家事負担も減るし、郁海が先に帰る時には吉野くんにボディーガードになってもらえるし、吉野三兄弟は一緒にいられるし、もちろん、吉野くんの栄養失調も二度と起こらないし」

「いい大人が『だしだし』言わないで下さい」

「お願いします！」

郁海が顔をしかめているのが目に入ったが、吉野はかまわずに叫んだ。自分の力だけで三人が一緒にいられる道を探そうと思っていた。でも、正直に言って無理だというのが社会人になって実感している。

学歴も普通課の高卒。なにか特別手当がつくような技能も持っていないし資格もない。一年後の昇給（ベースアップ）もそれ程期待できない。

「社長！　どうか、よろしくお願いします！！」

俺はベッドの上で頭を深々と下げた。

「わたしも！　わたしからもお願いします！！　兄弟三人で暮らせるようにご支援下さい」

ほら！　と促して弟の頭も下げさせる。
真摯な顔をして頭を下げる三人を見て無下にできるわけがない。
郁海は痛む頭を指先で押さえて嘆息を吐いた。
彼の履歴書を見た。
総務部部長がアパート賃貸の後見人になったことを知った。
そして秘書室に彼が来た。
この時から周囲が自分を除いて、悪だくみをしているのではないかという確信はなんとなくあったのだが……。
「郁海さん！　郁海さんはイヤ？　わたし達と同居はしたくない？」

吉野に似たふわふわの髪の毛、大きな色素の薄い瞳をしている少女。この子がよく吉野さんの話に出て来たローズガーデンファクトリーが好きな、彼の大切な妹。その少女が瞳を揺らめかせて見つめてくる。
秘書にするならばもっと相応しい人材はたくさんいた。
――確信した。
父の狙いはこの子だ。
悪い意味ではなく、私に年上で社会人以外の同性の友達を作らせようとしているのだ。
なんてありがた迷惑な『故意犯』。
だが、しかし、残業で遅くなることの多い自分達のことを考えると祖母の傍に誰かがいてくれるのは嬉しいし、助かる。きっと祖母は彼らが同居することになったら喜ぶだろう。基本的には人の世話を焼くことが好きな人だから。（……でも、吉野さんの同居は反対するかもしれない。男女七歳にして席を同じうせず。などという昔気質な人だから）
それに、この三人はなにも悪くない。
むしろ同情すべき人達なのだ。
溜め息を飲み込んで、瞳を一回だけ閉じた。
そして開く。

「かまいませんよ。私も祖母の傍に誰かがいて下さるのは安心します」
営業スマイルを浮かべてみせる。
その表情を見て、桜良は花がいっきに開くかのような満面の笑顔を浮かべて郁海に抱きついた。
「郁海さん、ありがとう！！」
ぎゅうぎゅうに抱きついてくる桜良の背中をぽんぽんと叩きながら吉野を見ると、彼は（本当にいいのか？）という色を瞳に浮かべていた。本当に感情を隠すのが下手な人だ。
だから、素の顔を浮かべて頷いた。
きっと、今の自分は困ったような呆れたような、でも泣きそうなくらい嬉しい顔をしていると思う。
社長である父の取った、ひとりの社員を優遇する甘い手段。でも、こういう甘さのある人だから憎めないし嫌いになれないし、本心を言うなら好きなのだ。
吉野は妹の桜良に抱き締められている郁海を見て瞳を丸める。突然三人も居候が増えるというのに、彼女は驚いていた割りにはなんというか予想をしていたような態度を取る。
予想？
吉野は社長を見上げる。
社長は吉野の視線に気がついて近付いてきた。
「社長って……変に頭が回りますよね」
溜め息を吐く。
この人は、自分と娘の仲を引っ掻き回すことのできる存在を探していたのではないだろうか……。
郁海と年が近く、会社というしがらみを知らない、しかも郁海よりひとつ下の妹がいる俺という存在。
思い返してみれば、匠工業の就職試験を受けてみないかと誘ってくれた恩師は、ほがらか園の園長とも仲が良かった。
「ほがらか園の園長さんは、俺のダチのオヤジなんだよ」

ニヤリと笑って見せる。
「全部、社長の思った通り……ですか？」
「まさか。予想外のことばっかりだ」
と飄々とした笑顔で答える。本当にこの社長は胡散臭い。
「吉野くん、知ってる？」
こういう、先に「知ってる？」と聞いてくる言い回しが親子そっくりだ。
「は？」
「社長はヒーローでなければならないんだ」
突然のぶっ飛んだ発言に俺はぐうっと思わず唸ってしまった。傍で社長を見上げていた祥真がびっくりしている。
「現実をわかっていても、いつだってヒーローのように気高い思想と理想論と正義を叶えるために奔走しなければならない。理想を掲げず私利私欲のために邁進する社長がトップの企業は、優秀な社員から見限っていく」
確かに、北条さんのような人が社長だったら、いろいろな人が……特に優秀な女性社員がどんどん次から次へと辞めていくだろう。
「妹と弟のため奔走する若手社員を優遇するのって、美談だよね？」
俺は息を呑んだ。
目が怖い。
なんというか、太刀打ちできないと心底実感してしまった。
そして、思う。
この人を助けたい。この人の力になりたい……郁海と同じように。
まあ、前提として脱走しないとか仕事をちゃんとやるならば、という仮定がついてしまうのだが。そして、その仮定は無理だと自分でもわかっている。
「祥真、内緒の話を教えてやる」

「ないしょ？」
「この人はね、王さまなんだよ」
「おうさま？」
「お兄ちゃんは、この王さまの下で働いているんだ。だから、あの、お姉ちゃんはお姫さま」
にこにこ笑って告げると、祥真は笑ってすごーーい！！　と叫ぶ。
郁海と桜良はふたりして吉野を怪訝そうに見ている。だが、社長は瞳を微かに見開いて苦笑を浮かべた。
「本当に、予想外だよ、吉野くんは」
肩を竦めて笑う。
そして、顔が近付いて耳元に囁かれた。
「但し、俺のお姫さまに手を出そうとしたら覚悟しておけよ」
うわ。
親バカ炸裂。
しかも俺の気持ちなんて筒抜けですか。
さすが社長。侮れない。
「善処します」
俺の返答に、社長は苦笑を返す。
郁海が言っていた。会社で使われる「検討致します」「考えさせて頂きます」「善処致します」はどれも返答としては否を表していると……。
郁海が桜良に抱きつかれたまま小首を傾げた。
「宣戦布告ってことかい？」
ふっと社長が大人の笑みを浮かべる。
余裕のある大人の、自信満々の笑み。その笑みを浮かべられるようにしたのは誰のおかげだと思っているんですか？　と一瞬嫌味にそう思ったが、だが、きっとこの社長のことだ。俺がいなくたって、娘の気持ちにいつかは気付いていただろう。時が早かったか遅かったかそれだけの違い。
でも、その時間の違いは……大きな違いではある。

娘と自分の間に、俺という石を投じる。そこから起きる波紋、それが彼の狙ったもの。
そんな手段を講じる男に宣戦布告なんてまだ早過ぎるし、だいいち自分の気持ちだって、はっきりしているようで曖昧な部分も多い。

吉野は自社の社長を見上げて破顔した。
「そうしたい気持ちもかなりあるんですが、困ったことに俺はおふたりの姿を見ているのも好きなんです。なので、いつまでもバカップル親子でいて下さい」
社長とお局は顔を見合わせて、片方は瞳をぱちくりと瞬かせ、もう片方は声を上げて笑った。
「お父さん、吉野さん、なんの話？」
「内緒です」
俺が笑って答えれば、十五歳のお局はぷうっと頬を膨らませた。
でも、黒縁眼鏡の奥の瞳は今はやさしく笑っている。

おしまい

第八話（最終話）（後書き）

読了、ありがとうございます。
目指せビジネス小説だったのですが、ホームコメディになってしまったような気がします。
少しでも楽しんでいただけたなら嬉しく思います。

外伝のお知らせ

このお話に、直接の関係はないのですが、短編として『お局さまは１５歳？』の外伝を投稿いたしました。タイトルは『可愛い彼女はブラックコーヒー、俺はミルクティー。』です。
開発部の姫乃さんが社会人になりたての頃のお話です。

よろしければ、ぜひ外伝も読んでいただけたらと思います。

＊＊＊＊

２０１０年１１月追記‥

次からは幕間が始まります。２００９年の夏に完結をして一年以上、頭の中では元気に郁海ちゃんたちが駆け回っていましたので、それを少し書いてみます。
幕間としての更新ですが、しばらくお付き合い頂けたら嬉しいです。

藤沢みや拝

幕間「ある現代新卒社会人一年生の休日」：第一話

吉野は狭いアパートで着ていたシャツを脱いでほっと息を吐く。

Tシャツと綿のズボン、それに下着、後はタオルを手にしてユニットのバスルームに向かう。

ざっとシャワーを浴びて、着替えて髪の毛が生乾きなのもそのままに部屋を出る。

(今日の夕飯、なんだろな～♪)

くたびれたスニーカーを履きながら、吉野はウキウキとしていた。

「駄目です」

郁海の祖母、綾子の短い拒絶の言葉に吉野は瞳を丸める。

「若い男女が同居など、以ての外です！」

ぷりぷりと綾子が怒りながら両の拳をぶんぶんと振る。

なんだか愛嬌がある。

さすが、社長の義理のお母さん。

「でも、お祖母ちゃん……」

「郁海、いい？　私は、桜良ちゃんや祥真くんと一緒に暮すことに反対をしているわけではないの。でも、英利くんは結婚できる年齢の男の子よ。私がたとえ、なにもないと言っても悪意を持って見ることしかできない愚かな人間はどこにでもいる」

「綾子さん……？」

社長が不思議そうに義母を見つめる。

「恭一郎さん。貴方はあまり気にしていないようだけど、郁海が十

五歳で自社で働いているということは、とっても珍しいことなのよ。十五歳の会社員。それが匠工業社長の愛娘で、しかも冗談とはいうことにはなっているけれど副社長辞令まで出たことがある。十五歳の女性副社長候補のいる会社……それがマスコミにでも取り上げられたらどうなるか、わかっている？」
「え？」
　思ってもいない指摘に、社長は瞳を瞬かせた。
「その上に自社社員と同居だなんて、色眼鏡を掛けて見ることしかできない人間はごまんといるわ。社長というだけでやっかみを持って見る人種が多いということ、恭一郎さんは身を持って知っているはずでしょう？」
　綾子はそう言うと、はあ～っと大袈裟に溜息を吐いた。
「あ、あの、俺もさすがに同居はまずいんじゃと思っていたんで……弟妹さえ許して頂ければ……」
　そう。それは俺も思っていた。
　同居。
　郁海と同居。
(この際、社長が一緒というのは考えないことにする)
湯上りの郁海とか、寝起きの郁海とか、台所でご飯作ってる郁海とか、そういう彼女と毎日一緒にいるというのは……正直、身が持たない。と、思う。
　良い意味でだ。
「じゃあ、英利くんは通いね」
　綾子の断言に吉野は瞳を瞬かせた。
「桜良ちゃんと祥真くんが住み込みの丁稚(でっち)で、英利くんが通いの丁稚ね。じゃあ、丁稚たち、お仕事の話をしましょうか♪」
「「「……」」」
　と、いう感じで、俺たちは匠家で正式に丁稚奉公をすることになった。
　まあ、丁稚奉公って綾子さんは連呼するけれど……あれは、俺

たちに遠慮を抱かせない配慮のが強い気がする。仕事の見返りとしての保護。
それは、俺たち兄弟が社長と顔見知りということで起きた僥倖だけど、こういうチャンスは逃さないのが吉だと思うんだ。

吉野は徐々に厳しさを増していく太陽を見つめて瞳を瞬かせる。
六月後半。
世の中はボーナスの話題で満載だ。
しかし、このボーナスの話題、実は結構微妙な話題なのだ。
――派遣社員にはボーナスがない。
その分、通常の時給が高いのだが、派遣社員にとっては正社員の、この『もらって当たり前』と感じている話題が腹立たしいのだという。巴さんがブツブツと言っていた。
巴さんは、北条さんにも辛辣に口答えをしているというが、その態度は相手が誰であっても変わりがない。郁海さんのことは気に入っているので甘いらしい。
ちなみに、経理部ではあの後、巴さんが北条さんのパソコン教師になって鍛えているという。パソコンだけじゃなくて心身ともに……。
話を戻して、最近はお弁当を持参する（持参というよりも会社で郁海が渡してくれる）ことが多いので、食堂で食べるよりも会議室や休憩室の机の端で食べることがある。時折、味噌汁が飲みたくなって食堂に行くといろんな人が一緒に食べてくれる。
一人でいるから気を遣ってくれるらしい。
みんな、大人だ。
で、この前、巴さんと畠山さんと一緒になった。
巴さんは、一言で言うなら漢前（おとこまえ）な人だ。男じゃなくて漢。
その漢前の巴さんは、妙にやさぐれていた。

「世の中、ボーナスって騒ぐけど、満額で貰える人なんて少数なのよ。バイトやパートや派遣なんてもらえもしないし、少ないどころか貰えない正社員だって多い。少ないって文句言ってる輩を見ること自体が腹・立・た・し・い！！」
えーーと、俺はコメントは差し控えました。
畠山さんはのんびりと「巴ちゃんのボーナスメランコリックシンドロームがまた来たね〜」と笑っている。訳がわかりません、そのシンドローム。
まあ、大多数の意見なのか少数の意見なのかはわからないけれど、時期としては一部の人にとっては羨望と憎悪が交じり合うボーナスシーズン。
入社したての俺は、賞与という文字には縁がなかった。
代わりにあったのは、
『寸志』
というもの。なんというか、お小遣いのようなものらしい。
でも、もらえないよりも断然良いし、利益を少しでも社員に還元しようという社長たちの志は嬉しいと思う。
「…………」
すみません。本心を偽りました。
まあ、冬に期待だ。
入社して三ヶ月。まだまだヒヨっ子だけど、そろそろ一人で仕事を完璧に回せるようにならないといけない。なんだか覚えないといけないことがあるけれど、確実に一歩ずつ。
そう思いながら歩いていると目の前に目的の一軒家があった。
(今日の夕飯、なんだろな〜♪)
こんなふうに思えることが、こんなにも幸せなことだと吉野が知ったのはつい最近。
施設では食事のメニューは一か月分貼られていて、見ればわかった。
(そういえば、昨日、ジャガイモが安かったと郁海が言ってたな)

肉じゃが、カレーライス、タラモサラダ、ジャーマンポテト。思い浮かぶメニューは目新しさがないかもしれないが、そういう想像はなんだか心をあたたかくする。

「ほら、郁海、吉野くん、俺からのボーナス！！」
肉が多めの肉じゃが、胡瓜のたたき、豆腐キムチ、揚げ茄子とトマトのサラダ、きのこの味噌汁という夕飯を食べ終えて、手を合わせていたら社長がウキウキと封筒を取り出した。
「ボーナスですか？」
首を傾げる郁海は七分袖のトレーナーにジーンズ地のスカートというラフな服装だ。それにエプロンをしている。今日の夕飯担当は郁海だ。
毎週水曜日は総務部はノー残業デーのため、残業はできない。そのため、郁海の夕食当番は水曜日になることが多い。
お茶をすすっていた彼女は湯呑みを置き、社長から封筒を受け取ると中を見る。
そして、さらに首を傾げた。
「遊園地のチケット？」
その呟きに社長は胸を踏ん反り返して笑う。
「そうだ。今度の日曜日に行って来い。郁海は財布は持っていくなよ」
「は？」
その言葉に瞳を丸める。
「当日の財務大臣は吉野くんだからな☆」
「「……」」
吉野はただ決定された日曜日の行事に、小さく溜息を吐いた。

◇

そして、日曜日。
待ち合わせは社長宅前。
吉野は着慣れたTシャツと綿のパンツ。就職祝いに妹と弟が買ってくれたキャップを被っている。遊園地で並ぶことが多いのなら帽子が必要かもしれないという郁海の言葉に、新聞配達時に使っていた帽子を被ってきたのだ。
対する郁海は、淡いピンクの裾がふわっとした長袖のシャツに、膝丈のズボンというでたちだ。女の子の服の名前はよくわからん。
「可愛いでしょ！！　郁海さんのお洋服はわたしがコーディネートしました！　バルーン裾に胸元にビーズのアクセント。首元にリボンで結ぶデザインのキャミを合わせました。んで、遊園地だからスカートはやめてキュロットです。グレーのキュロットに合わせて、キャスケットもグレーです。アクセントは両方ともコットンのトーションレース。足元はハイソックスに、歩きやすいラウンドトゥでストラップの靴にしてみました〜。でも、お兄ちゃんのペースで歩いちゃ駄目だからね！！」
まるで呪文です。
郁海は手にしていた帽子を被って微苦笑する。
「では、行ってきます。行きましょうか、吉野さん」
「あ、はい。じゃあ、行ってきます」
かしこまって礼をする吉野を見て、社長が「硬いね〜」とぼやいているのが聞こえたが、郁海はただ溜息を零すばかりだ。
一応、デートにはなるのだろう。

思いっきりお膳立てされたものだが。
喜んでいいのか情けなく思えばいいのかわからない。
まあ、せっかくのチケットを無駄にするのはもったいないので、今日を楽しむことにしよう。なんにせよ、生まれて初めての遊園地なのだから。
北苑市から今から出かける遊園地までは、県庁所在地のある市まで出て、それからバスで行くことになる。
駅まで歩いて、それから電車に乗って、バスに乗り換えて……。
その間、郁海とはとりとめのない話ばかりをしていた。
吉野の弟妹たちが社長の家でお世話になるようになってから、夕食時に訪ねるようになっていた。夕食を頂いて、弟妹たちと洗い物をして、それから弟妹の話を聞いて遅くとも九時くらいにはお暇をする。
その間、郁海や社長はそれぞれの今まで通りの生活をしているらしい。
郁海はたいてい読書をしているか、パソコンを使っている。社長は書斎に篭ることもあればリビングでぼんやりとしていることもある。時折、吉野に向かってつらつらと経営論や薀蓄（うんちく）を語ったりしてくる時もあった。吉野はほとんど聞き役で、弟妹が相手でも社長が相手でもそのスタンスはあまり変わることがない。
「吉野さん、大根が嫌いだったって桜良ちゃんから聞きましたが、今は食べてますよね。どうやって克服したんですか？」
なのでこんなふうに話を引き出そうとされると返って戸惑ってしまう。
会社の同僚だからといって、プライベートな話はあまりしない。それを頑張って共通項目を混ぜつつ、聞こうとしてくれるのはなんだかくすぐったい。
「いつだったか……中三くらいの時かな、おでんを食べてたら急に大根って美味しいなって思ったんです」
「急にですか……？」

「急にです。自分でも不思議なんですが、それ以来、おでんの大根は大好物のひとつですね」
「ひとつということは、他にもあるんですか？」
などという感じだ。
郁海の最近の読書傾向はビジネス書関連で、しかも『聞く技術』というものが多い。なんというか人体実験されているようで変な気分だ。
今まで、あまり自分のことを語ることのなかった吉野は戸惑いを隠しきれない。
(思い返せば、奨学金のために必死だったんだよな……)
スポーツ推薦だったから、そのために柔道に励み、朝夕は新聞配達。長い休みの時なども部活の合間を縫って学校から許可をもらってバイト三昧だった。
クラスメイトからの遠出の誘いもお金を理由にすべて断っていた。
(あれ、俺……ひょっとして友達、いないのか？)
ちょっと遠い目をしたくなる。
就職して、返って時間ができるようになった。確かに掃除や洗濯などの家事はあるけれど、施設で暮していた頃に比べれば忙しさは感じない。
だからなのか、郁海のこととも合わせていろいろと考えてしまう。
ふと思いついて尋ねてみる。
「郁海さんは遊園地は行ったことあるんですか？　ちなみに俺は初めてです」
吉野の質問に郁海は瞳を丸めた。
そしてふっと微笑む。
彼女のこういう態度はなんだか大人びている。
「じゃあ、一緒ですね。私も初めてです。……実は、かなり楽しみなんです」
郁海はそう言うと鞄の中からガイドブックを取り出した。
「絶叫マシーンって乗ったことがなくて……どれだけ怖いのか、

興味がありますー」

興味の方向が間違っている気もするが、吉野はそれは指摘せずに、ガイドブックを借りる。

「どう回ったら効率的ですかね？」

「そうですね。人気のアトラクションは並ぶでしょうから、それを非効率ととるか楽しみととるかでも変わるでしょうね」

「ホットドッグとかハンバーガーとか買い込んでから並べば効率的……かもしれませんが、遊園地って効率目的で回るものでもないですしね」

「そうですよね……これが研修旅行とかなら元を取るためにも必死で回るべきでしょうけど……」

「第一、俺は絶叫マシーンに耐えれるか自信がありません！」

思わず断言すると、郁海は声をあげて可愛く笑った。

郁海は大きな口を開けてぽかーんと園内を見ている。
華やかでリズミカルな、でもなんだかノスタルジックさを漂わせる音楽が園内に響く。陽気な電子音が踊る屋外ゲームコーナーを抜けて、とりあえずは目的のジェットコースターを目指す。
スカイブルートルネード。
その名の通りに水色に塗られた木製のジェットコースターだ。
きょろきょろと落ち着きなく周囲を見回す郁海の様は、本当に可愛い。
……彼女の様子を見て『可愛い』以外の単語が出てこない自分を省みて、吉野は苦笑を零す。
恋は、人を詩人にするとか社長がほざいて（社長に対する敬意？なに、それ、美味しいの？）いたが、どうやら自分の場合は単一単語のみを繰り返す脳味噌にしてしまうらしい。
浮かべていた笑みをふっと落ち着かせ、そしてまた周囲を見て綻ばす。
それを繰り返す郁海を見て、吉野は肩を竦めたくなる。
（社長の……アホ）
心の中でそっと思う。
先月、ようやく長い間、培われてしまった不毛な関係を修復したばかりだというのに……どうして、ボーナスだと言うのなら、郁海だけを誘わないのか……
娘の、こんな愛らしい（せめて可愛いじゃない単語を選んでみた）様子を見逃すなんて、本当にバカだ。
「吉野さん、まだ、あんまり人が並んでいませんよ」
郁海が少し興奮して指差す先は、まだ行列と呼ぶには短い人の列。
彼女が指を指すなんて珍しい。
「せっかくだから最前列か最後尾に乗れるといいですね」

彼女の赤い頬を微笑ましく眺めながら答えれば、郁海はとたとたと走って列の最後に並ぶ。くるりと振り返って「はい！」と笑う。

その姿に（まるでデートだ）と感慨深く思ってしまう。

「木製のジェットコースターって、普通のジェットコースターと違うんでしょうか？」

首を捻っているが、そんなことを聞かれても遊園地自体が初めての吉野にわかるわけがない。

「……ミシミシいうとか？」

せめて笑いを取ろうと頑張るが、この言葉はお気に召さなかったようだ。

「吉野さん、シャレにならないこと言わないで下さい」

ジェットコースターに乗るということは、いったんは高いところに上ることになる。

それが『たいてい』なのか『ふつう』なのかはわからないが、まあ、普段よりは上に行くことになった。潮風が頬を撫でる。

「寒くないか？」

聞けば郁海は首を左右に振る。

だが、体を抱き締めるように腕を回している。多少は肌寒いのだろう。

「こっち」

せめてもと思って、腕を引いて風上に立つ。

その様子を見上げて、郁海は瞳を二回瞬かせて、そして微笑をする。

「ありがとうございます」

「今日は背広持ってないからな」

「あ、一応、ショールを持ってきたんです」
郁海はごそごそと鞄の中からふんわりとした白い布を取り出して首に巻いた。
淡いピンクの小花が散っている。
「お父さんが選んでくれたんです」
にっこりと笑うその姿を見て、頭の中でもう一度思う。
(社長の……どアホ)
そのどアホは、実は下にいたりする。
社長は、自分の視力が超絶に良いことを忘れているのだろうか。
怪しいサングラスをつけて手には双眼鏡、後ろには呆れたような桜良と祥真がいる。
……きっと、綾子さんは入り口入ってすぐで分かれる温泉施設のほうにいるのだろう。たぶん。粋な浴衣に包まれて、のんびりと歌謡ショーを見ているに一票を投じます。
ここそこと後を着けて来るくらいなら、最初から全員で来たほうがいいだろうに。
横を見ると、郁海は興味津々という感じで周囲を見渡している。
「工場地帯が見えます。海に近いということは造船関係とかでしょうか?」
さすがです。目の付け所が違います。
この遊園地は海に面して立地している。周囲は海と工業地帯。そして港だ。大きな船がいくつも見える。
「そうですね、後はガスとか車とかでしょうか」
「タンカーで運びやすいように、ですよね。やはり流通に便利な立地は経費削減になりますからね」
ふむふむと頷いているが、どうにもこれは十代の会話ではない気がする。
「思うんですが、新品の車を船に載せるために運転していて、事故を起こしてしまったら……保険とかどうなるんでしょうね」
えーーと、十五歳の心配事ではありません。

まあ、その真剣な様子も可愛いのだから不問に処す。
「保険は入ってないと思いますよ。たぶん、運転している人に請求が行くんじゃないですか？」
もちろん、冗談だ。
思いっきり、作った笑顔で言えば吉野の真意をわかった郁海がぷっと吹き出す。
「その部署への辞令が来たら、私だったら断ります」
「郁海さんはその前に運転免許ですよ」
その言葉と共に列が前に進む。
木製の階段は不安定で、郁海の体がぐらりと揺れる。思わず支えるために出した腕に彼女の小さな体が収まる。豆粒の社長の体が大きく揺れた。
「郁海さん、よかったらどうぞ」
肩に回した腕を離して、右腕を曲げた状態で差し出せば、彼女は瞳を丸めて、そしてはにかんだような笑顔を浮かべた。「ありがとうございます」と呟いて、細い腕を俺の腕に絡ませる。
やわらかい。
――豆粒社長は大きな口を開けて、サングラスを落としていた。

「郁海さん、勘弁してください」
吉野はベンチに座って口元を押さえる。
うう。胃がトルネードだ。
さすがスカイブルートルネード。二回目ですでに顔が真っ青になってる気がするし、胃がぐるぐるもしている。

平気な様子の郁海はつまらなさそうに口元を尖らせた。
その様子も可愛い。
可愛いが胃が大揺れだ。
勘弁して欲しい。
はっと思いついて、吉野は郁海に提案をする。
「次はメタルグリフォンにしましょう！！」
吉野の言葉に郁海は瞳を瞬かせた。
「……大丈夫、なんですか？」
「大丈夫です。平気です。任せてください！！」
元気に言えば、郁海は瞳を二回瞬かせて、そして破顔した。
彼女の三半規管は相当鍛えてあるらしい。いつ鍛えたんだ。そうツッコミながら、腕を引いてくる郁海の様子を多少げんなり、残りは可愛いな～と思いつつ歩を進めた。

もちろん、俺がメタルグリフォンの列が建物に入る前に社長をとっ捕まえて、無理矢理郁海と乗せました。
嫌がる父親の腕を捕まえて、ジェットコースターに乗った郁海の笑顔は、ジェットコースターに設置された写真でしっかりと確認した。
とにかく、良い笑顔だったことは記すまでないだろう。

◇

月曜日、食堂でお弁当を開いていたら経理の佐藤さんがラーメンをトレイに乗せて前に座った。
「よ。昨日は社長に付き合って遊園地だって？」
にやりと笑うが、顔には『大変だな』という感情が明らかに載っている。
吉野は、社内では社長の一番のお気に入りの社員と思われている。それは間違いではないが、なんだか無性に否定したい気がするのはなんでだろう。
お気に入りというよりも、おもちゃ。
お気に入りというよりも、アトラクション。
そういう言葉のが合っている気がする。
「郁海さんとしくんでメタルグリフォンに乗せましたよ」
にっこりと笑って言えば「真剣（マジ）かっ！？」と大爆笑された。
「真剣（マジ）です」
生真面目に答えれば、佐藤は味噌ラーメンに大量の七味をかけながらげらげら笑っている。
もっと真面目なイメージだったのだが、巴さんといい佐藤さんといい会社での顔とプライベートの顔が違い過ぎる。
「どうだった？　社長のことだから乙女みたいな悲鳴あげたんじゃねーか？」
にしし、と笑いながら佐藤はチャーシューを口に放り込む。
社長、社員にどんなイメージを抱かれているんですか。
乙女みたいな悲鳴って……確かに、あの日、バリトンのたいそう渋い『きゃ～』という悲鳴が聞こえたような聞こえなかったような……幻聴でありますように。
「郁海さんの前でしたから、顔面蒼白にして恐怖に耐えていたそう

ですよ」
「あれ、吉野さんは乗ってないの？」
ぱちくりと瞬かせるのを眺めながら、吉野は弁当箱の甘い玉子焼きを咀嚼して飲み込む。
「乗らないつもりの社長を呼んで、強制的に代わらせました」
まあ、そんなもんだろう。
あれは正直、だまし討ちだ。
郁海にはトイレに行くといって列から離れ、無理矢理社長を引っ張り出して、彼女の腕に押し付けたのだ。
社長と郁海の間にどんなやり取りがあったかは知らないが、その後は匠家と吉野家の合同家族旅行に変更になった。まだ身長の足りない祥真に合わせてティーカップやメリーゴーランド、気球の形の乗り物や子供向けのコースターなどに乗ることが多かったのはなんだか楽しみにしていた郁海には申し訳ない気もしたが、楽しそうに笑っていたからそんなに気分を害してはいないだろう。
そう、思いたい。
夕方にはのんびりほっこりと温泉を満喫していた綾子さんと合流してご飯を食べて、社長が運転する車で帰宅した。行きの電車＆バスに比べて楽だったのは言うまでもない。
やっぱり、車の免許は早めに取得しよう。
「……吉野さんはプライベートまで社長と一緒で疲れない？」
その質問に吉野は首を傾げた。
「え？」
「土日くらい、一人でゆっくりしたいって思わないのか？」
佐藤の質問は吉野には意外だった。
一人でいたいというよりは家族と居たいとは思うけれど……
「……いえ」
つい、反応が遅れる。
「俺はさ、開発に兄がいるんだけど……正直に言って会社では顔を合わせたくない。学部が違うから同じ部署にはならないだろうと

は思ってたけど、内定が決まって、辞令が出るまではけっこうビクビクしてた」

「兄弟とかで同じ部署にはしないでしょうけど……」

なにせ、同じ部署内で結婚したらどちらかを転部するのが通常だから、兄弟だったらなおのこと同じ部署にはしないだろう。

あれ?

じゃあ、匠親子は?

その疑問は、吉野の奥のほうで燻る。

「まあ、社長親子のお守り役ができてよかったよ」

佐藤の呟きを、吉野は微苦笑でただ受け入れるしかなかった。

七月になった。
そろそろ、扇風機さまに登場してもらいたい頃だが、まだまだ夏祭りの団扇さまに頑張ってもらおう。
その団扇さまを桜良がぱたぱたと扇いでいる。
扇いでいる先は祥真だ。
今日は日曜日。
土曜日の夕方か夜から俺の狭いアパートで一泊して、日曜日の夕方に二人を連れて匠家に向かう。そういうパターンになりつつあるのだが、クーラーのない部屋ではこのスケジュールに限界が来るだろう。近いうちに。
「桜良は、進路をどうするつもりだ？」
吉野は中学三年生の妹に確認をする。
なるべくお金がかからない方が嬉しいが、だが、やっぱり妹には好きな道に進んでもらいたい。
「まだね、考えてる途中。だけどね、シャッチョサンが先行投資しようか？　って言ってくれてる」
桜良は団扇に手のひらを当ててパタパタと音を立てさせる。
「やきとり〜♪」
我が妹ながら、いまいちセンスがわからん。
いや、それよりも……。
「社長が？」
「うん。今は最低でも短大出ていないと就職に差支えが出るから、職人とか棋士とかスポーツ選手とか若い内からその道に進まないと損をする職業を目指しているんじゃないなら、進学した方がいいって」
「……そっか」
確かに今は就職難。

一番最初の就職で正社員になれないと相当苦労すると巴さんが言っていた。
あまり実感が湧かなかったけれど、これから未来に就職を予定するものはそういうことも考えないといけないのか。
「桜良は、なにかなりたい職業ってあるのか？」
桜良は大きな瞳で見つめてくると、口を開けて、そして閉じた。
「どうした？」
遠慮するな。という気持ちを込めて促せば、桜良はいったん俯いて、そして顔を上げた。
「薬剤師」
短い言葉に息を呑む。
「薬剤師か……」
なんというか聞くだけで、なるまでにお金のかかりそうな職業だ。
「大学はね、六年かかるの。奨学金制度もあるから、そういうのを使って自分でできるだけ返せるように頑張る……だから」
桜良は力なく団扇をパタパタしながら口篭る。
その表情を見て苦笑を零す。
手のひらで自分によく似たふわふわの頭を撫でるが、髪の毛に絡み付いてがしっという音がしそうだった。
「誰が反対するか……桜良が決めたんだったら、俺は応援する。安心しろ」
微笑めば妹はぱっと顔を明るくする。
「やくざいし～？」
らくがき帖にくれよんでがしがし描いていた祥真が顔を上げて首を傾げる。
「そう。薬剤師。お姉ちゃんがそれになりたいんだって」
「やくざいしってつよい？」
なぜ、強い……
ツッコミたいが我慢する。
「強いに決まってるでしょ！　スカイブルートルネードとかメタル

グリフォンよりも強いんだから！！」
「比較対照がおかしいだろ」
吉野のちいさなツッコミは、弟の「すごい〜」という歓声に綺麗さっぱり無視された。

◇

「吉野くん、コピーお願いね」
「はい」
社長が差し出してきた用紙を受け取って、俺は首を傾げた。
「えーと、期限はいつまでで、いつお配りになりますか？」
「明日の午後イチの会議だから、昼休憩前には欲しいかな」
「何部必要ですか？」
「部長クラス以上の会議だから？」
「十四部に予備を含めて十五部でよろしいですか？」
「そんくらいかな〜」
「あと、拝見するとカラーでなくてもよさそうなので、白黒で印刷しますね。それから部長クラス以上ということは社内会議ですから裏紙でもいいですか？　もしくは両面印刷にします」
淡々と聞き返せば、社長は唇を尖らせた。
「吉野くん、つまんない」
どこの『カノジョ』みたいな物言いですか。そう思いつつも手持ちのメモに期限を書き込む。

「毎回、人を試すような依頼の仕方はしないで下さい」
郁海曰く、社長のように人を試すような依頼の仕方をする上司は往々にいるらしい。そして、期待通りの受け方をしなければ説教を、『あなたのためだから』という名目でしてくるのだ。
自分の怒りの矛先を『あなたのためだから』というオブラートに包んで向けてくる輩はどこにでもいる……らしい。
「社長、その会議で使う部屋の予約はされましたか？」
思いついて聞けば、社長は首を傾げた。
「では、確認もしておきますね」
吉野は一礼をして社長室を後にした。
「吉野くん、つまんな～い」
駄々っ子の声は無視だ。

総務の自分の机に戻って、会議室の空き状況を確認する。
「うわ！」
思わず声が出る。
明日の午後イチで使える十五名（十四名プラス社長で十五名だ）が入れる部屋は残り一室だった。
慌てて端末から申請をする。
あとでちゃんと予約できているか確認をしないといけない。念のために次の時間帯で一室予約も入れておく。メモに書き込みをして、モニタに貼っておく。後で取れていたら予備の予約解除をしておかないといけない。
「お、部長会議の予約？」
「はい。取れてるといいんですけど」
後ろからモニタを覗き込んでくる畠山に苦笑を返す。
「実際は、会議室ってみっちりと予約で埋まってるんだよね～。レディースコミックみたいに会議室でうにゃむにゃなんてムリムリ」

あはは～と笑いながら畠山は吉野の机の上にマシュマロを置いていった。
「……ありがとうございます」
レディースコミックでは会議室でうにゃむにゃなシーンがあるのか……
吉野は、マシュマロの包装を千切って、中味をぽいっと口の中に放り込んだ。そして、口の中に人工甘味料と香料が満ちる。

「吉野さん、手が空いたのでお手伝いしましょうか？」
空いている会議室を予約して、明日の会議の資料を束ねていると郁海がひょっこりと顔を出した。
意外と分厚い会議資料はコピーをするのも結構大変だった。
コピーをする時に仕分けというのか分ける機能の付いたコピー機が壊れているため、今回の資料作成は手作業だ。
「郁海さん」
「こういうことは、複数でやった方が早いですからね」
さすが有能なお局さま。にっこり笑顔が頼もしい。
郁海の服装はいつものお局スタイル。黒いアームカバーが眩しいぜ。
「部数は十五部で、三十六ページになります」
「今回はけっこう薄めですね。いつも無駄に厚いんですが……そういえばユネスコの統計データでは、「４９ページ以上」を本と呼ぶそうですよ。それ以下の場合はブックレットとかパンフレットと言うそうです。図書館司書の資格試験でよく出る問題だそうです」
最近気が付いたのだが、郁海のこの蘊蓄は語りたいのではなく、話題提供のことが多い。
「そうなんですか……じゃあ、この資料はパンフレットですか？」
「製本したらそう言うのかもしれませんが、この状態では資料が正

しい気もします」
くすりと笑う。その様が以前のようなぎこちなさもなく、落ち着いて見えるのが微笑ましい。社長にショッピングモールで愛を叫ばれる前の郁海は、なんというか本当に不安定だった。けれど、最近の彼女は安定しているように見える。
「じゃあ、始めましょうか。これだけのページ数ですと並べて二人で取っていくよりも順番に机に置いたほうが早いですね。半分にして十八ページずつ並べていきましょう」
「それでもいいですけど、机が四角に並んでいるなら並べていった方が早くありませんか？」
「そうかもしれませんね」
下から順に1・3・5・7・9・11・13・15・17・19・21・23・25・27・29・31・33・35と並べる。
「……でも、やっぱりかなり歩くことになりますから、机を寄せて半分ずつのが早い気もします」
頭の中で四角に並べられた机に用紙を置いていって、終わったら回って束を手にしてまた置いていくという作業を浮かべてみる。うーーむ。まるでハンカチ落しのようだ。
郁海のやり方のが少人数には合っているようだ。
机を動かして、吉野は1から17まで、郁海が19から35までを手にする。左から右に五部、それを三段にして並べていく。机の上に同じ用紙が十五枚広がる様は壮観だ。
その上に次のページを並べていく。
コピーした用紙を束ねるには複数のやり方がある。
たとえば全部で八ページの束だとすると、机の上に

2・4・6・8

と並べて2の上に4、6、8と取っていく方法と

2・2・2・2

と並べてその上に4を置いて6を置いて8と置くという方法がある。
前者は、部数が大量にある場合は少しでも完成品が増える。
後者は、ページ数が大量にある場合などでコピーが間に合わない時などに向いている。
今回は俺と郁海と二人でやるから後者の方法を二人で分けてやることにしたのだ。
いったん、終わってから吉野と郁海が並べた束を合わせるという作業が必要になるが、並べていくよりも動きは少なくなる。
黙々と担当分を並べていると、扉からぼそぼそとした声が聞こえてくる。
「うにゃむにゃになんてならないじゃないか！」
「なりませんね～」
「つまんない～」
「つまらないじゃないぞ、俺の可愛いお姫様に手を出すなんて一万光年早い！」
俺は、溜息を盛大に吐き出した。
一万光年って、それは光の速さです。文章的には一万年早いのが適当です、社長。
「……郁海さん、社長と畠山さんと曽我さんがぜひともお手伝いをしたいそうです」
溜息混じりにそう言えば、郁海の背後に久し振りに般若さまが登場した。
お久し振りです。般若さま。
吉野は慣れた手つきで大型ホッチキスを操った。
会議室には郁海の説教の声と、ホッチキスをバッチンバッチン留める音が響いたのであった。

ホッチキスを留め終えた資料を束ねて、入り口を見ればそれぞれは部署に戻ったらしい。
本当に暇人だ。
いや、本当は暇ではないはずなのだが、わざわざちょっかいを入れるために他の仕事を早く仕上げて時間を作っているのだ。
そんな時間を作れるなら、普段からもっとペースを上げて仕事をして欲しい。

吉野は、微苦笑を浮かべる。
目に映る紙の束。
――どんな顔して『好きだ』なんて言える。
仕事を始めて、三ヶ月が過ぎたばかり。自分の至らなさばかりが目に付いて、完璧に仕事をこなせる彼女に劣等感を抱くばかりなのに……。
手にした書類をとんとんとそろえる。
守りたいとか、強くなりたいとか、そんなのがまるで遠い先のことのような気がしてしまう。
毎日の業務をこなすことに必死で、自己研鑽とか資格を取るなんて、夢のまた夢。
こんなんじゃ、あまりにも情けなくて、彼女に気持ちを伝えるどころじゃない。
パタン。
扉が閉まる音が響く。
「吉野さん」

顔を上げれば、そこにはお局ではない表情をした『匠郁海』がいた。
「……郁海さん？」
かたんと音をさせて、隣のパイプ椅子に座る。
この会議室はあまり人気のない部屋で、人気のない理由は室内の椅子がパイプ椅子だからだ。長時間の会議には向いていない。
「仕事は、いかがですか？」
尋ねてくる内容はお局さまだ。
いかがですか？　と聞かれても返答に困る。
楽しいですとも言い切れないし、つまらないというのも違う。やりがいがあるかと言われれば社長のお守りが主なので返答に困る。
口篭る俺を見て、郁海は小首を傾げた。
「吉野さんは、会社でもプライベートでも私たち親子の面倒を見なくてはいけないでしょう？　疲れませんか？　大丈夫ですか？」
意を決したかのように郁海が真剣な顔で聞いてくる。
「私……友達もいなくて、今まではそれでもよかったんですが、それじゃさすがにまずいだろうって頑張っているんですが、吉野さんみたいに人の話を聞くのが上手じゃなくて……息が詰まりませんか？」
「は？」
彼女の方向違いの質問に口がぽかーーんと開いてしまう。
「だから、頑張って聞く技術とか人の話の聞き方とか勉強して実践しているつもりなんですが……本当にへたくそで」
頬に手をあてて郁海は泣きそうな顔をしている。
「俺は、別に人の話を聞くのが上手いわけじゃありませんよ」
「そんなことありません。桜良ちゃんも祥真くんも吉野さんの前だといろいろ喋りますが、私には打ち解けてもらえなくて、あんまり喋ってもらえません。父だって吉野さんにはいろいろ喋っていますし、他の人だって、わざわざ吉野さんと喋るために食堂で近くに座るじゃありませんか」

膝に手を置いて、彼女は言い募る。
「私は、頭が固くて、会話だって硬くなってしまいますし、口調だって硬いし……でもやわらかくする方法がよくわからなくて……だから……」
郁海はそこまで言って、そして口篭った。
彼女は、彼女なりに俺と自分を比べていたのだろう。
郁海は、郁海なのだから。
そんなこと、気にしなくていいのに。
……誰も、彼女にはならない。
そして、反対に、誰も俺にはなれないんだ。
簡単なことなのにすぐに忘れてしまう。
単純なことなのにすぐに見落としてしまう。
吉野は微笑を浮かべた。
「郁海さんには、郁海さんの良さがいっぱいありますよ」
「え？」
郁海が顔を上げて、そして赤面をする。
「郁海さんは、郁海さんのままで大丈夫です」
「……え？」
なんだか、このちっちゃなお局さまを見ていると、それだけで微笑ましくなってくる。
毎日の業務に必死だっていいじゃないか。
完璧なんて、ありえない。
なんで、そんなことを忘れてしまうんだろう。
「桜良と祥真が懐いてないなんて気のせいですよ。本当はあいつら、もっと郁海さんと仲良くなりたいんです。だけど、俺が言うのも妙だけど、変に遠慮しちゃうんですよ……あと、一ヶ月もしたら本性出してべたべたしてきますから、安心してください」
にっこりと笑って言えば、郁海は眉根を寄せたまま見上げてくる。
「吉野さんは？」
「は？」

「吉野さんは、本性出してべたべたしてくれないんですか？」
したいです。
そう即答を心の中でするが、口にはできない。
じっと思わず見つめてしまうと、郁海の頬というか……顔面が真っ赤になった。
「な、なんでもないです！！」
慌てて立ち上がって、走り去る背中を見て、吉野は顔を赤くした。
……べたべたして、いいのか？
閉じられた扉を見て、赤くなった顔に手をあてる。
（どうしよう……仕事に戻れない）
絶対に突っ込まれる。
もうちょっと……予約が取れている時間までここにいよう。
そう決めて、机に突っ伏した。
顔が熱い。
猛烈に熱い。

次の休みに、彼女を誘ってどこかに出かけよう。
（北苑市憩いの農園か、五色さかな市場がいいかな……）
桜良と祥真も連れて出かけよう。
社長は……どうしようと思いつつも、それは郁海と相談する方がいいかなと思った。

まあ、休みの過ごし方は人、それぞれだもんな。
吉野は体を起こすと、赤くなった頬を叩いて、そして崩れた顔を懸命に治す努力をした。

おしまい

覆面座談会：就活戦線離脱せよ！！！

「気に入りません！」
「郁海さん、いきなりそれはないんじゃない？」
のほほんと笑いながら畠山がお茶をする。
「タイトルが気に入りません！！　社会人なら、覆面など以っての他です」
「……そこですか」
吉野はお茶を配りながら瞳を瞬かせる。
「自分の素性も名乗れないようなクレームなら、それは嫌がらせと一緒です。正々堂々と素性を明かして製品に対して問い合わせる、返品を交渉するなら大人の対応でしょうが、素性を隠して文句だけ言うなど卑怯なことです」
「じゃあ、素顔座談会でいいんじゃない？」
娘に大甘な社長がのんびりと言う。
「えーー！！　せっかく仮面を用意したのにぃ」
「経費では落としませんからね」
経理部の巴がばっさりと曽我の駄々をシャットアウトする。
「巴ちゃん、酷い！！」
「大の大人がハンカチ噛み締めて泣く仕草をしたところで気持ちが悪いだけです。第一、曽我さんのその趣味の悪いスーツはどこでご購入されているんですか？」
じろりと巴が睨みつけるが効果はない。
こんなふうに喜んでいるのだから。
「巴ちゃんの辛辣な物言いが好き！！」
「……セクハラで訴えろということですね。郁海さん、法的手段に出てもいいですか？」
「あまりマスコミが騒がないようにご配慮をお願いしますね」

淡々としているのに内容の怖い会話に、吉野は口角を引き攣らせる。
「……あの、ちゃん付けで呼ぶのって……」
吉野が話題を変えようと曽我に聞いてみる。
「え？　今ってプライベートでしょ？　社長？」
「当たり前です。このような座談会に残業手当など発生するわけありません」
ピシリとした郁海の物言いに、社長はにっこにっこと満面笑顔だ。気持ちが悪い。
「とりあえず、法的手段は裁判代がかかるので今のうちは保留して差し上げますので、さっさと話題を進めてください」
「あ、はい！」
幕間から登場の巴はかなり口が悪い……吉野は（怖え～）と思いながら手元の書類を見る。もちろん、この紙は裏紙だ。
「えーーと、座談会の内容は就職活動へのアドバイスだそうです」
「アドバイス？」
曽我がテーブルに肘をつく。
「１：履歴書は直筆とパソコンで作成したのとどちらがいいですか？　だ、そうです」
「「「……」」」
「え～。直筆に決まってるでしょ」
社長以外の全員が沈黙した。
「直筆のがいいんですか？」
吉野はうっかりと社長に思ったことを聞いてしまう。
「当たり前だろう。平安時代のラブレターだって、最初は顔も見たことない、声も聞いたことないって状態から選ぶのに筆跡で判断したんだよ。それは今だって言えるよ。やっぱろ文字が大きな人は大胆だし、右肩上がりの人は神経質、文字が汚い人なんて仕事任せたくない。パソコンじゃその人の性格がわからないじゃないか。うちじゃ落ちる確率は高いよ」

社長は『うちじゃ』を強調する。
「確かにパソコンで作成されたものと、まったく同じ経歴の手書きで文字が丁寧なものがあれば、手書きを選ぶ確立が我が社では高いですね」
「けれど、必ずしも手書きがいいって訳じゃないわよ」
巴が珈琲を飲みながら言う。
「そうね。パソコンで作るって事はある程度パソコンができるという証明にもなるから、履歴書は手書きで、職務経歴書はパソコンっていうのが主流な感じよね」
畠山がポテトチップスをパーティ開けをしてひとつ摘んで隣の郁海に回す。
「百円ショップで販売している履歴書自体もA４にB５にといろいろありますからね。ただ、言えるのは写真だけはケチらないことですね」
「いたいた！　カラープリンタで出力した普通紙を貼り付けてきた人。せっこーーって思ったもの」
ノリのせいで紙がよたってたよ〜。と畠山が笑う。
「デジカメで撮って、自宅で印刷をされる方もいますが、せめて用紙くらいは印画紙などの高価な紙を使って欲しいものです」
「パソコン作成で普通紙に写真印刷して貼ってあると、数ある中の一社ですか……って訝しく思うもんな。そんな大量作成できる、量産体勢を履歴書で取られると、たくさんの中からお前が選んでいるのかって気分が悪くなる」
「とりあえず纏めると、履歴書は手書きで、職務経歴書はパソコンが主流。でも、写真はある程度しっかりした紙に印刷をするということでいいですか？」
「ええー。手書きだよ」
「別に全部パソコンでもいいんじゃないの？　下手な字で書かれるよりもパソコンのが読みやすいし」
吉野は同時に発せられた反対意見に頭を掻く。

「その辺りは、各社の採用担当者の好みが強いそうですよ」
さすがお局さま。フォローが早い。
「小さな会社や、採用担当者が四十、五十代の場合は手書きにして、大手などはすべてパソコンでも可という感じですか？」
「パソコンの場合は内容は余計に気を遣わないと駄目だね。淡々とした文章だとやる気がないって強く写るからな」
「そうですね。履歴書は自分という商品を売り込むプレゼンテーションの手段です。自分という商品をどう売り込むか。その会社が採用してどんなメリット・デメリットがあるか自分で想像できるくらいには、自分の良し悪しを把握して欲しいですね」
「そうだね、相手にこの人欲しいって思わせるなにか煌くものが必要だよね」
郁海の言葉に曽我がうんうんと頷く。
「不安な人は一度、赤の他人の社会人に見てもらうといいかもね」
「……それ、かなり難しいと思うんですが。まあ、なんとなく纏まったので次に行きましょう」
吉野はがさりと用紙をめくる。
「2：書類選考まで通るのに、面接で落とされます。どうしたらいいでしょうか？　だそうです」
「「「「笑顔」」」」
声が揃いました。
「これは演技力をつけた方がいいところだよね。相手を見て顔を輝かす。笑顔を浮かべる。貴方に会えて嬉しいっていう表情を乗せる。訓練で、できるから」
「訓練ですか？」
社長の言葉に吉野は瞳を瞬かす。
「そう、入り口から誰かが入ってきたら『○○さんだ！！』と会えて嬉しい人を思い浮かべて笑顔になる。そして真面目な顔に戻す。訓練訓練」
「訓練ですか……」

「暗い顔で面談室に入ってこられても嫌だもんな」
「最初の笑顔は肝心だよね」
うんうんと曽我と畠山が頷く。
「滑舌」
巴がぼそりと呟く。
「それも言えるね。ぼそぼそ喋る奴は勘弁だ」
社長が頷く。
「滑舌も訓練でなんとかなりますね。カラオケでシャウトする感じの曲？　を歌いまくるとか、アメンボアカイナアイウエオとかアエイウエオアオとかのアナウンサー用の発声練習をしてみるのもいいですね」
「郁海さん、シャウトする曲ってどんなのがあるの？」
畠山がにやりとわらって尋ねれば郁海はにっこりと笑って「三百六十五歩のマーチですね！」と答えていた。いやいやいやいや。
「……それ、シャウトしないから」
曽我さんのツッコミがありがたかった。
「後は姿勢とか、本当に見た目の清潔感とかよね」
巴が回ってきたポテトチップスをもっしゃもっしゃと食べている。
「髪の毛はさっぱりと、男の子なら短く、一度背広を脱いでフケとかも気にした方がいいわ。後は靴。ちょっとティッシュで拭くだけで違うわね。百円ショップで靴のケア用品と小さいコロコロは買っておいて持ち歩くのがオススメ。女の子はマニキュアとピアスね。しない方が好印象よ。おしゃれは個性を表すとかこだわる子がいるけど、親の金でおしゃれとか言われても片腹痛いわ。おしゃれなんて自分の正当な力で稼いでから余暇にするもんよ」
そのままもっしゃもっしゃと食べる。
「巴さん……」
その考え方はあまりにも、あれだろう。（日本語って便利）
「……あ、ごめん。食べ過ぎちゃった？」
「つ、次に行きますね。３：なにか持っていた方がいい資格はあり

ますか？」

「「「資格よりも実務」」」

「見事に揃ったわね〜。社長と郁海さんと巴さん」

「資格はあくまでも判断材料です。それですと学生さんは辛いでしょうが、学生時代にできることならアルバイトはしておくべきですね。できたら仕入れとかグループ長とか、使われるだけじゃなく、自分が束ねる仕事に就けるなら率先して行うべきです。そういうことを履歴書に書くのも、面接官に話題提供しますからね」

「家庭教師や塾のバイトでは説明の仕方の練習、レジなら接客の練習、納品などの梱包とかなら作業を効率よく行うことの練習ができるからね」

　曽我が回ってきたポテトチップスをぽいっと口に含む。

「資格ではありませんが、タイピングがある程度スムーズにできるのは、就職した後に楽になりますね」

「それは思いました。俺はものすごーーく苦労しました」

「休憩時間に必死にタイピング練習してましたもんね」

「家でもパソコン借りてやってたもんな……」

　匠親子の生温かい瞳がイタイ。

「バイトができない学生さんなら、学生生活で役職をするべきだよね〜」

　畠山が次の袋を開ける。プレッチェルと個別包装されたチョコレートだ。

　ここ、会社だよね？

「学祭の委員とか、ゼミの責任者とか、委員長とか、学級長とか、確かにやると就職に有利だって噂があったな……」

　曽我が呟く。

「部活動とかも、運動部のが就職に有利とか言うけど、確かに帰宅部よりも野球部やサッカー部などの部長・副部長のが採用する側としては欲しい気になるかも」

「運動部とかはともかく、チームワークとか、グループ作業とか、

そういうことに関わったことのある方の履歴書は、面接官としても質問することができるから印象に残りやすいですね」
「確かに印象は大事だな。特にいい印象。特化した印象」
社長が畠山が開けたチョコレートに手を伸ばす。
微妙に届かないのに気が付いて郁海が代わりに取って差し出した。
「サンキュ」
「社長、言ってくれたら投げたのに！」
畠山が笑う。その笑いに社長があーーんと口を開けた。
「じゃあ、投げてｖｖ」
「……うちの総務部ってお笑い担当？」
巴が頬杖を付いて苦笑する。
否定できません。
「設計とか経理とか事務とか、業務にパソコン作業が多い職業につきたい人は資格まで取らなくても簡単な書類くらいは作れるくらいにパソコンは触っておいた方が、後が楽でしょうね」
「それは言えてます。特に設計なんて……同期の当麻が開発に行ったんですけど、ものすごく大変そうです。パソコン覚えて、二次元ＣＡＤ覚えて、三次元ＣＡＤ覚えて、設計のルール覚えて、で覚えることがあり過ぎて、よく口から魂飛ばしてます」
「確かに、開発とか設計とか大変だよね。まあ、開発とか設計だけじゃないけど、業務でパソコン使う職種はいたるところにあるもんな」
「最後に、４：なにか心構えはありますか？」
「就職したら、仕事優先が当たり前っていう人種がいますから覚悟してください」
郁海さん……
「風邪引くだけでなっとらんとか怒る人いるよね～」
「いるいる！　インフルエンザなんて迷惑だから出てくるなって平気で言ってくるもんね。こっちが苦しんでいるなんて、ちっとも思ってないの。４０度越す熱って本当に大変なんだから！！」

「関節痛いし、息ができないし、起き上がることもできないし……臨死体験ってあんな感じかって思うもの」
「サービス業に居た時なんて、休みは週に一回と年末の十二月三十日から一月三日までだとかほざきやがって、それは会社の日程であって、個人の福利厚生とは別だろう！！　って思ったわよ！！！」
「納期が近いから深夜まで残業、残業手当が出ないなんて良く聞くしね」
「反対に納期が明日なのにノー残業デーだから帰れってね。だったら、もっと早く開発から仕事回して来いってね」
「おべっかばっかり使って仕事のできない上司っているわよね」
「口だけで昇進したんじゃないの～」
「子育て大変なのは想像するしかないけど、仕事ができないならしっかり言えってね。フォローするの超大変なんだから」
「子供がいるから帰宅して当たり前っていう正社員とかぶっ飛ばしたくなるわよ」
「働いて子育てして私って偉いっていう自己満足が見える人って鬱陶しいわよね」
「いるいる～。私はこの会社に噛り付かないといけないって断言してる人とか最低だよね。噛り付くんじゃなくて、実績上げて仕事を奪い取れって思うわよ」
「それなのに『同じ女なんだから協力して当たり前』って思ってる男性社員の多いこと。そういう男性社員って自分の奥さんの手伝いってしてるのかな？」
「してるわけないじゃん。人に押し付けて、頑張って働こうってしてる人の足を引っ張るだけ引っ張って当然の権利だって大きな顔をするような女の味方する奴が、そんな気の利いたことできるわけないでしょう」
「だよね～」
「仕事して、子育てして、家事もしてって確かに凄いけど、会社に来て仕事するのは当たり前だから。主婦だけ特別扱いなのは変よね」

「持病があるとか、体が不自由とかそういう人はそこまで大きな顔してないのにね」

「あーーあーーあーー」
「話が愚痴になってきたぞ、吉野くん！！」
「あ、はい！！！　巴さんと畠山さんの愚痴が始まったので、今回はこの辺までにしたいと思います。次お会いできるのはいつかわかりませんが、また次の機会で～！！！　では！！」

座談会終了！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7774h/

お局さまは１５歳？

2011年9月1日03時29分発行